埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第24集

国道122号バイパス関係

埋蔵文化財発掘調査報告
—I—

ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原

1983

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第24集

国道122号バイパス関係

埋蔵文化財発掘調査報告

—I—

ささら・帆立（ほだつ）・馬込新屋敷（まごめあらやしき）・馬込大原（まごめおおはら）

1983

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県における道路網の整備は，東北縦貫自動車道などの国土幹線道路と地域開発，環境整備にともなう国道，県道の新設，改良が計画され，着々と建設されています。

一般国道122号線も，東北縦貫自動車道の開通にともなう交通量の増加に対処するために，蓮田市閏戸から岩槻市馬込までバイパスが建設されることになりました。埼玉県教育局文化財保護課では，事前に線路内の分布調査を実施し，7か所の遺跡を確認し，慎重に協議を重ねた結果，発掘調査を実施し，記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は，埼玉県の委託を受けて，埼玉県教育委員会・財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施し，整理作業は，財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が，引き続き県の委託を受けて実施したものであります。

本書は，一般国道122号バイパス建設にともなう，ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原遺跡に関する報告書でありますが，多くの新しい事実が発見されて，記録保存の成果はもとより，これらの資料の数々は，学術研究に資するところが大きいものと思われます。

最後になりましたが，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，種々御協力をいただいた蓮田市教育委員会や地元の方々，埼玉県土木部道路建設課，杉戸土木事務所の方々に深く感謝いたします。

昭和58年3月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　長　井　五　郎

例　言

1. 本書は一般国道122号バイパスにかかる発掘調査のうち，蓮田市東・馬込に所在するささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は埼玉県教育委員会文化財保護課の調整を経て埼玉県の委託により，昭和54年11月から昭和55年3月までを埼玉県教育委員会が，昭和55年4月から昭和56年3月までを財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
3. 整理・報告書作成作業は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和 57 年度に実施した。

   なお，調査の組織は2ページに示したとおりである。
4. 出土品の整理および図の作成は鈴木敏昭・大塚孝司・宮昌之・青木美代子・藤原高志・鈴木孝之・西井幸雄・近江かおるが主にあたった。
5. 発掘調査における写真は鈴木敏昭・大塚・宮・青木・藤原・高橋好信が，遺物写真は大塚・宮・藤原・鈴木孝之が撮影した。
6. 本書の執筆者は，その執筆分担の文末に氏名を記した。
7. 本書に掲載した挿図類の縮尺は原則として次の通りである。

   遺跡　全測図（1/1000，1/400）

   遺構　住居址・土壙・竪穴遺構（1/60），炉穴（1/30），古墳（1/200），同内部主体（1/40）

   遺物　土器実測図（1/4，1/5），土器拓影図（1/3）
8. 本書の編集は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究部第5課の職員があたり，横川好富が監修を行なった。
9. 本書を作成するにあたり下記の方々から御教示，御助力を得た。

   小川良祐，柿沼幹夫，酒井清治，瀧瀬芳之，谷井　彪，山崎　武

凡　例

1. 住居址の主軸方向　　炉址に最も近い壁，あるいは貯蔵穴が近接する壁（通常この2つは住居址の相対する2辺となる）と垂直の方向を主軸方向とし，座標北から東西にずれる角度で表わす。

2. 炉址・貯蔵穴の位置　　まず，主柱穴が4個完存する場合は，それらを結ぶ対角線の交点，それ以外は住居址の対角線の交点を住居址の中心点と定める。炉址・貯蔵穴の中心点と住居址の中心点を結ぶ線が住居址の主軸方向から東にずれている角度を方向角と呼ぶ。住居址の中心点からの心々距離と，方向角とで，炉址・貯蔵穴の位置を表わす。

3. 貼り床　　住居址断面図及び床面状態図の貼り床の範囲は　　で表わす。

4. 遺物ドット　　住居址平面・断面図中●は土器，○は土玉を表わす。

5. 遺構新旧番号対照表（新←旧）

ささら遺跡	23←16	8←13	6←4	**馬込新屋敷遺跡**	2←3·8·9
土壙(Ⅱ区)	24←15	9←12	7←10	住居址	3←1·2·4
1←37	25←10	10←11	8←3·9	1←14	4←17
2←36	26←2	11←10	9←2	2←13	5←16
3←35	27←1	12←9	10←1	3←10	6
4←34	28←11	13←6	溝(Ⅲ区)	4←12	7←3
5←33	29←5	14←8	1←4·5	5←9	8←10·11
6←32	30←4	15←7	2←3	6←8	9
7←38	31←3	16←5	3←10	7←7	10
8←31	32←9	17←21	4←6	8←6	11←20
9←30	33←19	18←4	5←1·2	9←5	12←6·19
10←29	34←24	19←2	6←12	10←4	
11←27	35←12	20←3	7←6	11←3	**馬込大原遺跡**
12←28	36←7	21←1	8←21	12←1	住居址
13←26	37←6	古墳(Ⅳ区)	9←22	13←2	1←4
14←22	38←8	1←3	10←18	14←11	2←5
15←25	住居址(Ⅱ区)	2←2	11←19	竪穴遺構	3←6
16←23	1←17	3←1	12←1	1←4	4←2
17←18	2←18	溝(Ⅱ区)	13←17	2←3	5←3
18←21	3←19	1←5	14←16	3←5	6←1
19←20	4←20	2←4	竪穴遺構(Ⅳ区)	4←2	
20←17	5←16	3←8	1←2	5←1	
21←14	6←15	4←6	2←1	溝	
22←13	7←14	5←7		1←22	

目　次

序

例　言

凡　例

Ⅰ　発掘調査に至るまでの経過 …… 1

Ⅱ　遺跡群の立地と環境 …… 3

Ⅲ　ささら遺跡 …… 7

1.　遺跡の概観 …… 8
2.　発掘調査の経過 …… 10
3.　遺構と出土遺物 …… 13
（1）　先土器時代の遺物 …… 13
（2）　縄文時代の遺構と出土遺物 …… 18
（3）　弥生時代末～古墳時代初頭の遺構と遺物 …… 63
（4）　古墳と出土遺物 …… 111
（5）　近世の遺構と出土遺物 …… 123
4.　結　語 …… 127

Ⅳ　帆立遺跡 …… 139

1.　遺跡の概観 …… 140
2.　発掘調査の経過 …… 140
3.　遺構と出土遺物 …… 142
（1）　遺　構 …… 142
（2）　遺　物 …… 146
4.　結　語 …… 169

Ⅴ　馬込新屋敷遺跡 …… 171

1.　遺跡の概観 …… 172

2. 発掘調査の経過 …… 174
3. 遺構と出土遺物 …… 177
（1） 縄文時代の遺構と出土遺物 …… 177
（2） 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構と遺物 …… 181
（3） 近世の遺構と出土遺物 …… 213
4. 結　語 …… 222

Ⅵ 馬込大原遺跡 …… 225

1. 遺跡の概観 …… 226
2. 発掘調査の経過 …… 228
3. 遺構と出土遺物 …… 229
（1） 縄文時代の遺構と出土遺物 …… 229
（2） 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構と遺物 …… 263
（3） 中近世の遺構と出土遺物 …… 272
4. 結　語 …… 274

Ⅶ ささら・馬込新屋敷・馬込大原遺跡の土師器
X線回析分析・電子顕微鏡観察 …… 277

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡分布図…… 5

ささら遺跡

第２図　ささら遺跡全測図（1：1000）…… 9
第３図　ささら遺跡全測図（1：400）……11
第４図　先土器時代石器（１）……14
第５図　先土器時代石器（２）……15
第６図　先土器時代石器（３）……16
第７図　1～13号土壙 ……19
第８図　14～26号土壙……21
第９図　27～38号土壙……23
第10図　1・2・3号土壙出土土器 ……25
第11図　7・11・15・19号土壙出土土器 ……27
第12図　25・26号土壙出土土器……28
第13図　27・29・37号土壙出土土器……29
第14図　19号土壙出土土器……31
第15図　26・35号土壙・１号埋甕出土土器…33
第16図　１号埋甕……34
第17図　Ⅳ区集中出土土器（１）……34
第18図　Ⅳ区集中出土土器（２）……35
第19図　Ⅳ区集中出土土器（３）……37
第20図　Ⅳ区集中出土土器（４）……39
第21図　Ⅳ区集中出土土器（５）……40
第22図　グリッド出土土器（１）……41
第23図　グリッド出土土器（２）……44
第24図　グリッド出土土器（３）……45
第25図　グリッド出土土器（４）……48
第26図　グリッド出土土器（５）……49
第27図　グリッド出土土器（６）……51
第28図　グリッド出土土器（７）……52
第29図　グリッド出土土器（８）……53
第30図　グリッド出土土器（９）……55
第31図　グリッド出土土器（10）……57
第32図　ささら遺跡出土土製品……58
第33図　ささら遺跡出土石器（１）……59
第34図　ささら遺跡出土石器（２）……61
第35図　１号住居址……64
第36図　１号住居址出土遺物……65
第37図　２号住居址……66
第38図　２号住居址出土遺物……66
第39図　３号住居址……68
第40図　３号住居址床面状態図……69
第41図　３号住居址出土遺物……69
第42図　４号住居址……69
第43図　５号住居址……70
第44図　５号住居址床面状態図……71
第45図　５号住居址出土遺物……71
第46図　６号住居址……71
第47図　６号住居址床面状態図……72
第48図　６号住居址出土遺物……72
第49図　７号住居址……74
第50図　７号住居址出土遺物……74
第51図　８号住居址……75
第52図　８号住居址床面状態図……76
第53図　８号住居址出土遺物（１）……76
第54図　８号住居址出土遺物（２）……77
第55図　９号住居址……78
第56図　９号住居址床面状態図……79
第57図　９号住居址出土遺物（１）……79
第58図　９号住居址出土遺物（２）……80
第59図　10号住居址……82
第60図　10号住居址床面状態図……83
第61図　10号住居址出土遺物（１）……83

第62図　10号住居址出土遺物（２）……84
第63図　11号住居址……84
第64図　11号住居址床面状態図……85
第65図　11号住居址出土遺物（１）……85
第66図　11号住居址出土遺物（２）……85
第67図　12号住居址……86
第68図　12号住居址床面状態図……86
第69図　12号住居址出土遺物……87
第70図　13号住居址……88
第71図　13号住居址出土遺物……89
第72図　14号住居址……91
第73図　14号住居址出土遺物……91
第74図　15号住居址……93
第75図　15号住居址出土遺物……94
第76図　16号住居址……96
第77図　16号住居址床面状態図……97
第78図　16号住居址出土遺物……98
第79図　17号住居址……99
第80図　18号住居址……100
第81図　18号住居址床面状態図……101
第82図　18号住居址出土遺物……101
第83図　19号住居址……103
第84図　19号住居址出土遺物……104
第85図　20号住居址……105
第86図　21号住居址……106
第87図　21号住居址出土遺物（１）……107
第88図　21号住居址出土遺物（２）……108
第89図　掘立柱建物址……110
第90図　１号墳全体図……112
第91図　１号墳周堀土層図……113
第92図　１号墳内部主体……114
第93図　１号墳内部主体出土遺物……115
第94図　１号墳周堀出土須恵器……115
第95図　１号墳周堀出土鋤先……116
第96図　２号墳全体図……116
第97図　２号墳周堀エレベーション図……117
第98図　３号墳全体図……118
第99図　３号墳周堀土層図……119
第100図　３号墳内部主体……120
第101図　３号墳内部主体出土遺物……121
第102図　３号墳周堀出土須恵器……122
第103図　Ⅱ区溝土層図……124
第104図　Ⅲ区溝エレベーション図……125
第105図　１号竪穴遺構……126
第106図　２号竪穴遺構……126
第107図　Ⅲ区井戸……126

帆立遺跡

第108図　帆立遺跡全測図……141
第109図　溝平面図・土層断面図……143
溝110関　溝関連ピット土層断面図，
土壙平面図・土層断面図……145
第111図　帆立遺跡出土石器……147
第112図　帆立遺跡出土縄文土器（１）…148
第113図　帆立遺跡出土縄文土器（２）…149
第114図　帆立遺跡出土縄文土器（３）…151
第115図　帆立遺跡出土縄文土器（４）…153
第116図　帆立遺跡出土縄文土器（５）…155
第117図　歴史時代の遺物（１）……157
第118図　歴史時代の遺物（２）……158
第119図　歴史時代の遺物（３）……159
第120図　歴史時代の遺物（４）……161
第121図　歴史時代の遺物（５）……163
第122図　歴史時代の遺物（６）……165
第123図　歴史時代の遺物（７）……167

馬込新屋敷遺跡

第124図　馬込新屋敷遺跡全測図
（1：1000）……173
第125図　馬込新屋敷遺跡全測図
（1：400）……175
第126図　1・2号炉穴……177
第127図　１号炉穴出土土器……178
第128図　グリッド出土土器……179

第129図　1号住居址…… 182
第130図　1号住居址出土遺物…… 182
第131図　2号住居址…… 183
第132図　2号住居址出土遺物…… 185
第133図　3号住居址（1）…… 186
第134図　3号住居址（2）…… 187
第135図　3号住居址出土遺物（1）…… 189
第136図　3号住居址出土遺物（2）…… 191
第137図　3号住居址出土遺物（3）…… 193
第138図　4号住居址…… 192
第139図　5号住居址…… 193
第140図　5号住居址出土遺物…… 193
第141図　6号住居址…… 194
第142図　6号住居址出土遺物…… 194
第143図　7号住居址…… 195
第144図　7号住居址出土遺物…… 196
第145図　8号住居址…… 197
第146図　8号住居址出土遺物（1）…… 198
第147図　8号住居址出土遺物（2）…… 200
第148図　9号住居址…… 201
第149図　9号住居址出土遺物…… 202
第150図　10号住居址…… 203
第151図　10号住居址出土遺物…… 204
第152図　11号住居址…… 205
第153図　11号住居址出土遺物…… 205
第154図　12・13号住居址…… 206
第155図　12号住居址出土遺物（1）…… 207
第156図　12号住居址出土遺物（2）…… 207
第157図　13号住居址出土遺物…… 208
第158図　14号住居址…… 209
第159図　14号住居址出土遺物（1）…… 211
第160図　14号住居址出土遺物（2）…… 211
第161図　1号竪穴遺構…… 213
第162図　2号竪穴遺構…… 214
第163図　3号竪穴遺構…… 215
第164図　4号竪穴遺構…… 215
第165図　5号竪穴遺構…… 216
第166図　溝エレベーション図…… 217
第167図　1号溝平面図・土層断面図…… 218
第168図　1号溝出土藍甕…… 219
第169図　3号溝出土・表採内耳土器…… 219

馬込大原遺跡

第170図　馬込大原遺跡基本土層図…… 226
第171図　馬込大原遺跡全測図(1：400)… 227
第172図　1～4号炉穴・2号土坑…… 230
第173図　1号住居址…… 231
第174図　1号住居址出土遺物…… 232
第175図　2号住居址…… 233
第176図　2号住居址出土遺物（1）…… 234
第177図　2号住居址出土遺物（2）…… 235
第178図　2号住居址出土遺物（3）…… 236
第179図　2号住居址出土遺物（4）…… 236
第180図　3号住居址…… 237
第181図　3号住居址出土遺物（1）…… 238
第182図　3号住居址出土遺物（2）…… 239
第183図　1号土坑…… 240
第184図　1号土坑出土土器…… 241
第185図　グリッド出土土器（1）…… 243
第186図　グリッド出土土器（2）…… 244
第187図　グリッド出土土器（3）…… 245
第188図　グリッド出土土器（4）…… 247
第189図　グリッド出土土器（5）…… 249
第190図　グリッド出土土器（6）…… 250
第191図　グリッド出土土器（7）…… 252
第192図　グリッド出土土器（8）…… 253
第193図　グリッド出土土器（9）…… 255
第194図　グリッド出土土器（10）…… 256
第195図　グリッド出土土器（11）…… 257
第196図　グリッド出土土器（12）…… 258
第197図　グリッド出土土器（13）…… 258
第198図　馬込大原遺跡出土石器（1）… 258
第199図　馬込大原遺跡出土石器（2）… 260

第 200 図　馬込大原遺跡出土石器（3）… 261
第 201 図　4 号住居址…… 264
第 202 図　4 号住居址出土遺物（1）…… 265
第 203 図　4 号住居址出土遺物（2）…… 265
第 204 図　5 号住居址…… 266
第 205 図　5 号住居址出土遺物（1）…… 267
第 206 図　5 号住居址出土遺物（2）…… 267
第 207 図　6 号住居址（1）…… 268
第 208 図　6 号住居址（2）…… 269
第 209 図　6 号住居址出土遺物（1）…… 270
第 210 図　6 号住居址出土遺物（2）…… 271
第 211 図　板碑拓影図…… 272
第 212 図　3・4・5 号土壙…… 273
第 213 図　3 号土壙出土遺物…… 273
第 214 図　三角ダイヤグラム位置分類図… 279
第 215 図　菱形ダイヤグラム位置分類図… 280
第 216 図　Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム
…… 282
第 217 図　Mo-Ch，Mi-Hb 菱形ダイヤ
グラム…… 284

図　版　目　次

ささら遺跡

図版１　９・10，11，13・14，15・16・17，18，19，20，21号土壙
図版２　22，23，24，25，26，27，28，29号土壙
図版３　30・31，32・33・34，35・36，37，38号土壙，１号埋甕
図版４　33，26号土壙，１号埋甕出土土器
図版５　Ⅳ区集中出土土器
図版６　１号住居址，２号住居址
図版７　３号住居址，４号住居址
図版８　５号住居址，６号住居址
図版９　７号住居址，８号住居址
図版10　９号住居址，10号住居址
図版11　11号住居址，12号住居址
図版12　13号住居址，14号住居址
図版13　15号住居址，16号住居址
図版14　17号住居址，18号住居址
図版15　19号住居址，20号住居址
図版16　21号住居址，21号住居址遺物出土状態
図版17　掘立柱建物址
図版18　1，2，3，7，8，９号住居址出土土器
図版19　13号住居址出土土器
図版20　15，16，18，19号住居址出土土器
図版21　21号住居址出土土器
図版22　Ⅳ区全景，１号墳全景
図版23　１号墳内部主体，１号墳内部主体遺物出土状態
図版24　１号墳周堀鋤先出土状態，２号墳全景
図版25　３号墳全景
図版26　３号墳内部主体，３号墳内部主体遺物出土状態
図版27　３号墳内部主体遺物出土状態
図版28　１号墳内部主体出土遺物，１号墳周堀出土須恵器
図版29　３号墳内部主体出土鉄刀，３号墳内部主体出土遺物
図版30　Ⅱ区３・４・５号溝，Ⅱ区３・４号溝

図版31　Ⅲ区北端
図版32　Ⅲ区５溝，Ⅲ区井戸址
図版33　１号竪穴遺構，２号竪穴遺構

帆立遺跡

図版34　溝全景（南西方向から），溝遺物出土状態
図版35　4，5 号土壙遺物出土状態
図版36　4，5号土壙出土遺物
図版37　グリッド出土土器（1～25，26～49）
図版38　グリッド出土土器（50～67，68～88）
図版39　グリッド出土土器（89～109，110～122）
図版40　歴史時代遺物（１）
図版41　歴史時代遺物（２），（３）
図版42　歴史時代遺物（４）

馬込新屋敷遺跡

図版43　1・2号炉穴
図版44　１号住居址，２号住居址
図版45　２号住居址遺物出土状態
図版46　３号住居址，４号住居址
図版47　５号住居址，６号住居址
図版48　７号住居址，８号住居址
図版49　９号住居址，10号住居址
図版50　11号住居址，12・13号住居址
図版51　12・13号住居址，14号住居址
図版52　2，3 号住居址出土土器
図版53　6，7，8，9，10号住居址出土土器
図版54　12，14号住居址出土土器
図版55　２号溝，３号溝
図版56　１号溝
図版57　１号溝出土石臼，藍甕
図版58　３号溝出土土器，１号溝出土藍甕

馬込大原遺跡

図版59　１号炉穴，２号土壙・２号炉穴，3号炉穴，4号炉穴，１号土壙，１号埋甕
図版60　１号住居址，２号住居址
図版61　２号住居址埋甕，３号住居址
図版62　２号住居址出土土器，3号住居址出土土器
図版63　グリッド出土土器

図版64　4号住居址，4号住居址遺物出土状態
図版65　5号住居址，6号住居址
図版66　4，5，6 号住居址出土土器
図版67　1，2 号板碑出土状態
図版68　3号板碑出土状態，3号土壙出土土器

I　発掘調査に至るまでの経過

東北縦貫自動車道の開通に伴い一般国道122号線の交通量は一段と増加した。特に蓮田市内は渋帯が著しく交通量緩和の対策が要望されている。

埼玉県では，このような状況に対処するために，一般国道122号線蓮田市内のバイパス建設を計画した。道路建設などの開発事業に対して，文化財保護課では，文化財の保護に支障が無いよう事前の連絡調整を密接に実施している。

昭和50年10月29日付け道建第543号をもって「一般国道122号線（蓮田市内）建設予定地内の埋蔵文化財の所在について」道路建設課長から文化財保護課長へ照会がなされた。文化財保護課では，遺跡地図と照合し検討した結果を，昭和51年２月４日付け教文第960号をもって大旨下記のとおり回答した。

（１）　建設予定地内には現在７箇所の周知遺跡が所在する。１，蓮田市No 24遺跡　２，蓮田市No 19遺跡　３，蓮田市No 20遺跡　４，蓮田市No 10遺跡　５，蓮田市No 11遺跡　６，蓮田市No 4遺跡　７，蓮田市No 3遺跡

（２）　詳細については，さらに現地調査を実施する必要があること。

その後，両課において現地調査を行いながら，これらの遺跡の取扱いについて協議を重ねた結果，路線変更が困難であるため，やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することが決定した。

この決定を受けて，道路建設課長から昭和54年４月19日付け道建第120号をもって「一般国道122号（蓮田市地内）道路改良事業区域内における埋蔵文化財発掘調査について」協議がなされた。文化財保護課では，昭和54年10月１日付け教文第704号により，調査の期間，範囲，経費と文化財保護課が直営で実施することを回答した。

法的手続きを終了した後，昭和54年11月から最初にNo 7遺跡から発掘調査を開始した。

文化庁からは，昭和54年10月24日付け委保第5-3631号をもって調査通知を受理した旨の通知があった。

また，昭和55年からは増大する公共事業に対処するために設立された財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査は引継がれた。

（宮崎　朝雄）

発掘調査の組織

1. 発　掘（昭和54年度）

主体者	埼玉県教育委員会	教育長	石田正利
		教育次長	下総昇
事務局	埼玉県教育局文化財保護課	課長	杉山泰之
		課長補佐	奥泉信
			木戸一恵
企画調整	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第二係	栗原文蔵
			柿沼幹夫
			駒宮史朗
			井上尚明
庶務経理	埼玉県教育局文化財保護課	庶務係	太田和夫
			畔上敦志
			千村修平
発掘	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第三係	横川好富
			鈴木敏昭
			大塚孝司

発　掘（昭和55年度）

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理事長	関根秋夫
		副理事長	本郷春治
		常務理事	渡辺澄夫
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	伊藤悦光
			関野栄一
			福田浩
			本庄朗人
発掘	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横川好富
		調査研究第三課	水村孝行
			鈴木敏昭
			藤原高志
			宮昌之
			青木美代子

2. 整　理（昭和57年度）

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理事長	長井五郎
		副理事長	岩上進
		常務理事	渡辺澄夫
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	佐野長二
			関野栄一
			江田和美
			福田啓子
			福田浩
			本庄朗人
整理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横山好富
		調査研究副部長（兼調査研究第五課長）	小川良祐
			藤原高志

3. 協力者

蓮田市教育委員会，地元区長および地元住民

Ⅱ　遺跡群の立地と環境

ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原遺跡は大宮台地の東側の一支台である岩槻支台に立地する。岩槻支台は西側を綾瀬川，東側を元荒川によって解析された北西～南東に延びる細長い洪積台地である。4遺跡は岩槻支台中央のくびれ部東端，元荒川に面して位置する。

ささら遺跡は蓮田市東3丁目4224-3他に所在し，東北本線蓮田駅の東方400～700mである。この付近の台地は緩斜面をなして元荒川に移行するが，本遺跡はその東端に位置している。標高は平均12mであり，現在畑地として利用されている。帆立・馬込新屋敷・馬込大原の3遺跡は岩槻支台のくびれ部で東に張り出した舌状台地の東端に立地し，これら遺跡の東側は急斜面をなしている。帆立遺跡は蓮田市馬込八番1435-3他に所在し，ささら遺跡の南南東約250mに位置する。標高は13mである。馬込新屋敷遺跡は蓮田市馬込字七番1461他に所在する。標高は12.5～14.0mで，現水田面との比高差は約4mを測る。現在畑地・陸田として利用されている。馬込大原遺跡は蓮田市馬込字七番に所在する。標高は13.5m前後であり，現水田面との比高差は5.6mを測る。

さて，これら遺跡群の立地する岩槻支台，ひいては大宮台地周辺には各時代に亘る遺跡が濃密に分布している。そこで，これらの中から本遺跡群に関連する遺跡を抽出して概観してみたい。

まず，旧石器時代では，綾瀬川を挟んで本遺跡群と対峙する片柳支台上の尾山台遺跡(註1)で石器・剝片が数点出土しているのみである。

次に縄文時代になると，遺跡の数は爆発的に増大する。早期では元荒川左岸の慈恩寺支台の南端の諏訪山遺跡(註2)，片柳支台の稲荷原(註3)・小深作前遺跡(註4)がある。諏訪山遺跡では住居址・炉穴などから野島式土器を主体に，条痕文系土器が多量に出土している。また，稲荷原遺跡では撚系文系土器を中心とする早期縄文土器が多数検出されている。

前期になると遺跡数はさらに増大する。本遺跡群の立地する岩槻支台では，タイプサイトとして知られる関山貝塚(註5)・黒浜貝塚(註6)をはじめ，綾瀬貝塚(註7)・掛貝塚(註8)などがある。掛貝塚では黒浜式・諸磯a式・同b式の住居址が検出されている。慈恩寺支台では，その南端に諏訪山貝塚(註9)・桜山貝塚(註10)・南遺跡(註11)がある。諏訪山貝塚では諸磯b期の住居址3軒が検出された。桜山貝塚では貝層中より黒浜式土器，貝層下より早期野島式土器が主に出土している。南遺跡では花積下層・黒浜・諸磯a期の住居址20軒余りと貝塚2地点が検出されている。また，片柳支台では台地の東側縁辺部に貝崎貝塚(註12)・宮ヶ谷塔貝塚(註13)が見られる。貝崎貝塚では7ヵ所の地点貝塚と関山・諸磯期の住居址4軒などが検出されている。宮ヶ谷塔貝塚では二ツ木期の住居址4軒，炉穴・土壙群などが検出されている。

中期では，岩槻支台で黒浜椿山(註14)・馬込(註15)・西原(註16)・新曲輪遺跡(註17)，片柳支台で秩父山遺跡(註18)などが見られる。黒浜椿山遺跡は台地のほぼ中央に位置し，加曽利E期の住居址8軒などが検出された。馬込・西原遺跡は東北縦貫自動車道建設に伴い調査された遺跡で，いずれも台地の西側縁辺，綾瀬川に面して立地する。馬込遺跡では住居址2軒，土壙5基などが，西原遺跡では加曽利EⅠ期を主体とする住居址32軒，阿玉台・勝坂～加曽利EⅣ期にわたる土壙40基が

検出されている。新曲輪遺跡は台地の東側に位置し，加曽利ＥⅠ～Ⅱ期の住居址２軒が検出された。秩父山遺跡は台地の北東端に立地し，阿玉台・勝坂期７軒，加曽利ＥⅠ期10軒，ＥⅡ期10軒，ＥⅢ期２軒，合計29軒の住居址が検出された。

後期になっても遺跡数は多い。岩槻支台で黒浜椿山・雅楽谷(註19)・馬込遺跡，慈恩寺支台で裏慈恩寺(註20)・裏慈恩寺東遺跡(註21)，片柳支台で丸ヶ崎(註22)・小深作遺跡(註23)が見られる。黒浜椿山遺跡では住居址１軒，土壙１基が検出され，称名寺式土器などが発見された。雅楽谷遺跡は台地の中央に位置し，住居址・土壙群を検出した。住居址は掘之内Ⅰ期１軒，加曽利ＢⅠ期３軒，安行Ⅱ期１軒の合計５軒，土壙群は堀之内Ⅰ式～安行Ⅲb式の各時期に相当する。馬込遺跡では称名寺期の住居址１軒と土壙１基が検出されている。裏慈恩寺・裏慈恩寺東遺跡は台地の中央，南に向って開く谷の入口部に位置する。裏慈恩寺遺跡では２軒の住居址から堀之内Ⅱ式・加曽利BⅠ式・安行Ⅱ式の土器が検出されている。裏慈恩寺東遺跡は試掘調査で住居址３軒，土壙４基を完堀し，称名寺式・堀之内Ⅰ式の土器が検出された。丸ヶ崎遺跡は台地の北東側縁辺部に立地し，称名寺期の住居址１軒が検出された。小深作遺跡は台地中央付近に位置し，称名寺式・堀之内式・加曽利B式・安行Ⅰ式・安行Ⅱ式の土器が検出されている，

晩期になると遺跡数は減少する。関山貝塚・裏慈恩寺遺跡・小深作遺跡などが該当するが，本報告の遺跡群には直接関係しないので詳述しないことにする。

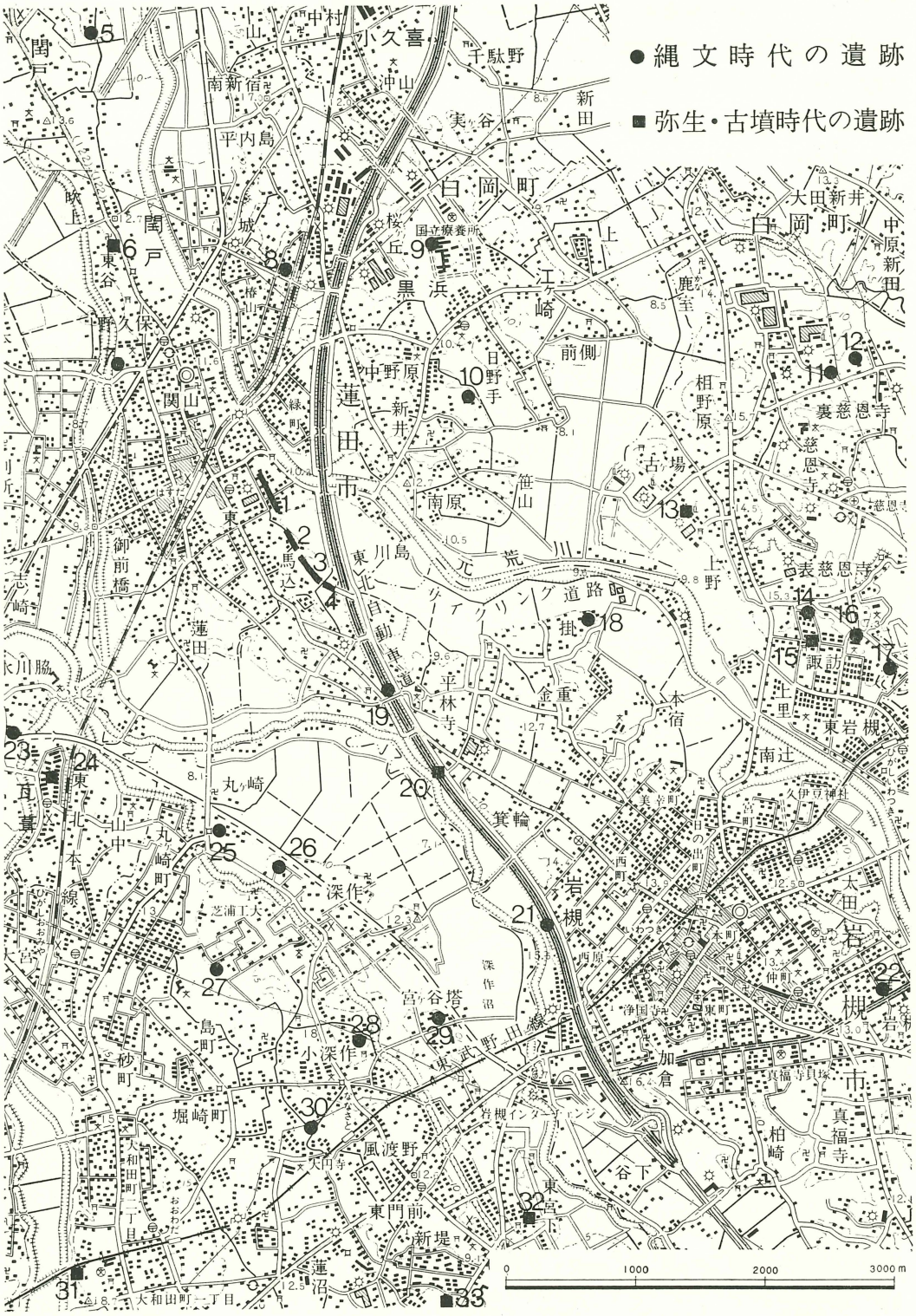
さて，弥生時代に入ると，中期の遺跡としては，岩槻支台の掛貝塚(註24)・馬込・西原遺跡，慈恩寺支台の諏訪山・南遺跡，片柳支台西端の大和田本村遺跡(註25)などが知られるが，これも本遺跡群との関連性は薄いので詳述を割愛する。

弥生時代後期になると，集落の立地は大宮台地・片柳支台を中心にするようになり，本遺跡群の近在には見い出せなくなる。ここでは岩槻支台の西原遺跡，片柳支台の中里(註26)・後遺跡(註27)について述べてみたい。片柳支台の東端に位置する中里遺跡では弥生町式後半期の住居址３軒が調査されている。中里遺跡の南西900ｍに位置する後遺跡では４軒の住居址を検出し，遺物は前野町期の土器が主体である。西原遺跡では前野町期の住居址10軒が検出されている。

古墳時代になると再び本遺跡周辺に集落の立地を見るようになる。岩槻支台では平林寺遺跡（註28)がある。綾瀬川を臨む台地の縁辺に位置し，前野町期１軒，五領期13軒の住居址などが検出している。土器の中には畿内系と考えられる叩き目を有するものがある。次に慈恩寺支台では上野(註29)・諏訪山遺跡がある。上野遺跡は台地の南西縁に位置し，五領期の住居址11軒などが検出された。このうち４号住居址からは200個近い土玉が１か所にかたまって検出されている。諏訪山遺跡では五領期の住居址23軒などが検出され，５号住居址から土玉が112個出土した。片柳支台では

周辺の遺跡地名表

蓮田市　1. **ささら遺跡**　2. **帆立遺跡**　3. **馬込新屋敷遺跡**　4. **馬込大原遺跡**　5. 綾瀬貝塚　6. 十三塚古墳　7. 関山貝塚　8. 黒浜椿山遺跡　9. 雅楽谷遺跡　10. 黒浜貝塚　**岩槻市**　11. 裏慈恩寺遺跡　12. 裏慈恩寺東遺跡　13. 上野遺跡　14. 諏訪山貝塚　15. 諏訪山遺跡　16. 桜山貝塚　17. 南遺跡　18. 掛貝塚　19. 馬込遺跡　20. 平林寺遺跡　21. 西原遺跡　22. 新曲輪遺跡　**上尾市**　23. 秩父山遺跡　24. 尾山台遺跡　**大宮市**　25. 丸ケ崎遺跡　26. 貝崎貝塚　27. 稲荷原遺跡　28. 小深作前遺跡　29. 宮ケ谷塔貝塚　30. 小深作遺跡　31. 大和田本村遺跡　32. 中里遺跡　33. 後遺跡



第１図　周辺の遺跡分布図

秩父山・尾山台遺跡(註30)がある。秩父山遺跡では五領期の住居址6軒などが検出している。尾山台遺跡では弥生時代後期末～古墳時代初頭の住居址60軒が検出された。土器は弥生町式末期の特徴を残す古い様相のものと，古墳時代前期初頭に比定できる新しい様相のものが混在しており，ささら・馬込新屋敷遺跡との類似性がうかがえる。

和泉期以降になると遺跡数は減少し，和泉期では岩槻支台の黒浜椿山遺跡，鬼高期では片柳支台の中里遺跡が見られる程度である。

この地域に古墳が築造されるのは後期になってからである。ささら遺跡の北東約2kmに位置する十三塚古墳(註31)が近在で知られる唯一の古墳である。凝灰質砂岩の切石を用いた胴張り形の横穴式石室で，直刀2本，刀子2本，鉄鏃多数，滑石製勾玉2個などが検出されている。前庭部からは須恵器長頸壺と坏が発見されている。埴輪はない。

（藤原　高志）

註1　埼玉県『新編埼玉県史　資料編1』1980
註2　埼玉県遺跡調査会『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第8集　1971
註3　大宮市『大宮市史』第1巻　考古編　1968
註4　註1に同じ
註5　埼玉県教育委員会『関山貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第3集　1974
註6　註1に同じ
註7　註1に同じ
註8　註1に同じ
註9　註2に同じ
註10　註2に同じ
註11　註2に同じ
註12　大宮市教育委員会『貝崎貝塚第3次発掘調査報告』大宮市文化財調査報告12集　1978
註13　大宮市遺跡調査会『宮ケ谷塔第5貝塚』大宮市遺跡調査会報告第5集　1978
註14　註1に同じ
註15　日本道路公団・埼玉県・埼玉県遺跡調査会『加倉・西原・馬込・平林寺』1972
註16　同　上
註17　註1に同じ
註18　上尾市教育委員会『秩父山遺跡』1978
註19　註1に同じ
註20　註1に同じ
註21　埼玉県遺跡調査会『裏慈恩寺東遺跡試掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告書第33集　1978
註22　註1に同じ
註23　註1に同じ
註24　埼玉県『新編埼玉県史　資料編2』1982
註25　大宮市『大宮市史』第1巻　考古編　1968
註26　註24に同じ
註27　埼玉県立文化会館『後遺跡』1962
註28　註15に同じ
註29　註24に同じ
註30　註24に同じ
註31　註24に同じ

III

さ　さ　ら　遺　跡

1　遺跡の概観

ささら遺跡は，元荒川に臨む蓮田台地の東端に位置し，事業路線に直交する道路によってⅠ～Ⅳ区に分けられる。このうちⅡ～Ⅳ区が本年度の調査分である。いずれも台地上にあり，Ⅱ区北端とⅣ区南端が台地の縁辺部にあたる。標高は平均12ｍである。表土を剝いでローム上面で遺構を確認した。

Ⅱ区は本遺跡のほぼ北半部を占め，幅25ｍ，長さ150ｍの南北に長い長方形の区画で調査を行なった。縄文時代中期の埋甕１基，後期初頭の土壙群(38基)，弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居址21軒と掘立柱建物址１棟，近世の溝10本が検出された。

縄文時代中期の埋甕は，15号住居址のすぐ西側で，大半を２号溝によって破壊を受けており，かろうじて原形の一部が確認された。後期初頭の土壙群はⅡ区の北方に集中して検出された。いずれも関東ローム層を掘り込んで構築されたものであるが，平面形・断面形により数種類の分類が可能である。縄文時代の遺構は以上あげたのみであるが，表土あるいは弥生時代以降の遺構等から相等量の縄文時代に属する遺物が採集された。

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居址はほぼⅡ区全面に分布する。先述した通りⅡ区北端は台地の縁辺であり，またⅡ区以南，Ⅲ・Ⅳ区では該期の遺構が確認されていないので，集落の南北端の一部は確認されたと言えよう。住居址はいずれも隅丸方形を呈し，４柱穴・炉址・貯蔵穴・壁溝を備えたものを標準型とするが，これに該当しない住居址もかなりある。しかし，ほとんどの住居址が貼床でよく踏み固められている。これらのうち10・19号住居址の２軒は焼失住居と思われ，焼土・炭化材が多量に出土した。また後に詳述するが，主軸方向でみる限り，２軒が１セットになるようである。遺物は該期の壺・甕・高杯・器台・椀などが出土しており，特に13・21号住居址などでは床面直上から完形の土器が良好な状態で検出された。掘立柱建物址は柱穴から遺物は出土しなかったが，竪穴住居址との位置関係から該期のものと考えられ，広場に設けられた倉庫としての機能をうかがわせる。

溝は良好な出土状態の遺物はなかったが，表土などから近世の陶磁器片などが確認されているため，該期のものと考えられる。当時の屋敷の敷地を画するものであろう。

Ⅲ区では建物址１棟，井戸址１基，溝13本などが検出された。建物址と井戸址は同時に機能していたと考えられ，その敷地を画すると思われる溝も存在する。いずれからも遺物はほとんど検出されなかったが，表土層及び他の溝から近世の陶磁器片などが確認されているため，これらの遺構も該期のものと考えられる。

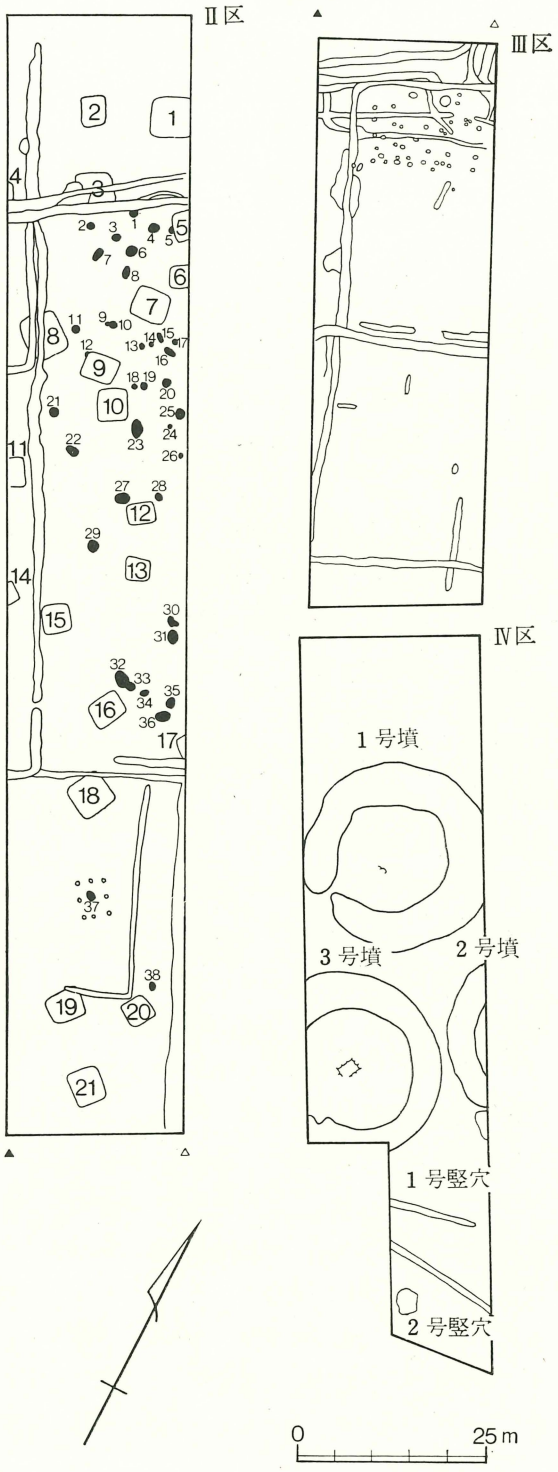
Ⅳ区では円墳址３基，竪穴遺構２基，溝２本が検出された。円墳址はお互いに非常に近接しており，南側は台地の落ち際，北側はⅢ区で該期の遺構がないことから，古墳群の南北端の一部は確認されたことになる。墳丘は完全に失なわれていたが，1・3号墳は不完全ながら内部主体が残っていた。１号墳はほぼ全体が発掘区域にかかって検出されたが，内部主体はほとんど原形をとどめていなかった。掘形と礫床・石室の一部が確認されたのみである。礫床からは勾玉・丸玉・耳環・刀子などが検出された。周堀は外径約25ｍで，南南西部にブリッジをもつ。周堀からは須恵器甕・鋤先

などが検出された。２号墳は周堀の一部が検出されたのみであるが，規模は他の２墳と同程度と考えられる。３号墳の内部主体は比較的良好に残っており，長方形プランの横穴式石室である。凝灰岩質砂岩の石室の内部は礫床になっている。礫床面からは鉄刀１本，鉄鏃・刀子20本，耳環５個が検出された。また周堀からは須恵器提瓶の破片などが出土した。

竪穴遺構と溝は，いずれからも遺物が確認されなかったが，表土層から近世の陶磁器片などが検出されたので，この時期のものと考えられる。

Ⅳ区の遺構はこれだけであるが，これらの遺構の覆土及び表土から，胎土に繊維を若干含み，土器の内外面に貝殻条痕の施された縄文土器群がかなりまとまって検出された。

（藤原　高志）



第２図　ささら遺跡全測図（1：1000）

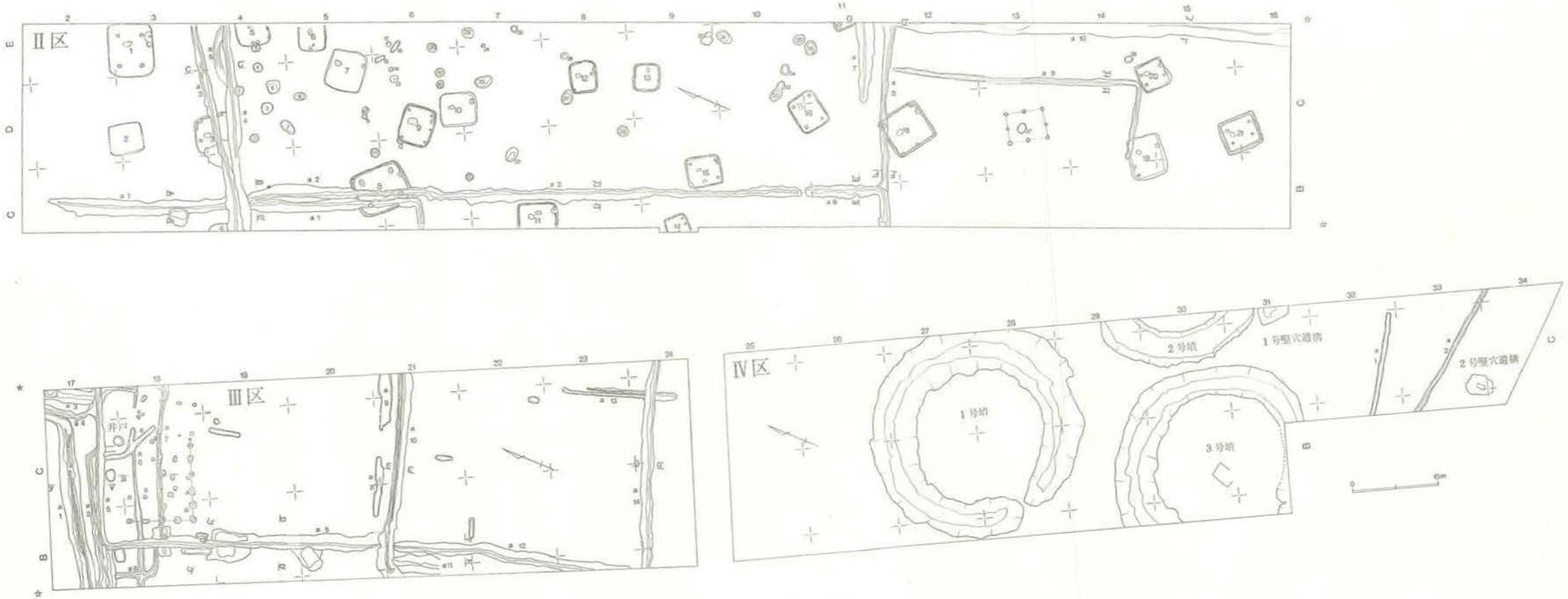
2　発掘調査の経過

昭和55年７月21日から調査を開始した。調査はまずⅣ区から始め，しだいに北上していくことにした。まず重機による表土剝ぎの後，人力によって丁寧な遺構確認を行なったところ，円墳の周堀と思われるドーナツ状の黒い落ち込みが確認された。この段階でグリッドの設定も行なった。なおこのグリッドは，ささら遺跡Ⅱ～Ⅳ区通してのグリッドである。調査開始１週間後に，１号墳の周堀を，７本のベルトを残して掘り始めた。遺物は全点ドットで取り上げた。１号墳の周堀が，遺物・ベルトを残して掘り上がった段階で，その遺物取り上げと併行して，２号墳，続いて３号墳の周堀も掘り始めた。同時に，Ⅳ区南端をさらに剝いだところ，竪穴遺構２基，溝２本の落ち込みが確認された。３墳の周堀の遺物をほとんど掘り上げた９月16日に３号墳，続く17日に１号墳の内部主体の調査を開始した。いずれもベルトを残して玄室内の埋土を取り除き，礫床面を検出した。埋土は取り上げるごとにふるいにかけて微細な遺物も見のがさないようにした。礫床面からは鉄刀・鉄鏃・刀子・耳環・勾玉などが検出された。ベルトをはずした段階で遺物出土状態を実測・写真撮影し，その後主体部の掘り形をさがした。最後に周堀のセクションを実測した後，ベルトをはずし，平面図を実測して，全体の写真撮影を行なった。Ⅳ区の調査が完了したのは11月18日である。それ以前11月４日には，航空写真の撮影を行なっている。

Ⅲ区の調査を開始したのは，10月６日である。Ⅳ区の実測作業と併行して，表土剝ぎを行なった。Ⅲ区は南半が未買収で，北半のみ調査を行なった。溝状の遺構が中心で，遺物は近世のものばかりであった。11月18日にⅢ区の実測を開始すると共に，Ⅱ区の表土剝ぎにも入った。11月中にⅢ区の実測・写真撮影を行なって，調査を完了した。後に南半の未買収地区を調査したが，溝がまばらに検出されただけであった。

Ⅱ区の調査はⅢ区の実測作業と併行して開始された。表土剝ぎによって，竪穴住居址を示す黒色の方形の落ち込み，それよりやや色の薄い土壙の落ち込みが多数，何本かの溝状遺構を伴って検出された。調査は南から北に向って進められた。住居址の調査は，以下の手順で進められた。まず，十字ベルトを残して掘り下げ，完形品など比較的大きい土器は形まで実測することとして残した。ベルトのセクションを実測した後ベルトを外し，遺物の写真撮影→実測。遺物を全て取りはずした段階で床面を精査して，壁溝・柱穴などをさがした。壁溝・柱穴などは，住居址の覆土と異なり，ロームが混入しているため，なかなか検出するのに手間どった。完掘した段階で清掃して写真撮影→プラン実測を行なった。最初の21号住居址でほぼ完形の土器が11個，床面直上から出土し，かなり期待をいだかせたが，それ以北の住居址では，これほど良好な出土状態は見られなかった。土壙は縄文時代称名寺期のもので，まず半截して半分を掘り下げ，セクションを実測した後，残り半分を掘り下げた。完掘後の手順は住居址と同様である。溝は何本かのベルトを残して掘り下げた。ほとんどの遺構が完掘された昭和56年１月29日に航空撮影を行なった。その後，遺構ごとの写真撮影・プラン実測の残りをこなし，本遺跡中最も範囲が広く，最も遺構の豊富なⅡ区の調査が完了したのは３月25日であった。

（藤原　高志）



第3図　ささら遺跡全測図

3　遺構と出土遺物

（1）　先土器時代の遺物

今回の調査において確認された先土器時代の資料は，古墳の周堀，住居址覆土，表採とすべてプライマリーな状態から離れたものであった。

ポイント（第４図１）

出土地点は１号墳周堀，石質は黒曜石製である。先端部を少し欠損しているが全体形を変えるものではなかった。形状は縦長剥片を素材として，片面加工＋周辺調整である。打点を基端とし打面を残している。しかし，打面の残存は少なく剥離方向に関しては不明であった。またバルブを取り除くための裏面調整が行なわれている。

図上（二）で示した平面図は，先端の破損部のみにリングを入れた。それは内側に示した平面図のリングが製作によるために生じたもの（意識して作り出したもの）であるのに対し，使用なりの何らかの外的要因によって破損（製作者の意識したものではなく生じたもの）したものであるため，平面図を分けてトレースを行なったものである。

しかし，今回の資料が古墳の周堀内出土という２次的な状態であるため，先端部の破損の意味が問われるのであろう。しかし破損方向が先端からの一方向によるもので，断面が人形になっている点などから，状況的に使用による破損と考えたい。

ナイフ形石器（第４図２・第５図３～７）

石質は(５)の安山岩を除いてすべて黒曜石製である。出土地点は(２)の１号墳周堀，(６)の９号住居址覆土以外は表採である。

２，縦長剥片を素材にして，上位右刃である。調製加工は両側辺に施されており，基部周辺に背面からの調整加工が施されている。断面は台形状を呈し，基部に近い所では四角形に近くなる。全体に厚めで特に基部が厚くなっている。基端部も良く作り出してある。基部主要剥離面側に打痕を残している。

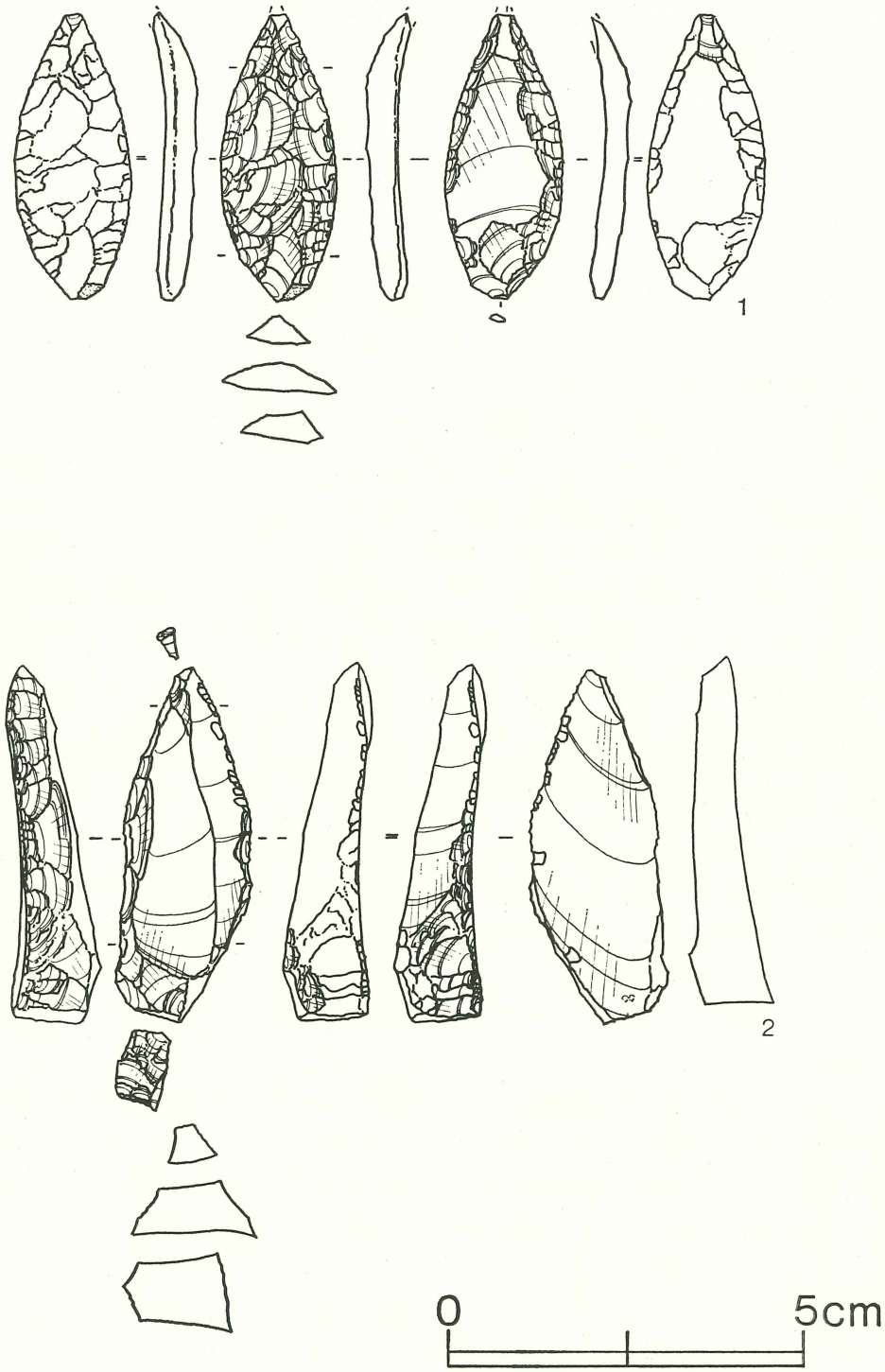
３，縦長剥片を素材とし，左下位右刃である。調整加工は両側縁に施されている。平面形は２に近いが薄手である。

４，縦長剥片を素材とし，左下位右刃である。調整加工は一側縁にのみ施されており，素材を縦に切断したかのように見える。

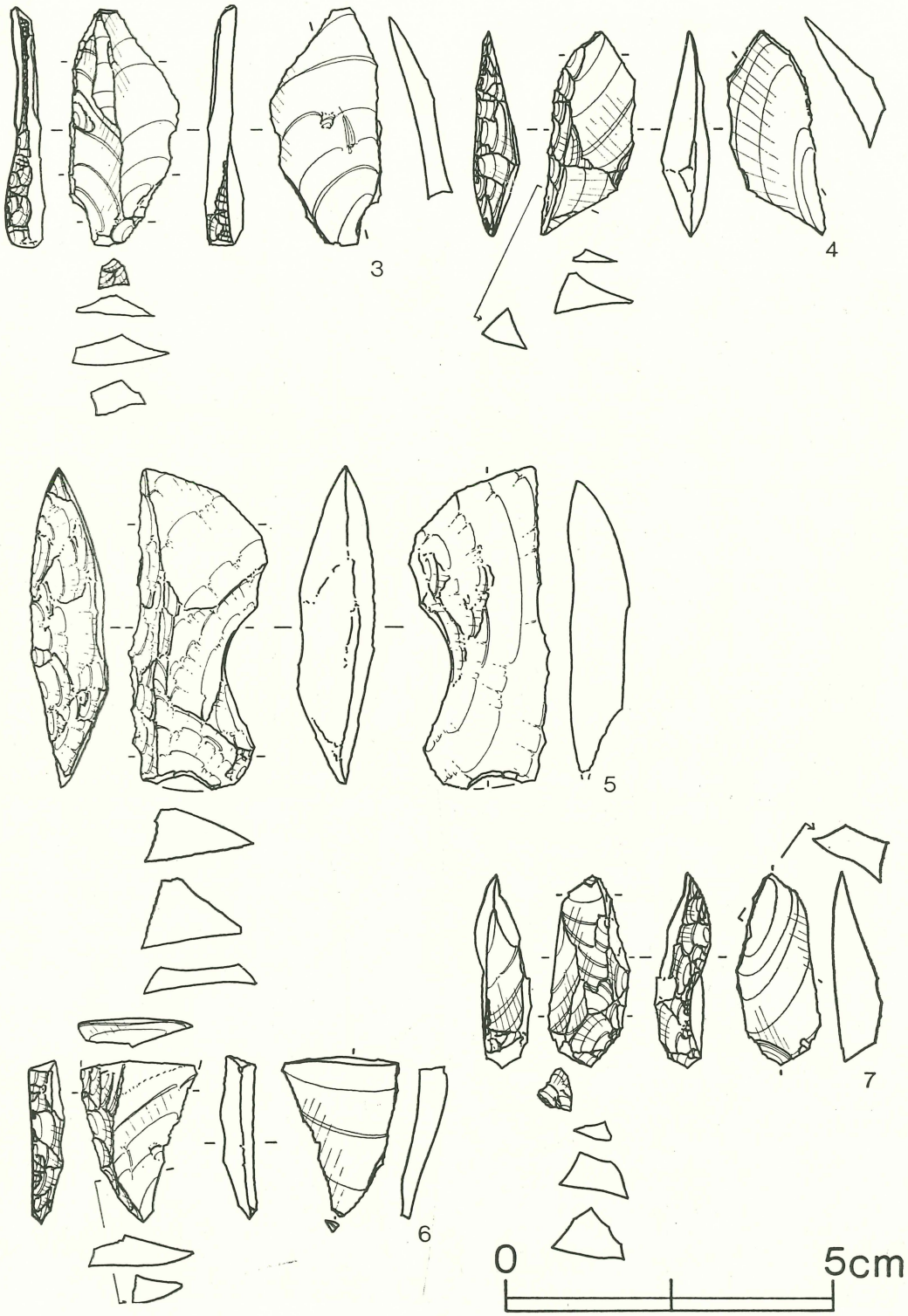
５，今回出土のナイフ形石器のなかでただ一つ石質が違うものであり，大きさは２に次いで大きい。素材は横長剥片，右位右刃である。調整加工は(４)と同じように左一側縁を折断するかのようにブランテッング加工が施されている。

６，欠損しているため全体形は明らかでないが，縦長剥片を素材とて上位であろう。刃部方向は明確には決めがたいが，調整加工は現存では左一側縁のみである。

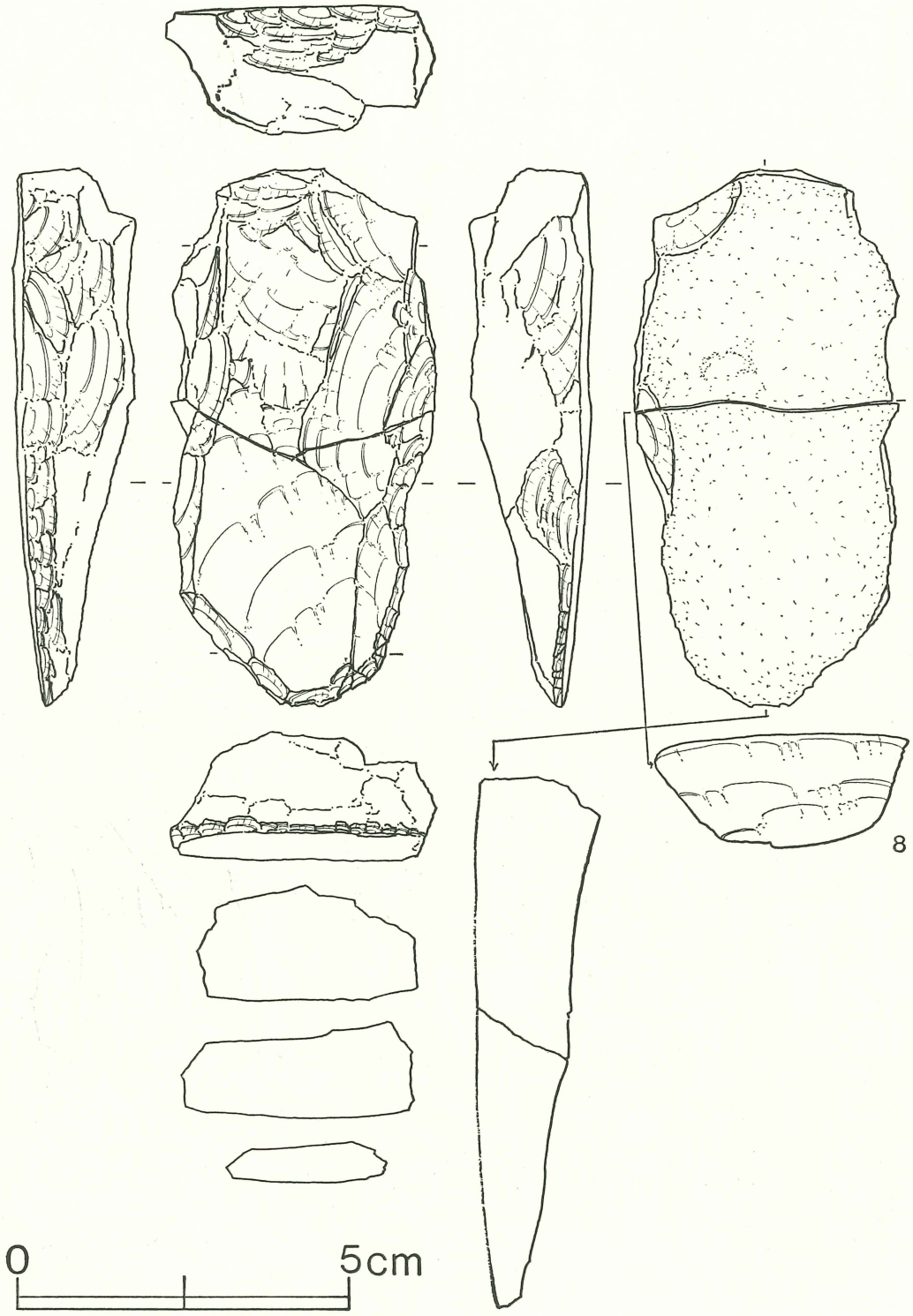
７，縦長剥片を素材とした，右上位左刃である。以上６点のナイフ形石器の出土を見てきたが，素材は黒曜石で製作されたものが全て縦長剥片，安山岩製一点が横長剥片を使用している。調整加



第4図　先土器時代石器（1）



第5図　先土器時代石器（2）



第6図　先土器時代石器（3）

工は2，3が二側縁調整，4，5，7が一側縁調整である。先端角は二側縁調整の2，3が，40°，43°と揃うのに対し，一側縁調整の4，5，7は 91°，52°，68°と揃わない。刃部方向は2，3，4，5が右刃で7のみが左刃である。

次にその編年的位置づけを行ないたいが，出土状態がプライマリーでないため，状況的方法ではこれらの石器を群として捉えにくい。そこで今少し個々の遺物を見てゆくことにする。1のポイントは黒曜石製の縦長剝片を素材にしたもので，近い例としては野川遺跡Ⅵ上層に見ることができる。これらの時期は武蔵野台地で言うⅡb期後半に当り，ナイフ形石器とポイントが伴なう時期とされている。次にナイフ形石器を見て行くと一側縁調整のものが目につく。ナイフ形石器の編年のなかで一側縁調整のものが見られるのはⅡa期前半と，Ⅱb期後に多く，4，5，7のように基端から先端まで調整が施される例としては新橋遺跡Ⅳ上層に見ることができる。この石器群はⅡb期後半に位置づけられており，ポイントの時期とも整合する。これらの点から本遺跡から出土した石器群は関接的方法ではあるが一時期の石器群と考えたい。

スクレーパー（第6図8）

出土地点は2点別々であるが3号墳の周辺である。石材は砂岩を使用している。片面に自然面を残し急角度の周縁調整で形を作り出している。刃部は前面に磨滅が見られる。

（西井　幸雄）

No.	器　種	出土地点	石質	法量（cm）			重さ（g）	先端角	側刃角
				長さ	巾	厚さ			
1	ポイント	Ⅳ区1号墳周堀	黒曜石	4.05	1.7	0.65	0.33	—	—
2	ナイフ形石器	Ⅳ区1号墳周堀	黒曜石	4.85	1.95	1.45	0.9	40°	132°
3	ナイフ形石器	Ⅱ区表採	黒曜石	3.7	1.7	0.65	0.2	43°	119°
4	ナイフ形石器	Ⅱ区表採	黒曜石	3.1	1.5	0.65	0.17	91°	—
5	ナイフ形石器	Ⅳ区表採	安山岩	5.0	2.2	1.2	0.88	52°	123°
6	ナイフ形石器	Ⅱ区9号住覆土	黒曜石	—	—	—	0.15	—	—
7	ナイフ形石器	Ⅱ区表採	黒曜石	2.9	1.3	0.9	0.2	68°	138°
8	スクレーパー	Ⅳ区3号墳	砂岩	8.1	4.0	2.0	7.1		

(2) 縄文時代の遺構と出土遺物

遺構としては，土壙が38基と埋甕が1基検出された。それらの分布状態の詳細については第3図を参照願いたいが，とくに土壙については発掘区の北方，つまり東方へ大きくせり出した台地の北側に集中する傾向がみられた。

検出された38基の土壙は，説明の便宜上，平面形，断面形により分類をおこなった。以下に，あらかじめ分類基準を記しておく。

平面形

Ⅰ　円形及びそれに準ずるもので，長径と短径の比が 0.90 以上のもの

Ⅱ　楕円形を示すもの

Ⅲ　長方形を示すもの

Ⅳ　不定形のもの

断面形

A　開口部と底部の幅はほぼ等しいが，深さが開口部より大きいもの。いわゆる円筒形の類である。

B　開口部と底部の幅はほぼ等しいが，深さが開口部より小さく，長径と深さの比が 3：1 以上のもの。

C　開口部と底部の幅はほぼ等しいが，深さが開口部より小さく，長径と深さの比が 3：1 未満のもの。

D　開口部より底部が小さく，逆台形状を呈するもので，深さが開口部より大きいもの。

E　開口部より底部が小さく，逆台形状を呈するもので，長径と深さの比が 3：1 以上のもの。

F　開口部より底部が小さく，逆台形状を呈するもので，長径と深さの比が 3：1 未満のもの。いわゆる皿状に近い。

G　開口部から底部に移行する途中に段等を有するものを一括した。

以上の土壙は，全てが遺構の確認面でもあった関東ローム層を掘り込んで構築されたものである。

また，覆土の土層説明もここでおこなっておくが，実測図中の土層はすべて統一されているので承知されたい。

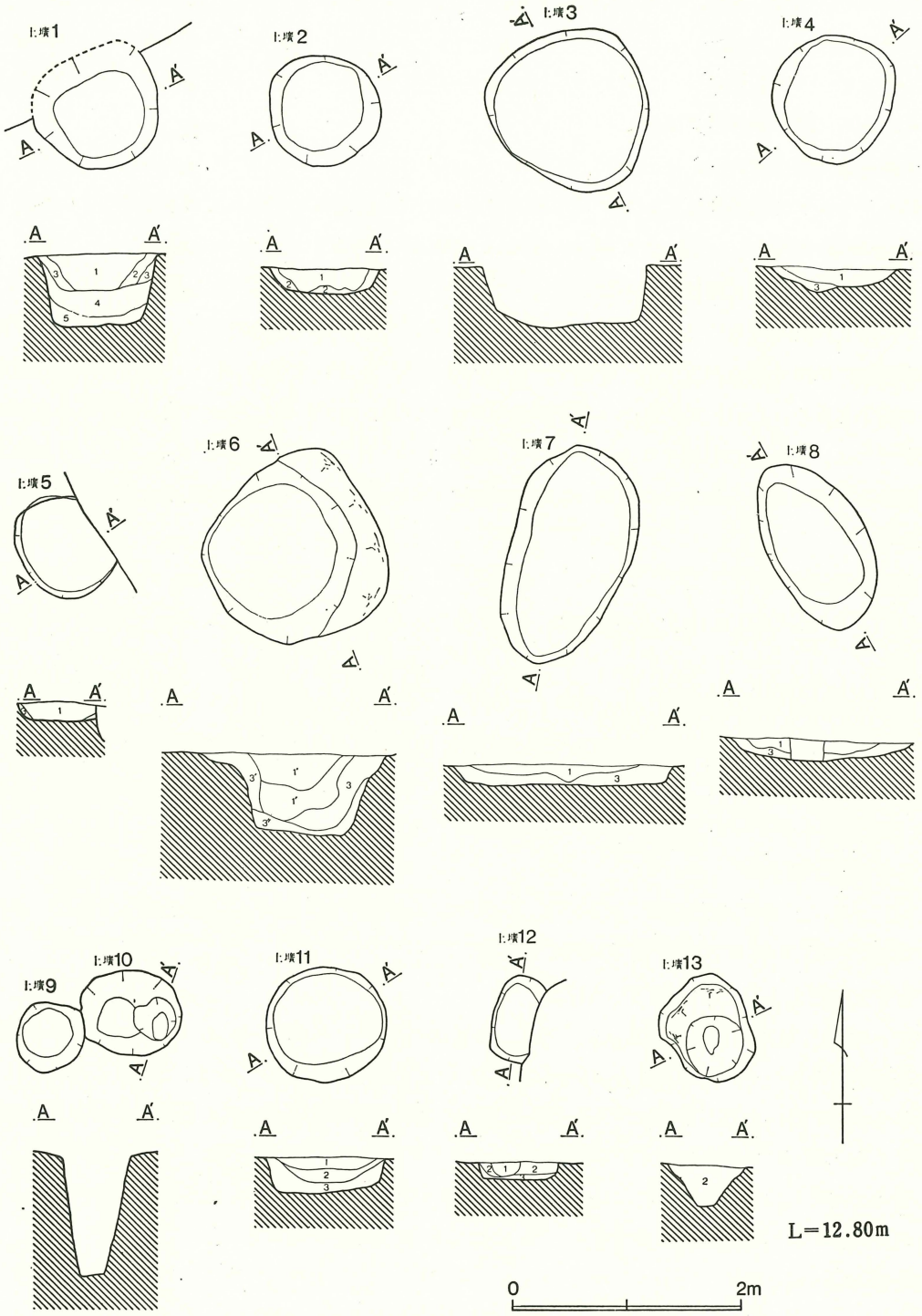
第1層　暗褐色土層でローム粒子，炭化物の粒子を若干含む。ややしまりが粗い。

第2層　褐色土層で土器片等の遺物を含む。

第3層　明褐色土層でローム粒子，ロームブロックを含む。この層は下層程ロームブロックの含有量が増える傾向にある。

第4層　黒褐色土層で多くの土器片を含む。若干きめの粗い土質でしまりも弱い。径 2.5 cm 程のロームブロック，0.3～0.5 cm のローム粒子，炭化物を含む。

第5層　暗褐色土層で第1層と類似する。だが，土質がやや粗いにもかかわらず，土のしまり具合は良好である。炭化物も若干含む。


土壙1
土壙2
土壙3
土壙4
土壙5
土壙6
土壙7
土壙8
土壙9
土壙10
土壙11
土壙12
土壙13
A
A′
L=12.80m
0
2m

第7図　1～13号土壙

第6層　ロームに近似する黄褐色土層である。炭化物を若干含む。土のしまりは良い。

第7層　暗黄褐色土層。第2層に類似するが，含まれるロームブロック，炭化物等は非常に少ない。

a．土壙（第7図～第9図）

1号土壙（第7図）

4D グリッドで検出された。プランは北西部を後世の溝によって切られており不正確ではあるが，Ⅰ-B 型であろう。径は約 1.13 m，深さは 0.64 m を測る。

1号土壙出土土器（第10図 1～14）

1は無文地上に隆帯による文様の一部が認められる。堅緻な焼成の土器である。2～6 はいずれも沈線間に大粒な列点が施された土器で，5は口縁部で，2，3は胴上半部，6は胴中程の頸れ部付近の破片である。7～11 は沈線のみで文様が描かれているもので，10 は無文の波状を呈する口縁部破片である。これらの土器はモチーフを描く沈線が2本1対である点で共通する。12，13は集合条線による文様が見られるもの。14 は波状口縁を有するが，胴上半部には磨消縄文を伴った土器である。

2号土壙（第7図）

4D グリッドで検出された。プランは Ⅰ-C 型である。開口部の径は 1.02 m で深さは 0.21 m を測る。

2号土壙出土土器（第10図 15～19）

15，16 は口縁下に1条の沈線が巡らされ，以下を主文様帯とした深鉢の口縁部破片である。その文様は 17，18 と同様に，沈線間に大粒な列点を配した曲線状モチーフであることが予想される。19 は沈線のみによって文様が描かれている土器である。

3号土壙（第7図）

4D グリッドで検出された。プランは Ⅰ-B 型であるが，開口部の形はやや歪んでいる。長径 1.45 m×短径 1.35 m で深さは 0.50 m を測る。

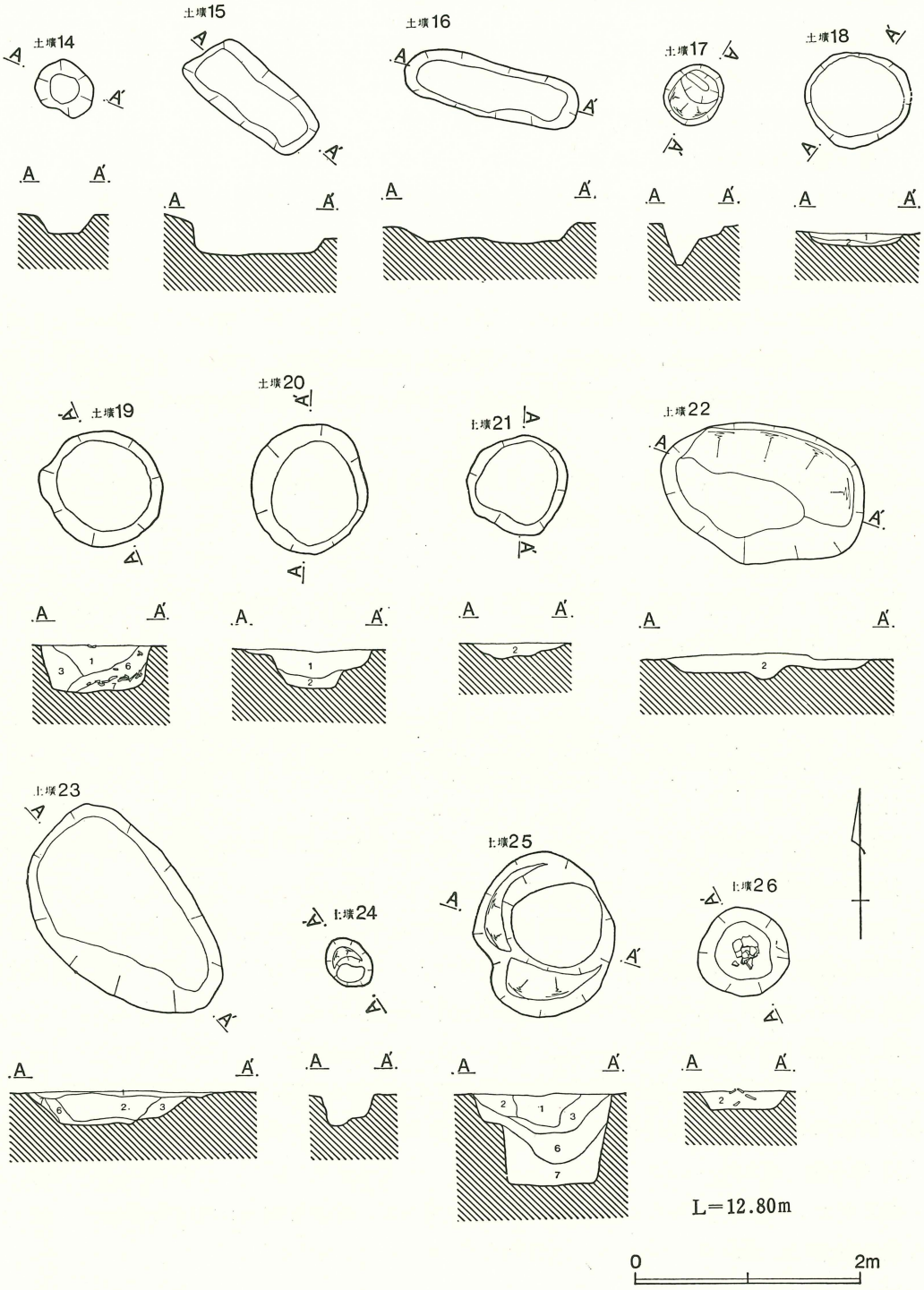
3号土壙出土土器（第10図 20～34）

20～22 は沈線間に列点が施されたもので，曲線状のモチーフが描かれる。25 は列点にかえて集合条線が配されたもの。これらの口縁は 23，30 のような平縁，あるいは 24，26 のような波状口縁を有すると思われるが不詳である。26 は逆くの字状口縁の波頂部に配された円孔と盲孔が特徴的である。32 も口縁部にしばしば造作されるモチーフである。27，29，33，34 は沈線のみによって文様が描かれているもので，29 のように2本一対で沈線が施されるものは特に注意される。31 は集合条線のみが施されたものである。28 には LR 縄文が認められる。

4号土壙（第7図）

4D グリッドで検出された。プランは Ⅰ-F 型である。直径は約 1.10 m で，深さは 0.20 m を測る。

5号土壙（第7図）


土壙14
土壙15
土壙16
土壙17
土壙18
土壙19
土壙20
土壙21
土壙22
土壙23
土壙24
土壙25
土壙26
A
A′
L=12.80m
0
2m

第8図　14～26号土壙

4E グリッドで検出された。南東部分を5号住居址によって切られていたが，プランは Ⅰ-Cと判断される。直径は約 0.90m，深さは 0.16m を測る。

6号土壙（第7図）

4D グリッドで検出された。プランは Ⅰ-B 型である。直径は約 1.62m で，深さは0.70m を測る。壁の上方部分は一部がなだらかに拡がっている。

7号土壙（第7図）

4D グリッドで検出された。プランは Ⅱ-C 型である。長径 1.93m×短径 1.05m で，深さは 0.17m を測る。長軸方向は N—14°—E を示す。

7号土壙出土土器（第11図 1～6）

1は内部に LR 縄文が充塡された弧状の文様が交互に上向きと下向きに配されている。2は沈線間に1条の列点が施され，3は沈線のみが観察され曲線状のモチーフを描いている。4，6は集合条線が縦位に施されている。6は底部付近の破片である。5は無文の深鉢の破片である。

8号土壙（第7図）

5D グリッドで検出された。プランは Ⅱ-F 型である。長径 1.54m×短径 0.88m で，深さは 0.18m を測る。長軸方向は W—25°—N を示す。

9号土壙（第7図）

5D グリッドで検出され，10 号土壙を切っている。プランは Ⅰ-E 型である。直径は 0.62m で深さは 0.35m を測る。

10 号土壙（第7図）

5D グリッドで検出され，9号土壙に一部切られている。プランは Ⅱ-E 型である。長径 0.90m×短径 0.74m で，深さは最深部が 1.05m を測る。長軸方向は N—45°—E を示す。

11 号土壙（第7図）

5C グリッドで検出された。プランはⅠ-C型である。直待は1.05m で，深さは 0.32m を示す。

11 号土壙出土土器（第11図 7～10）

7は胴上半が外反し，内折する小波状口縁の深鉢であり，沈線による文様が描かれる。8，9も7と同様の器形を有する深鉢と思われ，やはり沈線による文様が描かれている。8には隆帯の貼付も観察される。10 は LR 縄文のみが観察されるのみで他は不詳。

12 号土壙（第7図）

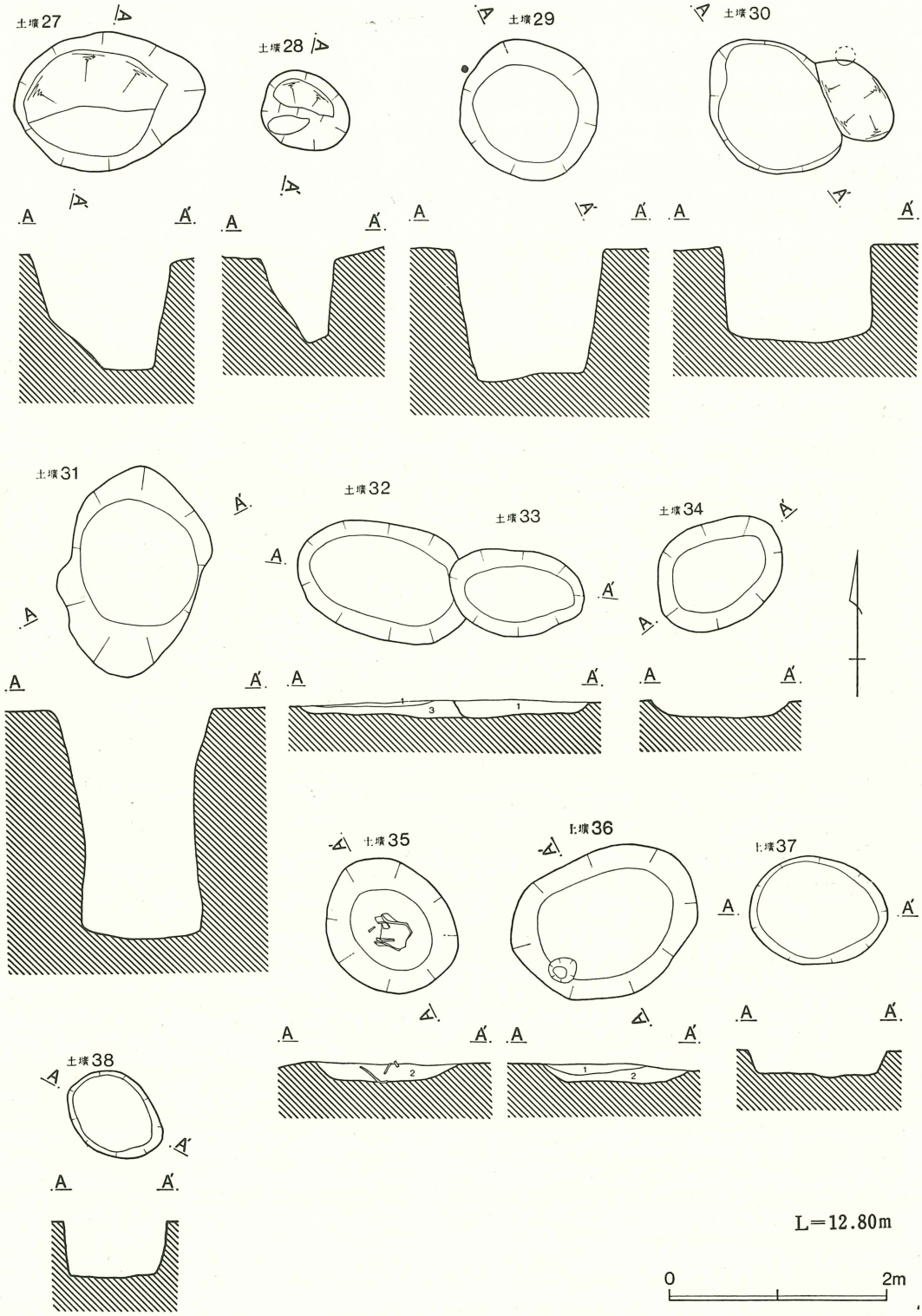
6C グリッドで検出された。東壁を9号住居址によって切られている。プランは Ⅱ-C 型である。長径 0.75m×短径 0.45m(推定)で，深さは 0.16m を測る。長軸方向はN—15°—Eを示す。

13 号土壙（第7図）

6D グリッドで検出された。プランは Ⅳ-E 型である。長径 0.94m×短径 0.69m で，深さは 0.35m を測る。北西側の立ち上がりは若干広がりぎみに段を有する。

14 号土壙（第8図）

6D グリッドで検出された。プランは Ⅰ-C 型である。直径は 0.52m で，深さは 0.15m を測る。


土壙27
土壙28
土壙29
土壙30
土壙31
土壙32
土壙33
土壙34
土壙35
土壙36
土壙37
土壙38
A
A′
L=12.80m
0
2m

第9図　27～38号土壙

15 号土壙（第８図）

6Ｄ グリッドで検出された。プランは Ⅲ-C 型である。長軸 1.21ｍ×短軸 0.57ｍを測る。長軸方向は W—47°—N を示す。

15 号土壙出土土器（第11図 11～12）

11 には集合条線による格子目状の文様の一部が見られる。12 は平坦な口唇部を持ち，口縁には半截竹管による横位の平行沈線が施されている。

16 号土壙（第８図）

6Ｅ グリッドで検出された。プランは Ⅲ-C 型である。長軸 1.59ｍ×短軸 0.49ｍ で，深さは 0.17ｍ を測る。長軸方向は W—77°—N を示す。

17 号土壙（第８図）

6Ｅ グリッドで検出された。プランは Ⅰ-G 型である。長径 0.55ｍ×短径 0.50ｍ で，深さは 0.36ｍ を測る。

18 号土壙（第８図）

6Ｄ グリッドで検出された。プランは Ⅰ-F 型である。直径は 0.90ｍで，深さは 0.11ｍを測る。

19 号土壙（第８図）

6Ｄ グリッドで検出された。プランは Ⅰ-B 型である。直径は 1.03ｍ で，深さは 0.40ｍを測る。覆土内からの土器片の検出数は比較的多かった。

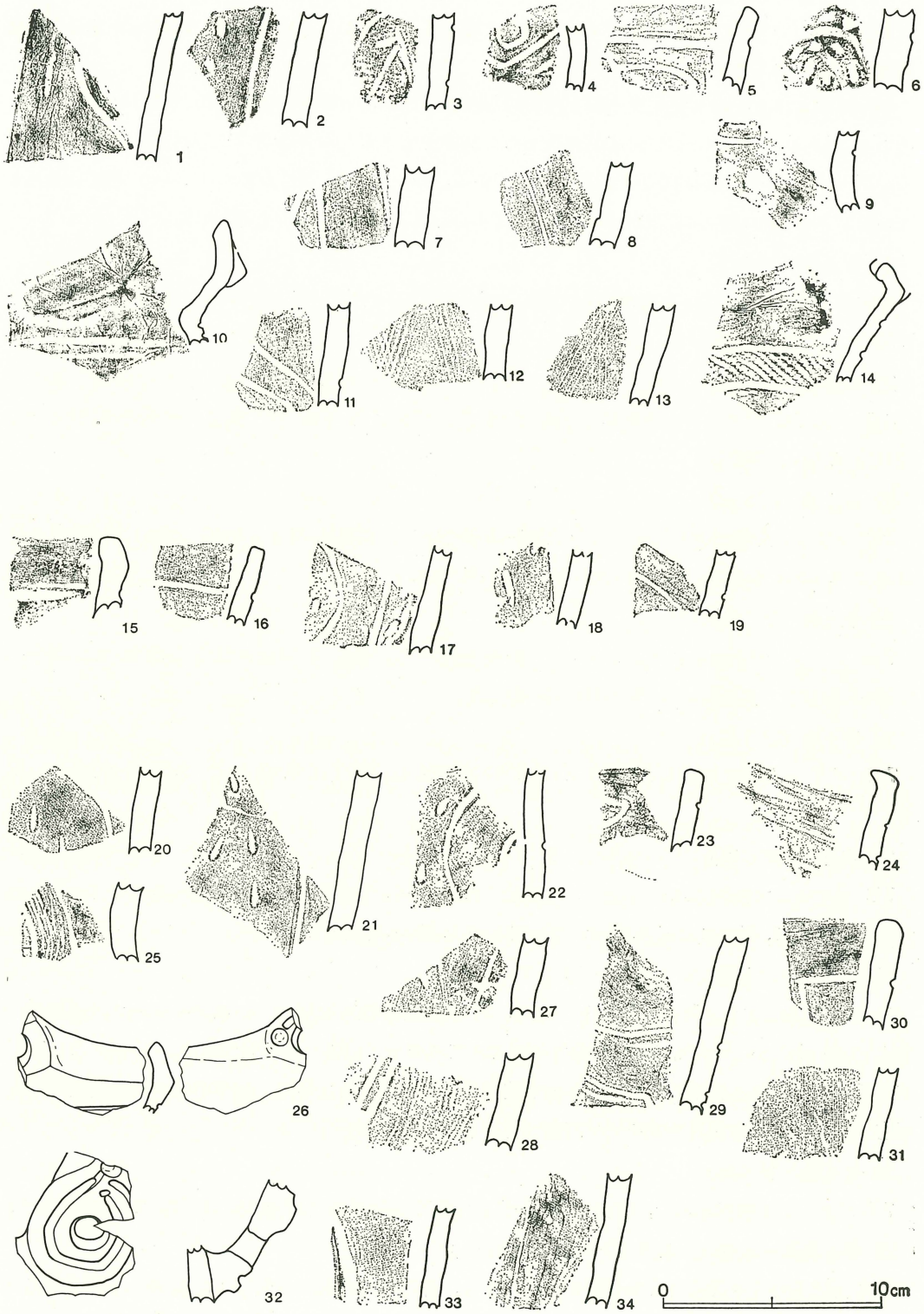
19 号土壙出土土器（第11図 13～20，第14図 1～3）

本土壙からは復原実測が可能な土器が３個体まとまって検出された。第14図 1～3 がそれである。

１はやや開いた口縁部から胴上部でわずかのくびれを示し，胴腹部に最大径のくる深鉢形土器であり，口縁径 23.3 cm，底径 8 cm を測る。文様としては口縁下 2 cm に１本の沈線がめぐらされているのみで，胴腹部より上には RL 縄文が縦位に連続的に回転施文されている。胴腹部から底部にかけては箆による削りが認められる。これらの施文順位を示せば＜沈線→RL 縄文の縦位回転→胴下半部の箆削り＞となる。色調は，外面が，胴上半部が煤の付着の為か黒色を呈しており，胴腹部はにぶい黄橙色，胴下半部は橙色～明赤褐色，底部は黒褐色～黒色を呈している。内面は，口縁からくびれ部付近にかけてはにぶい黄橙色～にぶい黄褐色を示すが，以下底部の近くまで黒色を呈している。底はにぶい黄橙色である。以上のような色調の違いは明らかに機能の反映によると思われる。胎土に含まれる砂粒はかなり細かく，焼成も堅緻である。

２は大きく外反する波状口縁を有する深鉢であり，頸部より下は一端膨れて底部へと収束する器形を示す。外反した口縁部には文様が全く施されず，波頂部に粘土紐による渦が配されているにすぎない。胴部には沈線による曲線的なモチーフが三日月状の粘土の貼り付けを核としながら展開されている。色調は，内外共に黒褐色～黒色を呈しており，外面には炭化物の付着が認められる。胎土に含まれる砂粒は細かい。

３は外反する口縁部を有する深鉢であり，胴中央部にくびれを有する。口縁は若干内折するように作出されており，小波状の波頂部には１本の刻みが施されている。文様はすべて沈線によって描かれているが，そのモチーフは極めて単純にくり返し施されているようであるが，破損部が多く詳



第10図　1号土壙（1～14），2号土壙（15～19），3号土壙（20～34）出土土器

らかではない。だが，明らかに同一モチーフのくり返しを避けている部分が観察されよう。色調は，内外共ににぶい褐色～明赤褐色を呈しており，煤により黒変した部分も多い。胎土に含まれる砂粒は細かく，仕上がりの良好な土器である。

破片に関しても，ほぼ完形の土器と時期的な隔たりは少ない資料が多い。第11図 13～20 がそれである。13 は沈線間に LR 縄文が充塡された文様を有する土器の胴部のくびれ部付近の破片である。14, 15, 17 は沈線間に列点が刺突されている。16, 18, 19 は沈線のみによって文様が描かれている。16 には口唇部に円形の貼付け文が認められる。20 は無文の土器である。

20 号土壙（第 8 図）

6D から 6E グリッドにまたがって検出された。プランは Ⅰ-G 型である。長径 1.14 m×短径 1.03 m で，深さは 0.32 m を測る。

21 号土壙（第 8 図）

6C から 7C グリッドにまたがって検出された。プランは Ⅰ-F 型である。直径は 0.87 m で，深さは 0.14 m を測る。

22 号土壙（第 8 図）

7C グリッドで検出された。プランは Ⅱ-C 型である。長径 1.87 m×短径 1.21 m で，深さは最深部で 0.23 m を測る。長軸方向は W—76°—N を示す。

23 号土壙（第 8 図）

7D グリッドで検出された。プランは Ⅱ-C 型である。長径 2.09 m×短径 1.27 m で，深さは 0.29 m を測る。長軸方向は W—41°—N を示す。

24 号土壙（第 8 図）

7D グリッドで検出された。プランは Ⅰ-G 型である。直径は 0.48 m で，深さは 0.25 m を測る。

25 号土壙（第 8 図）

7E グリッドで検出された。プランは結果的には Ⅳ-G 型であるが，Ⅰ型を基調としているようである。長径 1.47 m×短径 1.25 m で，深さは 0.80 m を測る。

25 号土壙出土土器（第12図 1～19）

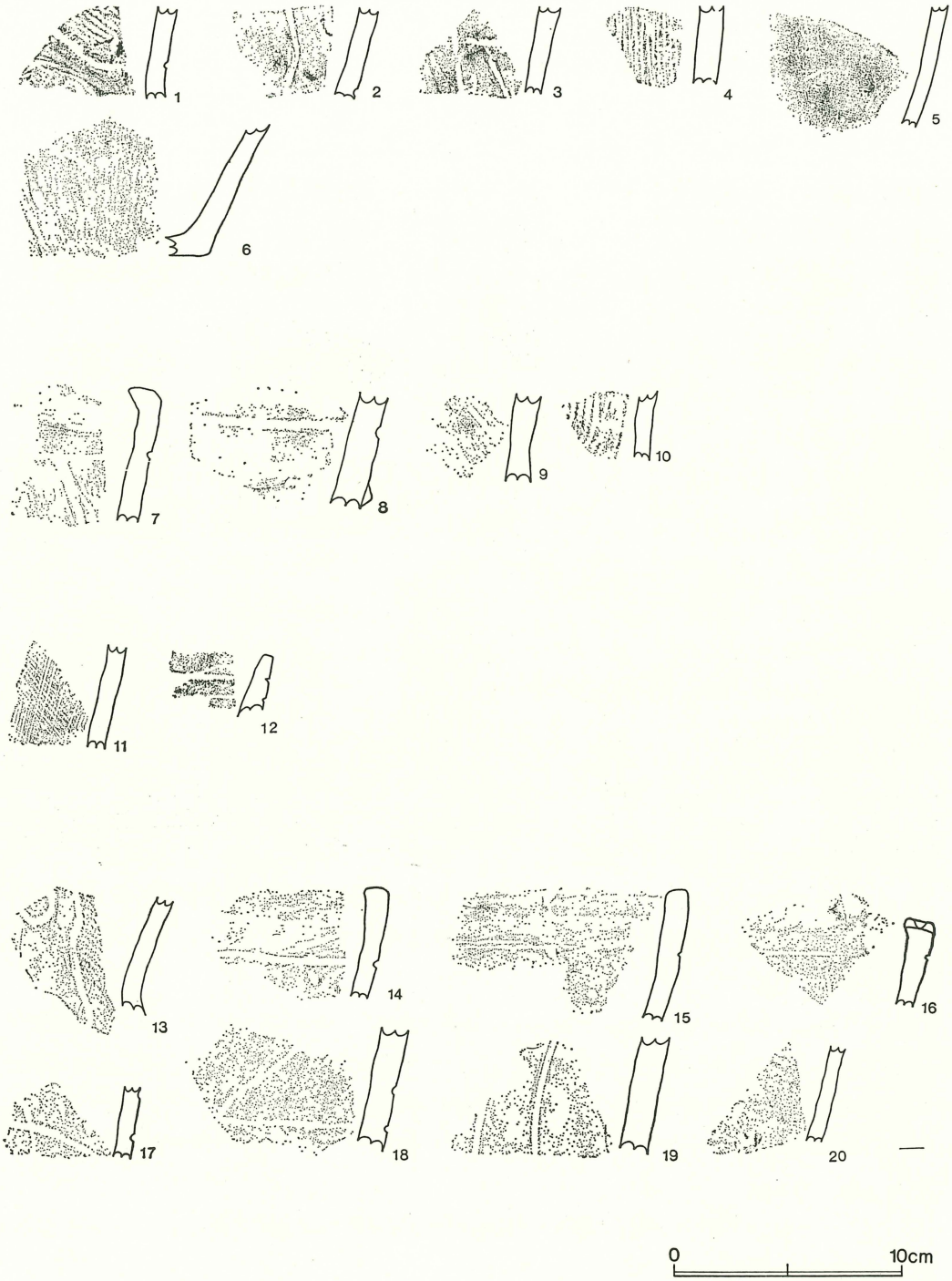
1～3 は沈線間に大粒の列点を配しており，17 は集合条線を充塡している。モチーフは曲線的で殆んど違いがない。4～16, 18 は沈線のみによってモチーフが描かれる類である。19 は波状口縁を有する深鉢の波頂部破片であり，立体的な装飾把手が作出されている。把手の内側には起点に盲孔を有する沈線による渦状のモチーフが貼り付けられている。

26 号土壙（第 8 図）

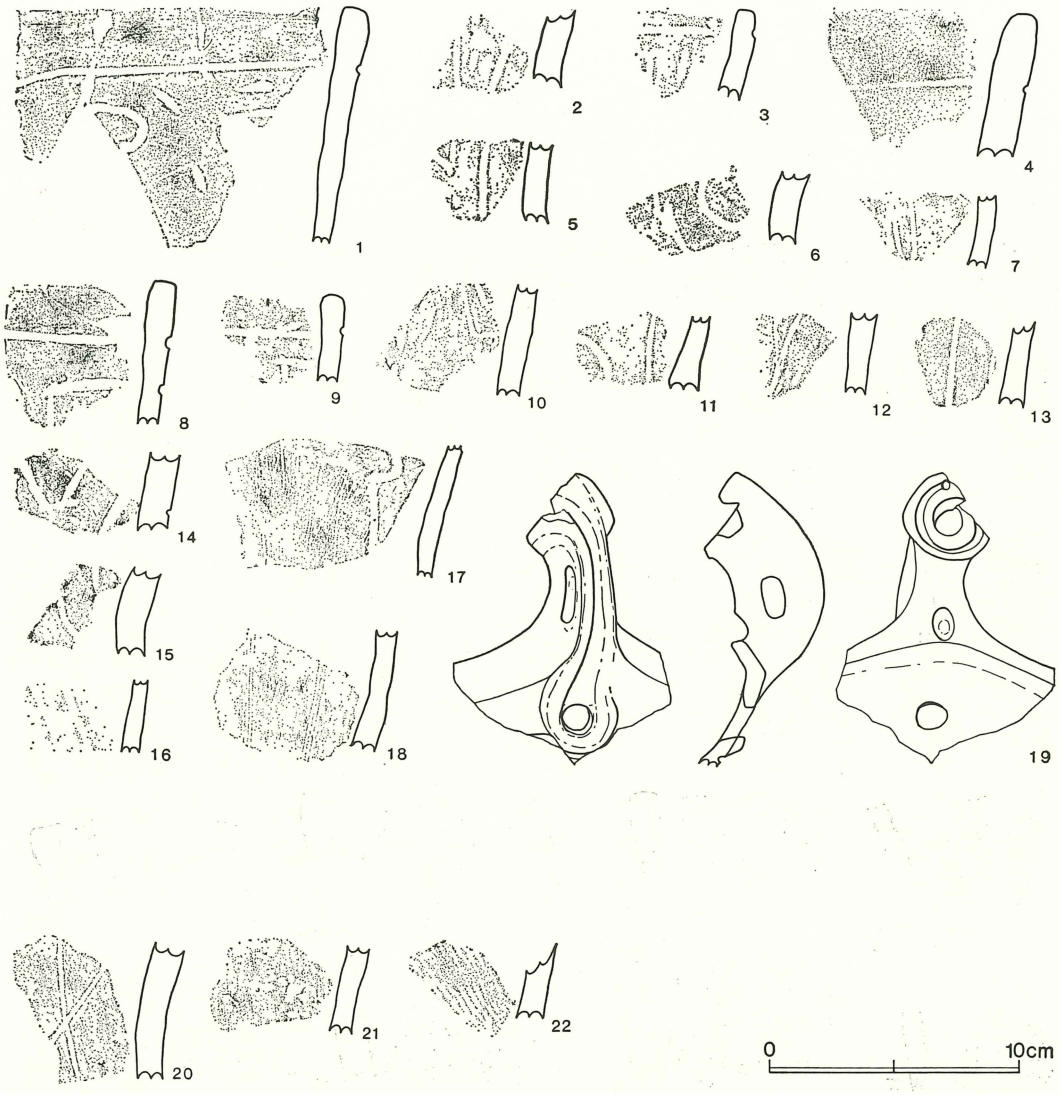
7E グリッドで検出された，プランは Ⅰ-C 型である。直径は 0.80 m で，深さは 0.16 m を測る。

26 号土壙出土土器（第12図 20～22，第15図 1）

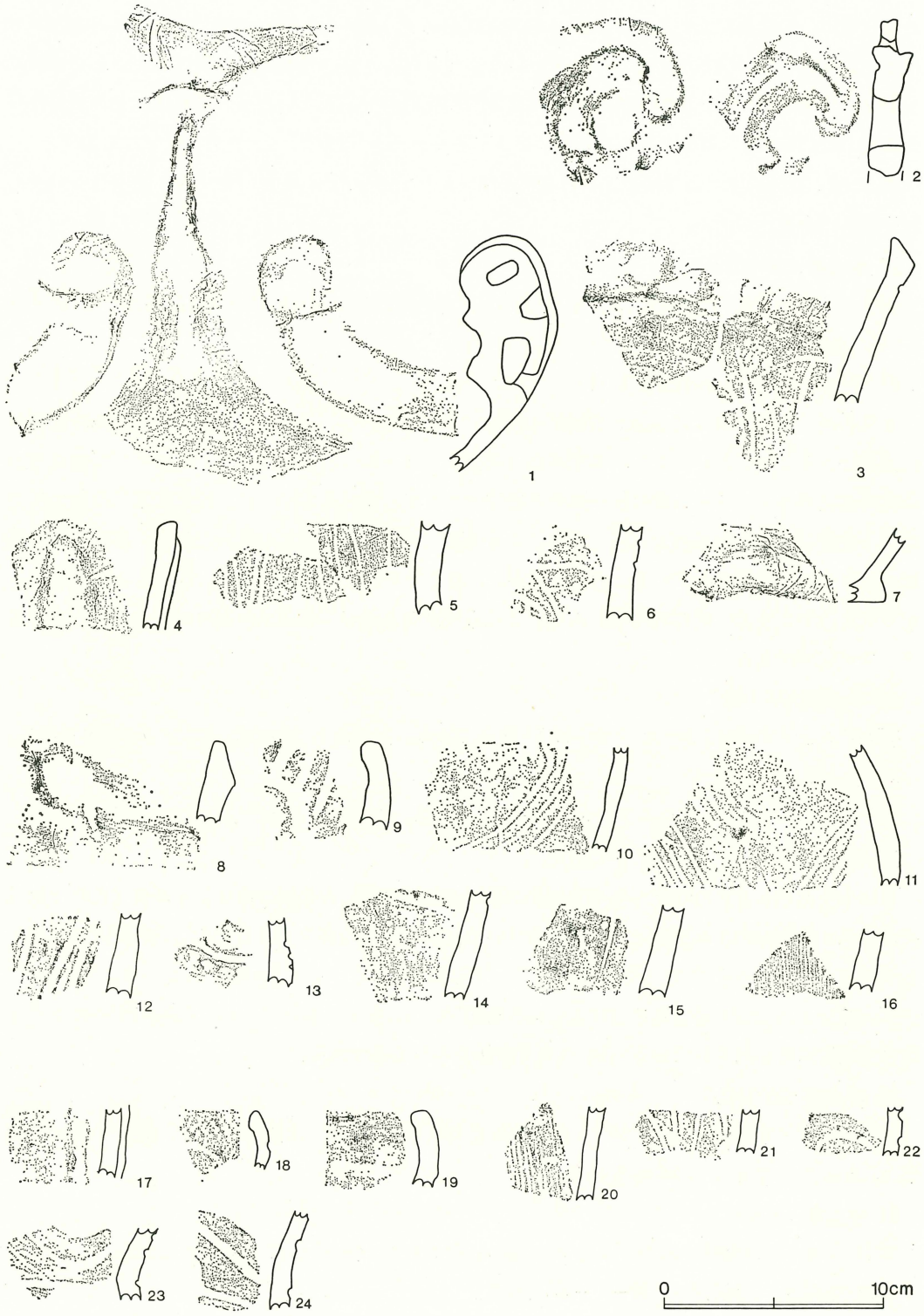
1は大把手を 1 ヶ所に有する深鉢形土器であり，外反した口縁部は無文で，頸部より胴上半部にかけて主たる文様帯が配置されている。文様帯内には沈線による J 字状文が 3 単位とそれらの間に斜線及び逆 J 字状文が交互に配されるように描かれている。つまり，J 字状文が主文様であり，そ



第11図　7号土壙（1～6），11号土壙（7～10），15号土壙（11～12），
19号土壙（13～20）出土土器



第12図　25号土壙（1～19），26号土壙（20～22）出土土器



第13図　27号土壙（1～7），29号土壙（8～16），37号土壙（17～24）出土土器

れらの間にくる斜線及び逆J字状文が副文様という関係にあると言えよう。なお，J字状文の配される位置は，口縁部の大把手下，小突起を含む盲孔列下，及びそれらの中間である平縁部の直下であり，計画的な3単位構成となっている。いうまでもなく，並進対称性が破られるという文様構成を示しているのである。土器内面の色調は全体的に黒褐色を示しているが，外面は胴上半が黒色～黒褐色，胴下半が明赤褐色を呈している。胎土に含まれる砂粒は細かく，焼成の良好な土器である。

20は細く鋭い沈線により格子目状の文様が描かれている。21は無文，22はRL縄文のみがみられる深鉢の小破片である。

27号土壙（第9図）

8Dグリッドで検出された。プランはⅡ-G型である。長径1.76m×短径1.27mで，深さは1.04mを測る。長軸方向はN—83°—Eを示す。

27号土壙出土土器（第13図 1～7）

1は大波状口縁を有する深鉢の波頂部付近の大形破片である。口縁部は内屈しているが，全体的に文様は施されていない。ただ，波頂部には両端に盲孔の施された沈線と，ハチマキ状の隆帯等が特徴的に見られる。2も口縁の把手部分の破片であるが，貫通孔を中心に，両端に盲孔の施された渦状の沈線が内外両面に施文されている。3も内屈した口縁部に盲孔が認められる。屈曲下には沈線による文様が展開されているようであるが，正確なモチーフは不明である。5，6も3と同様のモチーフを有する土器の胴部破片であろう。4は隆帯による逆U字状文が波頂部に施されている土器で，7は底部である。

28号土壙（第9図）

8Dグリッドで検出された。プランはⅠ-D型である。直径は0.80mで，深さは0.77mを測る。

29号土壙（第9図）

9Cグリッドで検出された。プランはⅠ-B型である。直径は1.34mで，深さは1.19mを測る。

29号土壙出土土器（第13図 8～16）

8はやや内屈ぎみの口縁部を有する波状口縁の深鉢である。口縁部は無文。9は貫通孔の一部とそのまわりに沈線による斜線と円が描かれている土器口縁部の破片である。13は沈線間に1列の刺突が施されている土器で，10～12，14～15は沈線のみによって文様が描かれている。10，11の三本沈線による文様の構成の仕方は非常に特徴的であり，注意しておきたい。なお，11には三本沈線の先端部に瘤が施されている。16は集合条線のみの土器である。

30号土壙（第9図）

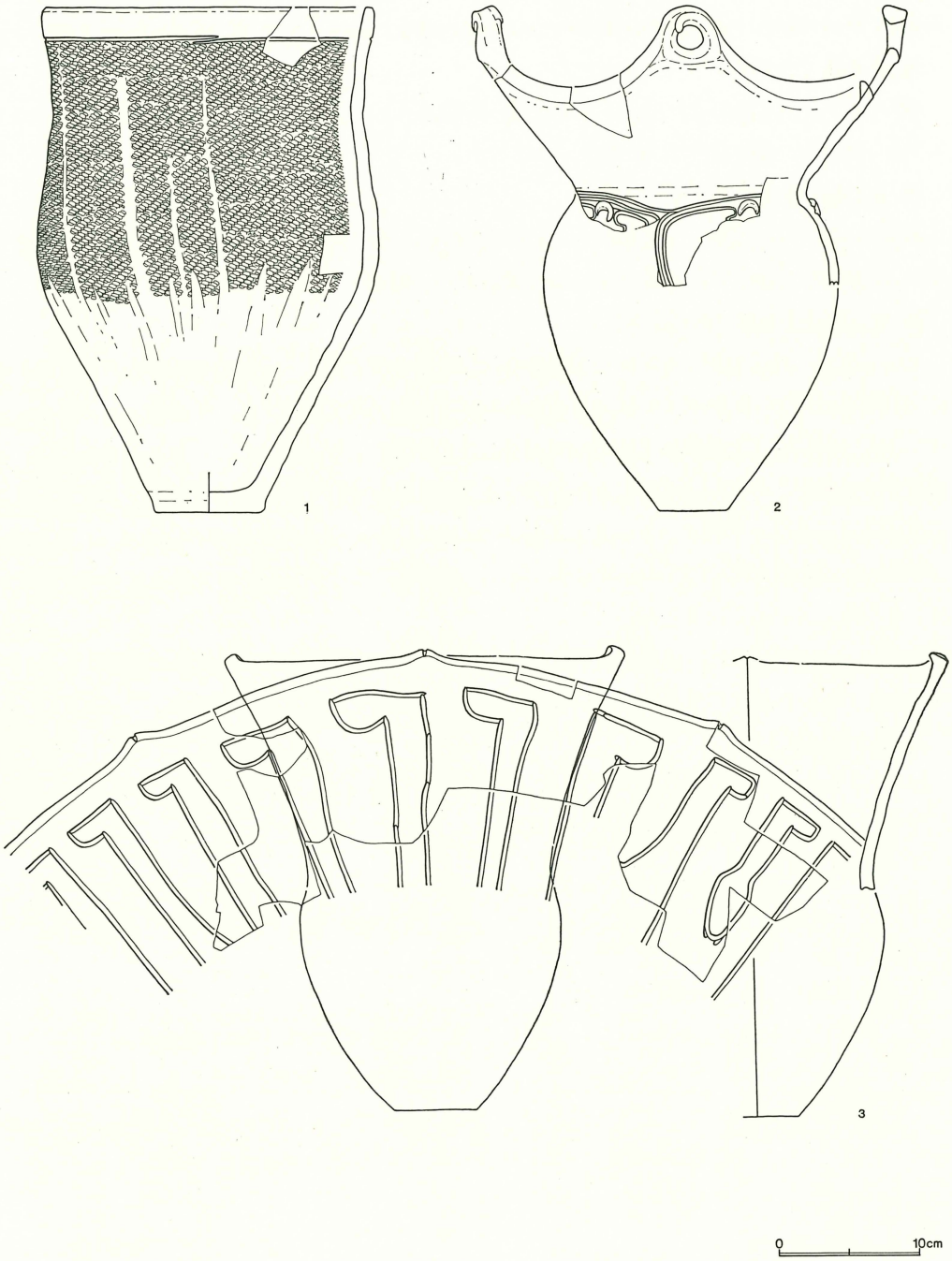
9Dグリッドで検出された。プランはⅡ-B型であり，東側に一部攪乱がある。長径1.42m×短径1.13mで，深さは0.84mを測る。

31号土壙（第9図）

10Dグリッドで検出された。プランはⅡ-A型である。長径1.92m×短径1.20mで，深さは2.07mを測る。長軸方向はN—6°—Eを示す。

32号土壙（第9図）

10Dグリッドで検出された。東側を33号土壙によって切られている。プランはⅡ-F型であ



第14図　19号土壙出土土器

る。長径 1.60 m（推定）×短径 1.05 m で，深さは 0.14 m を測る。長軸方向は W—73°—N を示す。

33 号土壙（第 9 図）

10 D グリッドで検出された。32 号土壙の東側を一部切っている。プランは Ⅱ-F 型である。長径 1.25 m×短径 0.80 m で，深さは 0.16 m を測る。長軸方向は W—81°—N を示す。

34 号土壙（第 9 図）

10 D グリッドで検出された。プランは Ⅱ-F 型である。長径 1.20 m×短径 0.97 m で，深さは 0.15 m を測る。長軸方向は N—52°—E を示す。

35 号土壙（第 9 図）

10 D から 11 D グリッドにまたがって検出された。プランは Ⅱ-F 型である。長径 1.30 m×短径 1.10 m で，深さは 0.16 m を測る。1 個体分の土器がまとまって検出された。

35 号土壙出土土器（第15図 2）

2 は平縁で，胴部で緩くくびれながら膨れた胴腹部を経て底部へと到る深鉢形土器である。内折した口縁部には 6～9 個を 1 単位とした盲孔列が 5 単位（推定）配され，盲孔列間は沈線でつながれている。胴部には沈線間に LR 縄文を充塡した曲線的な文様が描かれている。具体的には，J 字状文を 4 単位と，それらの間に配される文様とで組み合わされて器面を一周しているのである。J 字状文間の文様は 4 単位すべてが違うように描かれている。仮りに記号で表記すると〈(a+b)+(a′+b)+(a″+b)+(a‴+b)〉となろう。なお，口縁部の盲孔列と胴部の文様とはその分割軸が必ずしも一致しているとは言えない。

色調は，内面が全体的に橙色を呈しており，外面もほぼ内面に類似した橙色の範疇に入るが，やや褐色味が強い。胎土に含まれる砂粒は粒が細かく，焼成も良好な土器である。

36 号土壙（第 9 図）

11 D グリッドで検出された。プランは Ⅱ-F 型である。長径 1.74 m×短径 1.32 m で，深さは 0.16 m を測る。長軸方向は N—67°—E を示す。

37 号土壙（第 9 図）

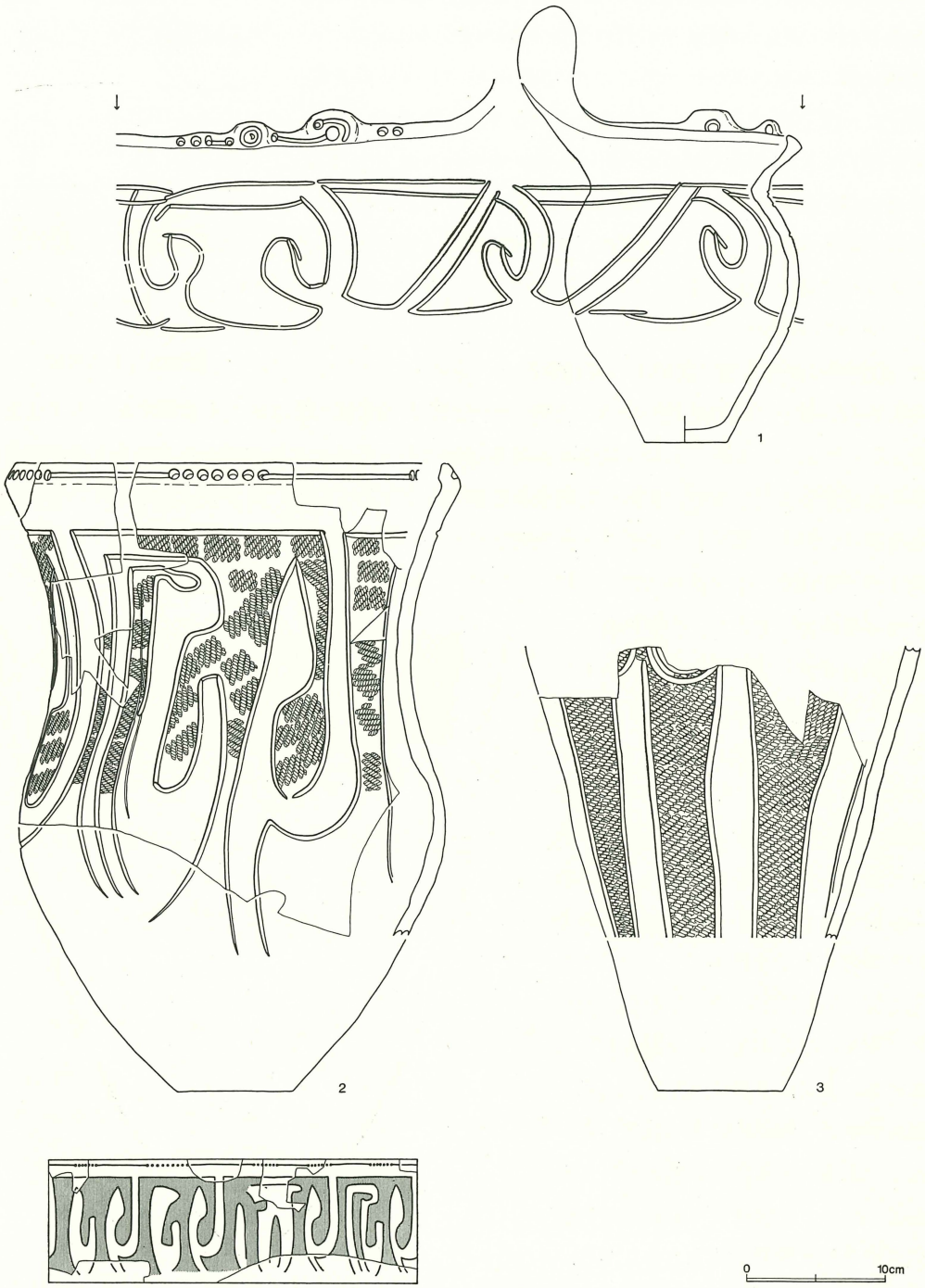
13 C グリッドで検出された。プランは Ⅱ-C 型である。長径 1.26 m×短径 0.98 m で，深さは 0.24 m を測る。長軸方向は W—86°—N を示す。

37 号土壙出土土器（第13図 17～24）

17 は隆帯による懸垂文がみられる。18 は内彎した口縁部に逆U字状の磨消縄文が施されている。19 は沈線のみが観察される土器である。20 は集合条線のみが施されている。21 は沈線のみによって文様が描かれている。ところが，22～24 は小破片でみると称名寺式系土器群と非常に類似しているが，これらは晩期C安行Ⅲ式土器の破片である。23 には沈線間に列点列が配され，22，24 は沈線のみによって三叉文等のモチーフが施されている。

38 号土壙（第 9 図）

14 D グリッドで検出された。プランは Ⅱ-B 型である。長径 0.96 m×短径 0.71 m で，深さは 0.51 m を測る。長軸方向は W—60°—N を示す。

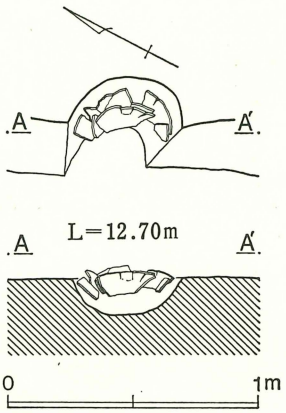


第15図　26号土壙（1），35号土壙（2），1号埋甕（3）出土土器

b．埋甕（第16図・第15図３）

Ⅱ区 9C グリッド内の 15 号住居址のすぐ西側で検出された。大半は２号溝によって破壊を受けていたが，かろうじて原形の一部が残されていた。口縁部と胴下半は全く失われていた。

文様は幅広の磨消部を持つ懸垂文が特徴的に施されている土器であり，口縁部はキャリパー状になるものと予想されるが，沈線が若干認められるのみで詳細は不明である。施される縄文は RL 撚りの縦回転である。色調は内面が褐色～褐灰色，外面が明褐色～にぶい褐色を呈する。胎土に含まれる砂粒はかなり細かく，焼成も良好で堅緻な土器である。

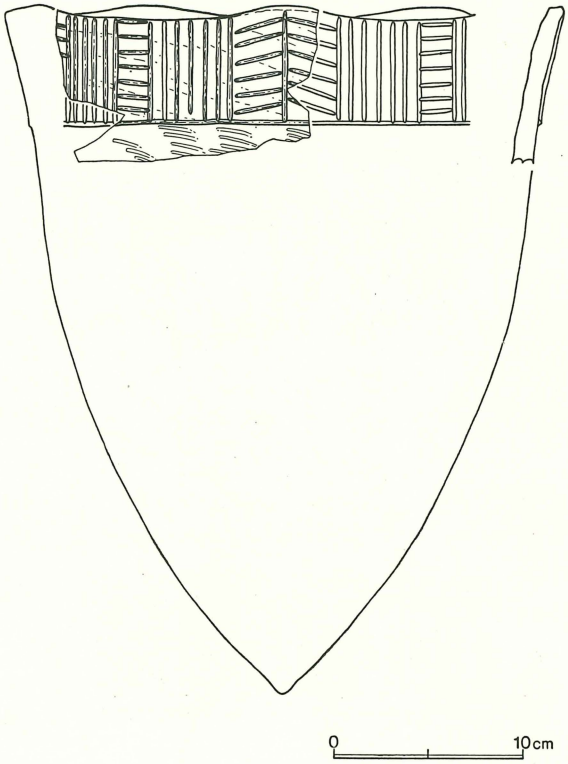


第16図　１号埋甕

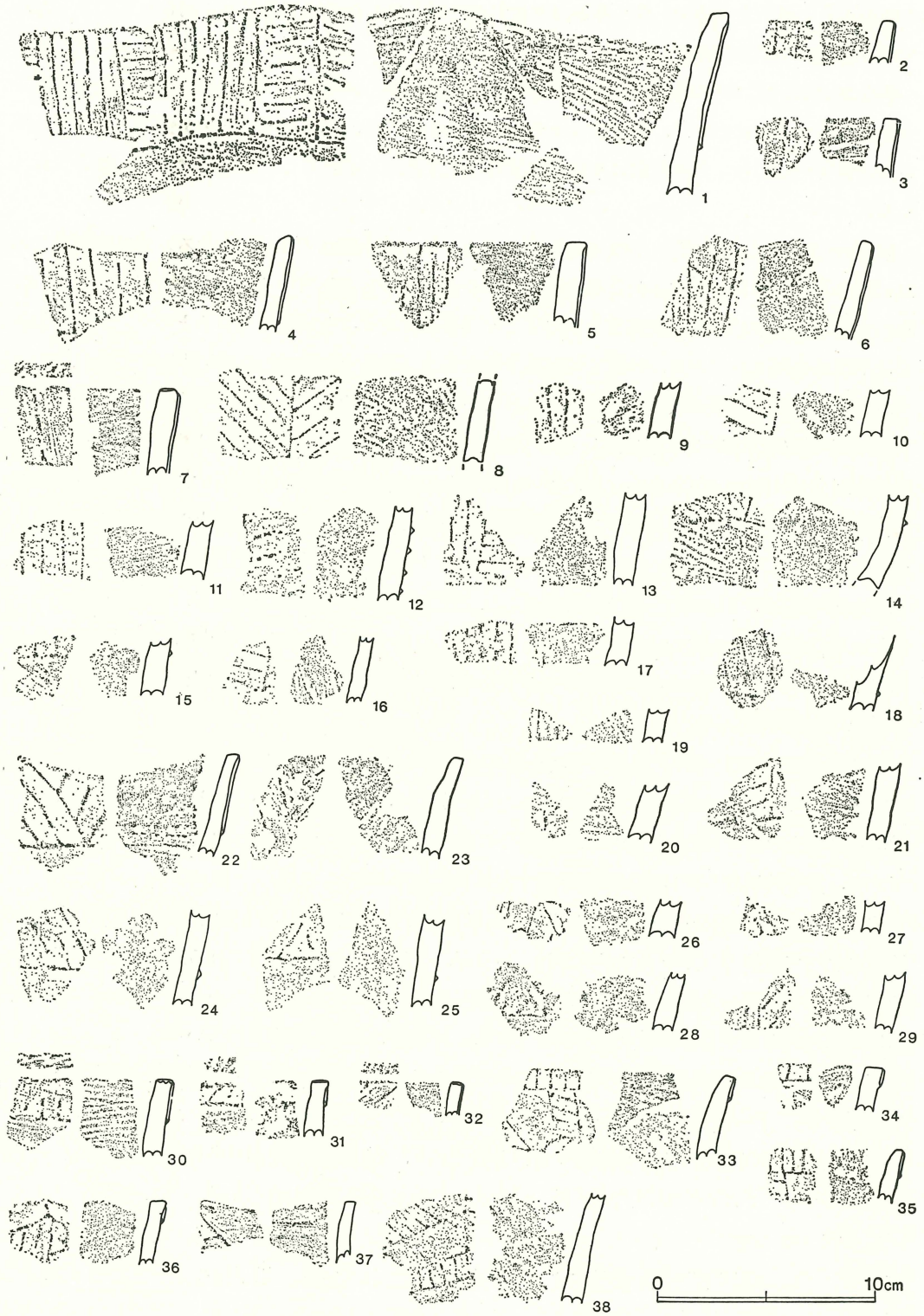
c．Ⅳ区集中出土土器（第17図～第21図）

Ⅳ区から，胎土に繊維を若干含み，土器の内外面に貝殻条痕の施された土器群がかなりまとまって検出された。とりわけ，口縁部文様帯に微隆起帯の貼り付けによる文様が施されるものが特徴的にみられ注意された。また，口唇部に絡条体圧痕文を有するものや，貝殻腹縁文が刻み込まれたもの等もある。以下に類別しながら具体的な内容について説明を加えていきたい。

第１類（第17図，第18図 1～21）　口縁部に文様帯を持つもので，微隆起線による直線的なモチーフが配されているものを一括した。全てが深鉢であり，1，4，6 のように明らかに波状口縁を呈するものを含んでいる。2，3，5，7 もあるいは波頂部間の破片かも知れないが小破片の為不詳である。波頂部の単位数は１の土器から推定すると５ないし６と考えられる（第 17 図の実測図は第18図１と同じ土器である）。口唇部はいずれも平坦に整形されており，むしろ１などは凹みぎみでさえある。また，７には丸棒状工具による刻みが斜位に連続的に施されている。これらの土器は全体的に器壁が厚いのも特徴的である。文様はほぼ全面的に貝殻条痕の施された器面を地文としながら，微隆起線により口縁部文様帯が分帯され，波頂部を基軸とした縦位と横位，斜位の直線的な微隆起線がほぼ等間隔に貼



第17図　Ⅳ区集中出土土器（１）



第18図　Ⅳ区集中出土土器（2）

りつけられることによって構成されている。なお，口縁部文様帯内の条痕文は一見磨り消されているかのごとく観察されるが，良くみれば微隆起線の貼付けの際に結果的に磨り消されてしまったのであることが明瞭である。

第２類（第18図 22～29） 波状を呈する器形や微隆起線による口縁部文様帯を有する点では第１類と異なるところはないが，曲線的なモチーフが加わったり，斜位のモチーフが強調されたりしている一群を一括した。微隆起線はやはり等間隔に配されている。また，口唇部は平坦に整形されている。

第３類（第18図 30～35） 平縁の深鉢形土器であり，口縁部に文様帯を有する。特に特徴的なのは口唇部下に梯子状に構成された微隆起線文が横位にめぐらされている点である。以下には，33，35から同じく梯子状の微隆起線文を主体とした文様が幾何学文を構成していると考えられる。口唇部は平坦に整形されており，口唇上には絡条体圧痕文（30），鋭利な箆による刻み列（31），アナダラ属の貝殻腹縁の刺突列（32）などが施されているものもある。

第４類（第18図 36～38，第19図1～20） 波状口縁を有する深鉢が主となると考えられるが，口縁部破片が少なく断定はできない。36，37 の口唇部は平坦に整形されている。本類の文様の特徴は微隆起線文による直線的なモチーフと微隆起線の貼り付けられない空白部分とが組み合わされている点にある。

第５類（第19図 21～22） 第４類と類似した文様構成を示す土器群であるが，微隆起線を貼り付けない空白部分が曲線的なモチーフとなっているものを一括した。21は平縁の深鉢形土器の口縁部破片であり，口唇上には刻み列が施されている。22も類似したモチーフの土器である。両者共に器壁は比較的薄い。

第６類（第19図23～24） これまでの土器群には幅の狭い，断面形が三角を示す微隆起線が文様の主体として貼り付けられるのが常であったが，本類は，やや幅が広い，いわゆる細隆起線の貼り付けられるものを一括した。いずれも小破片の為モチーフは定かでない。口唇上は平坦に整形されており，若干外反ぎみの口縁部形態を示す深鉢形土器である。

第７類（第19図25） 微隆起線文と沈線文とが同時に施文されている土器である。文様は幅広な沈線によって直線的なモチーフが描かれているが，それらによって構成される三角あるいは四角等の空間には幅の狭い沈線が充塡されたり，微隆起線文が充塡されたりしているのである。25 の土器は波状口縁を呈する深鉢形土器の破片である。口唇部は平坦に整形されている。

第８類（第19図 26～29） いずれも小破片であるが，沈線のみによって文様が描かれているものを一括した。

第９類（第19図 30） 比較的器壁の厚い土器であり，口縁部文様帯が一条の微隆起線によって分帯されている。だが，文様帯内には鋭く幅の狭い斜位の沈線が引かれているのみである。

第10類（第19図31） やや外反した口縁部を有する平縁の深鉢形土器で口唇部は平坦に整形されている。文様は鋭く幅の狭い沈線によって鋸歯状に描かれている。以下のモチーフは不明であるが，もし，口縁部文様帯が微隆起線によって分帯されているならば，第９類とした30の土器と非常に似たものとなる。

第19図　Ⅳ区集中出土土器（3）

第 11 類（第19図32） 波状口縁を有する深鉢形土器で，幅の狭い半截竹管により文様が描かれている。内外両面に条痕が認められない。口唇部は平坦に整形されることなく，丸みを帯びている。器壁は比較的厚い。

第 12 類（第19図33） 小波状口縁を有する深鉢形土器で，口縁部に文様帯を有する。文様はすべてやや太目の沈線によって描かれており，沈線間には細密沈線が充塡されている。モチーフとしては波頂部を中心に工字状に施されているようである。口唇部は若干内削ぎぎみに平坦に整形されている。

第 13 類（第19図34～35） これまでの土器群より繊維の含有量は多い。文様は凹線によって描かれ，その間は細密沈線（34），刺突（35）等で充塡される。深鉢の胴上部破片であろうが，詳しい器形は不明である。

第 14 類（第19図36～38） 貝殻背圧痕文が施文されているもので，いずれも同一個体と思われる。繊維の含有量は比較的多く，非常に脆弱化している。

第 15 類（第19図39） 若干外反した口縁部を有する深鉢形土器である。貝殻条痕等は全く認められない。口縁部には深く刻み込まれた刺突列がめぐらされているようである。

第 16 類（第20図1～32） 内外両面に貝殻条痕が施されているものを一括した。やや外反する器形を示すものが殆んどで，平縁のもの（1～11）と波状口縁のもの（12）がある。口唇部は全体的に平坦に整形されているが，中には内削ぎ状のもの（3）や丸いもの（7）も含まれている。1の口唇上にはアナダラ属の貝殻腹縁による斜位の刻み列が施されている。貝殻条痕の走向方向は土器の内外共に類似しており，口縁付近では斜～横位が主で，胴部は斜～縦位が主となっている。

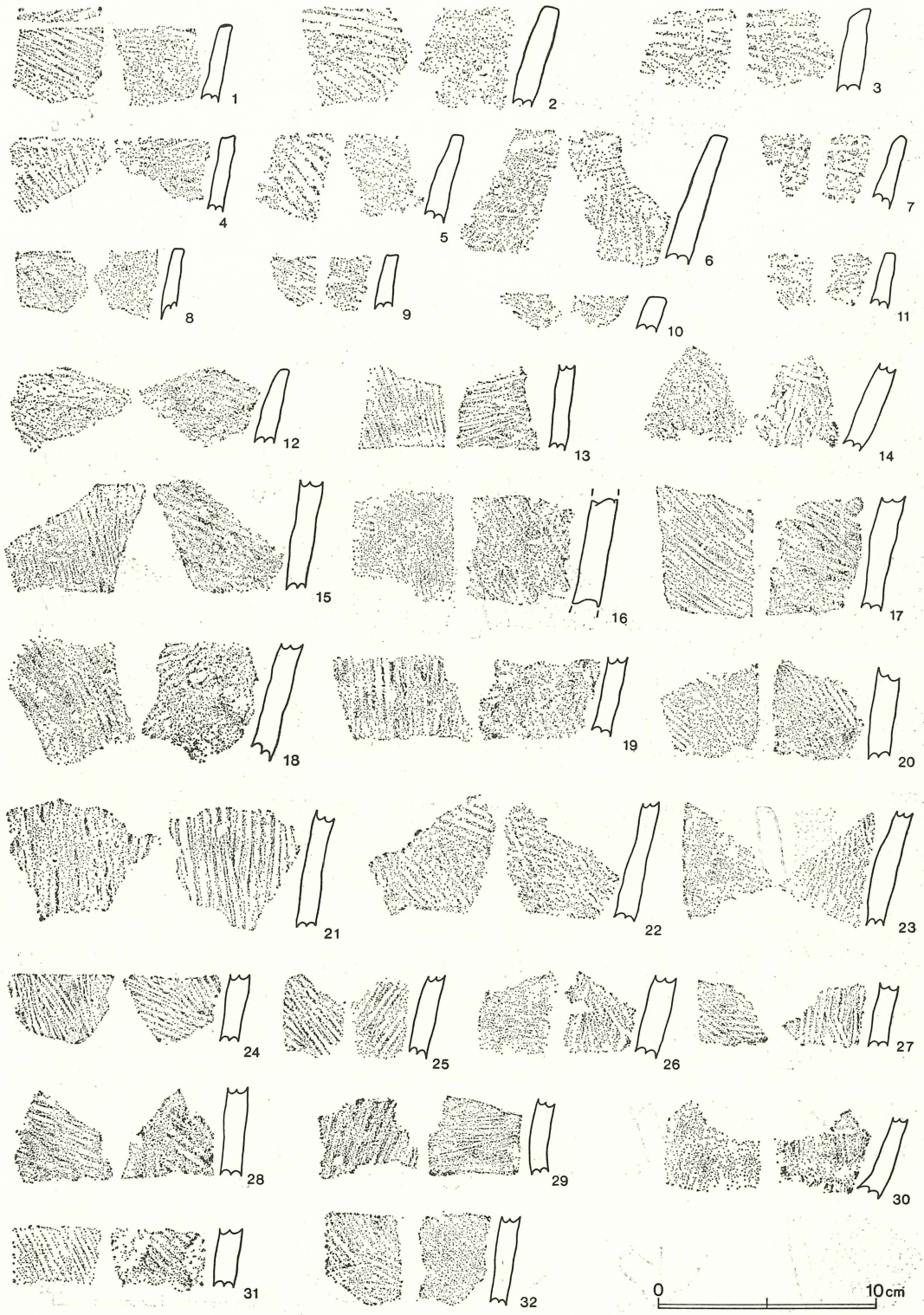
第 17 類（第21図1～14） 内面は無文で外面のみに貝殻条痕が施されたものを一括。器形は前類と同様で，口唇部も平坦に整形されている。1は平縁で，2は波状口縁の深鉢形土器である。条痕の走向方向は口縁部から胴部にかけて次第に横（斜）位から縦（斜）位に向きを変えているようである。

第 18 類（第21図15～21） 外面が無文で，内面のみに貝殻条痕が施されているものを一括した。15 は外反した口縁を有する深鉢形土器の口縁部破片であり，口唇部は若干内削ぎぎみではあるが平坦に整形されている。条痕の走向方向は第 16 類，第 17 類と異なる点がない。

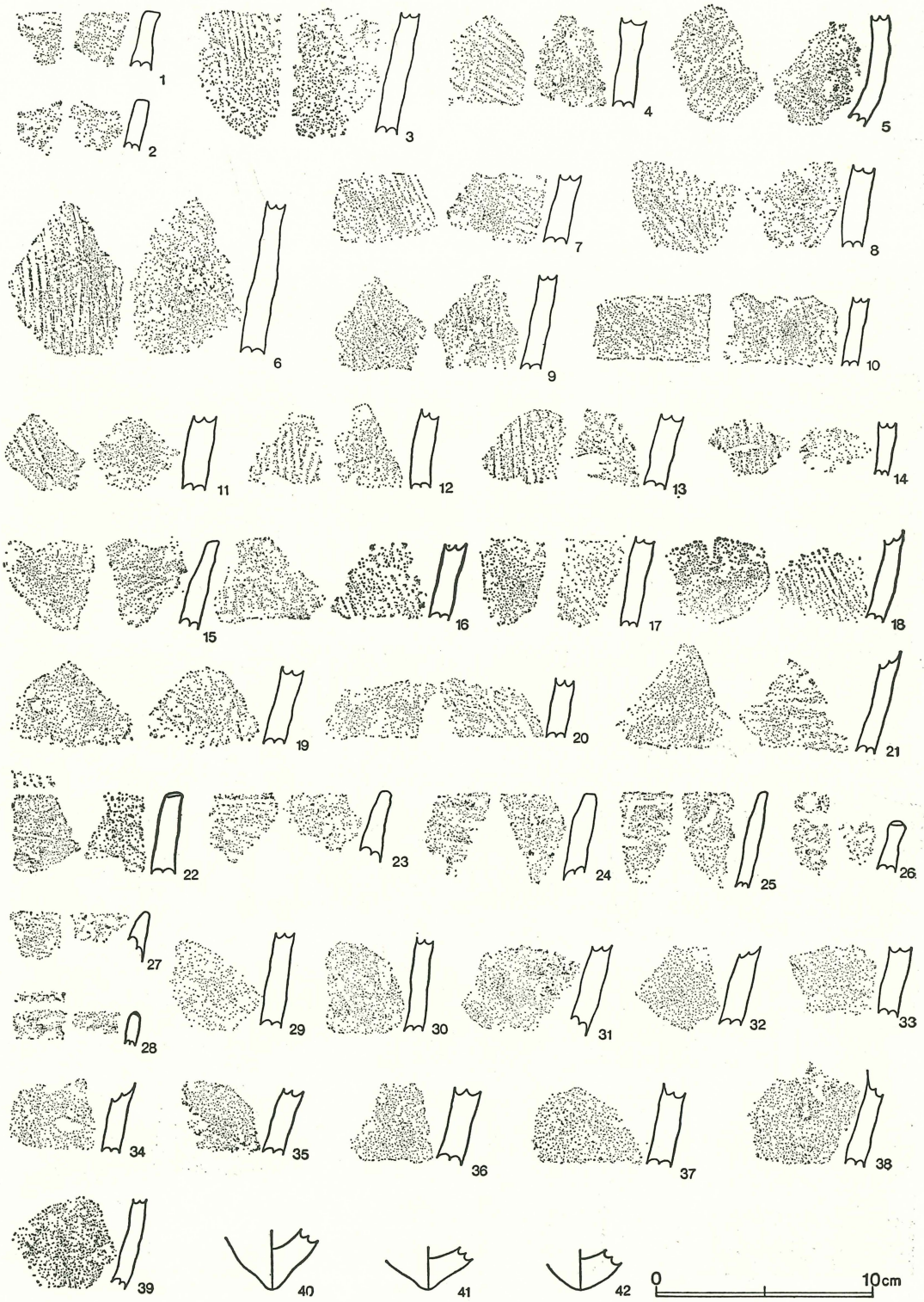
第 19 類（第21図22～39） 全く貝殻条痕の施されていないものを一括した。擦痕状のものは本類に含ませてある。やはり外反した器形を呈し，口唇部を平坦に整形したものが多い。26～28 は丸味を帯びた口唇部となっている類である。22 の口唇上には アナダラ属の貝殻腹縁の刻み列が施され，26 には丸棒状工具による刻み列，28 には刺突列が施されている。

第 20 類（第21図40～42） 底部を一括。いずれも尖底をしており，40，41 は先端部に突出部を有する，いわゆる乳房状尖底となっている。

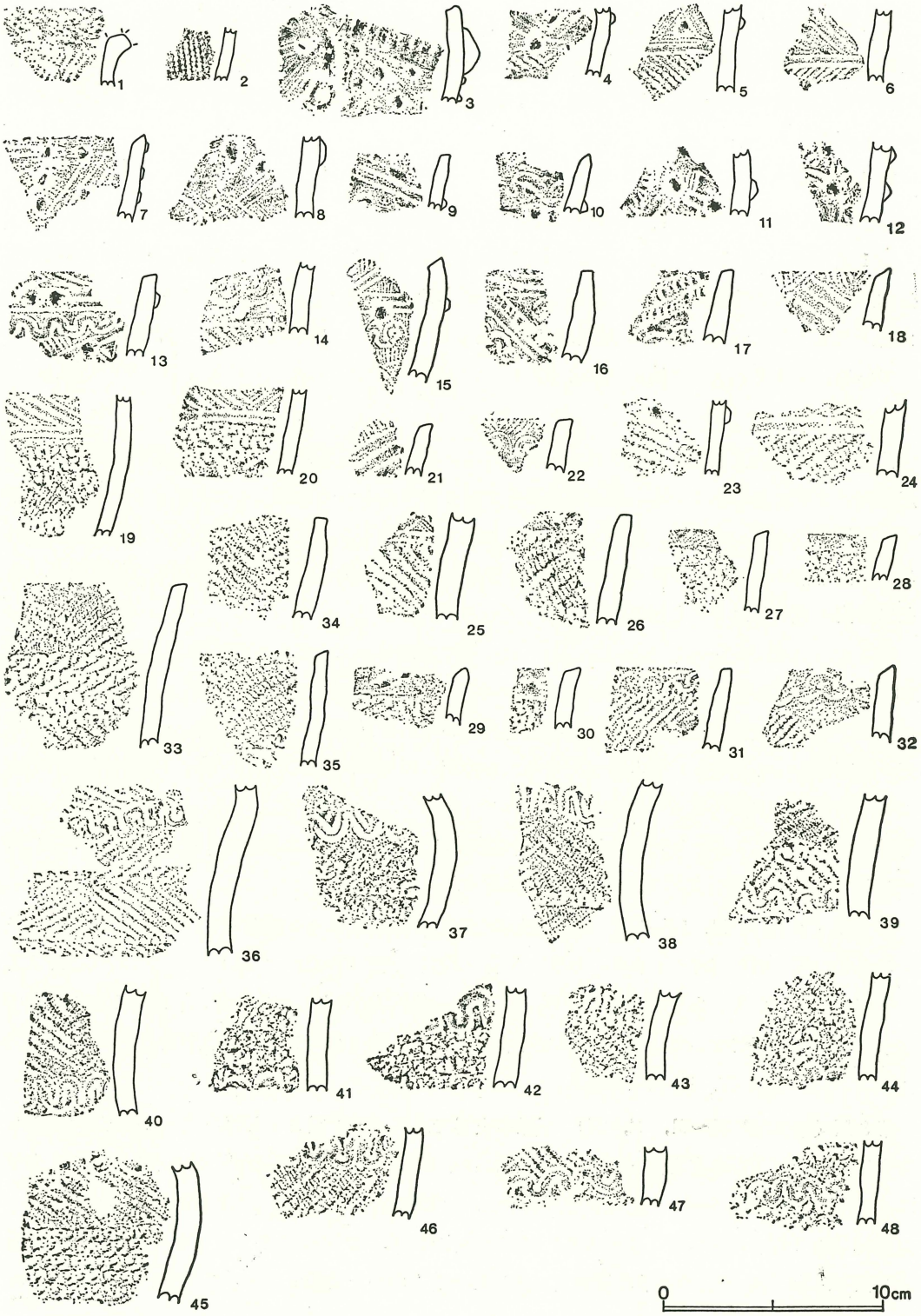
以上の土器群は第 13～15 類を除けば，極めて類似性の強い整作技術上の諸属性（形状，胎土，整形の仕方等）を有しており，資料的価値の高い，良好な一括出土品であるとみなせるものである。後章では時空にわたった検討を若干加えておきたいと考えている。



第20図　Ⅳ区集中出土土器（4）



第21図　Ⅳ区集中出土土器（5）



第22図　グリッド出土土器（1）

d．グリッド出土土器（第22図～第31図）

ささら遺跡からは中期の埋甕と後期初頭の土壙群が検出されているのみで，他時期の縄文時代遺構は全く発見されなかった。だが，表土，あるいは弥生時代以降の遺構の覆土等から相当量の縄文時代に属する遺物が採集された。おそらく，調査区外には当概時期の遺構がかなり埋もれているものと考えられる。

第Ⅰ群土器

縄文時代早期前半の土器群を一括した。

第1類（第22図 1～2） いわゆる撚糸文系の土器群である。1は肥厚，外反した口縁を有する深鉢形土器の口縁部破片であり，器面にはRL縄文が口縁から右下方向へと回転施文されている。口唇上にも2段にわたってRL縄文が回転施文されている。2は胴部破片であり，RL縄文が施されている。井草Ⅰ式土器に比定されよう。

第Ⅱ群土器

前期前半の関山式土器に比定される一群である。胎土には繊維を含んでおり，若干脆弱ではあるが器面は丁寧に磨かれている。器形には波状口縁を有するものと平縁のものとがある。口唇部の作りは内削ぎ状のものが最も一般的なようであるが，平坦なもの，先端の尖ったものも若干認められる。丸味を帯びた口唇部や外削ぎ状のものは皆無であった。底部は全てが上げ底を呈しており，底面に縄文を施文したものも認められる。

第1類（第22図 3～10，12～15，23） 口縁部に文様帯を有するもので，胴部には4～6，14，23によれば羽状縄文等が施文されるものを一括した。文様帯内には半截竹管による鋸歯状を基本モチーフとした文様と貼瘤文とが組み合わされている。3は明らかに波状口縁とわかる土器であるが，波頂部を中心とした口唇上には，やや深めの刻みが連続的に施されている。貼瘤は半截竹管による平行沈線施文後に要所に付加されているが，波頂下には縦長の瘤とその下に円形を描いた瘤が特徴的に付されている。10，12～15には半截竹管によるコンパス文がみられる。また，13，15には数個で1単位の刺切文が文様の空間部分に配されている。

第2類（第22図 11，16～17） 口縁部文様帯内に半截竹管による鋸歯状モチーフと貼瘤文を有する点では第1類と同様であるが，本類は平行沈線間に連続的に刻みが加えられ，いわゆる梯子状の文様となっているものをまとめた。16，17には貼瘤が認められていないが，小破片の為に断定できずここに一括しておいた。17の刻みは半截竹管により施されておりC字爪形文となっている。なおコンパス文が16，17にみられる。

第3類（第22図 18～21，24，25） 平縁の土器で，第1～2類よりも幅の狭い口縁部文様帯を有するもの。胴部の縄文施文の部分との分帯には半截竹管による平行沈線文がめぐらされる。文様帯には平行沈線を集合化した鋸歯状文が施され，口唇直下には5～6個で1単位の刺切文がやはり鋸歯状にめぐらされているようである。胴部の縄文は19，20のようにループを3段にわたって施文したり，24，25のように単に斜縄文を施したりするのが一般的である。19にはコンパス文もみられる。

第4類（第22図 22，31） 器形，文様帯等は第3類と全く同じであるが，本類の土器は口縁部

文様帯内に鋸歯状文に変わってコンパス文が施されていることで区別される。

第5類（第22図 26～28） 平縁の深鉢形土器であり，口縁部文様帯は非常に狭く，文様としては 5～6 個1単位の刺切文が鋸歯状に配されているのみのものを一括した。以下には斜縄文あるいはループ文が施されている。27 に施されたループ文はループの向きを3段に到り変えている。

第6類（第22図 32） 口縁部の幅狭な無文帯にコンパス文のみがめぐらされているもので，胴部には羽状縄文が施されている。口縁断面は内削ぎ状を呈する。

第7類（第22図 29～30） 口縁部に若干の無文帯（約 1.5 cm 前後）を設け，以下に縄文の施されたものを本類とした。30 の口縁断面は一般的な内削ぎ状を呈しているが，29 はやや尖りぎみの断面形態を示している。29 には先端がループとなる羽状縄文が施され，30 には2段のループ文がみられる。

第8類（第22図 33～35） 口唇直下から全面にわたって縄文が施されるもので，文様帯はもたない。33 は口縁に羽状縄文を施し，その下には2段づつ向きを変えたループ文が4段施されている。34，35 も 33 と全く類似した縄文帯の配置を示しており，口縁に羽状縄文，その下にループ文を施文している。

第9類（第22図 36～48，第23図 1～36） 縄文が施されている胴部破片を全て一括した。縄文には0段多条の単節のものが殆んどであり，羽状縄文を構成する際には二種の縄を併用するのが一般的である。そして，縄の先端は大部分がループ部分を有しており，その痕跡を見い出すことは容易である。むしろ，そのループ部分を数段にわたって回転施文し，独特の施文効果をあげているものが多い。ループ文は第22図 41，42，45，第23図 35 のように，同一撚りのもののみで数段にわたった施文がなされるものと，第23図 6，11，22 のように交互に違えるもの，第22図 37，43，44，48，第23図 26，29，33 のように 2～3 段ごとに撚りを変えるもの等のバラエティーがある。また，コンパス文が胴部にめぐらされているものは多い（第22図 36～48）。

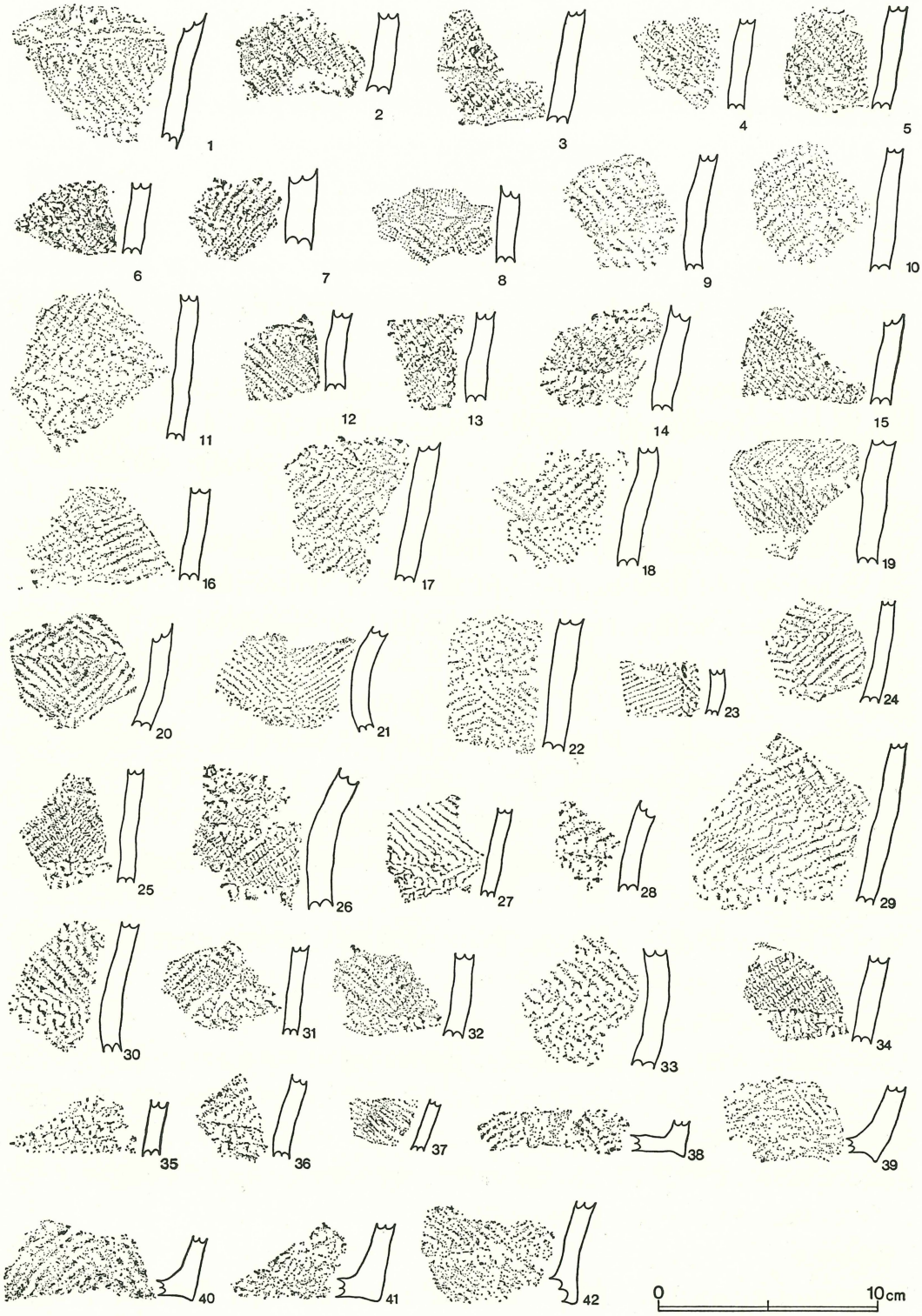
第10類（第23図 37） 器面に貝殻背圧痕文の施されたもので，縄文は全く認められない。深鉢形土器の胴部破片である。

第11類（第23図 38～42） 底部を一括。39 のみが貝殻背圧痕文を有し，他は縄文が回転施文されている。これらの文様は底部末端にまで施文されており，38 などは底面にもループを持った縄文が施されている。全て上げ底形態を示す。

以上の土器は大旨関山Ⅰ式土器に比定される，比較的まとまった資料と見做されよう。だが，口縁部文様帯を有するものの中でも，蕨手状のモチーフが欠落していたり結節や結束第2種の縄文が検出されなかったりで，全セットを構成しているとは言い難い点もある。こうした点はグリッド出土という制約の為でもあろうか。なお，関山Ⅰ式でも古手と考えられる土器片は検出されていない。また，組紐や正反の合の縄文も認められなかった。

第Ⅲ群土器

前期後半に位置付けられる土器群で，すでに繊維が含まれることはなく，色調も赤褐色～黄褐色系を呈するようになる。文様要素としては，半截竹管文が盛んに用いられ，平行沈線文や爪形文が施される。また浮線文構成の土器も一時期盛行する。これらの土器への施文は乾燥がかなり進んで



第23図　グリッド出土土器（2）

第24図　グリッド出土土器（3）

からなされたものが多く，縄文などは浅いものが多い。以上の土器は総称すれば竹管文系土器群とでも呼ぶのが最もふさわしいと考えられるが，従来の型式名では諸磯 a～c 式土器と呼びならわされている。

第1類（第24図 1～2） 幅狭な半截竹管による爪形文が施されたもの。1は波状口縁を有する土器で口縁直下には3条の爪形文列が口縁に沿ってめぐらされており，波頂部下には円形竹管文が縦に一列配されている。地文には LR 縄文が横位に回転施文されている。2は爪形文列により幾何学文が構成され，磨消縄文が施されている。

第2類（第25図 1～5） 縄文のみが器面全体に施文されるものを一括した。1～4は器形が共通しているようで，いずれも外反した口縁部形態を示している。1，3 は RL 縄文，5は LR 縄文が横位に施文されたもので，2，4 には附加条の縄が施されている。

第3類（第24図 3～4） 幅の広い爪形文を主体に文様が構成されるものである。いずれも C 字爪形文が横方向に配されているのみで他のモチーフが不明である。なお，4の爪形文列間には斜沈線が施されている。

第4類（第24図 5～7） 主体文様が浮線文によって構成されるもので，浮線上には縄文が施されているものを一括した。口縁は 5，6 からキャリパー状を呈することが窺え，その口縁部文様帯には渦巻を基調とした文様が配されている。

第5類（第24図 8～21） 同じく浮線文構成の土器群である。だが，本類は 9，13，16，18 などからも明らかなように，口縁部が非常に屈曲しているものが多く，口縁部文様帯が屈曲部を境いに二分されているものが一般的である。浮線上には鋭利なヘラによる刻みが施されており，その向きは交互に変えている。浮線間に刺突列が配されているものもある（18）。

第6類（第24図 22～24） キャリパー状を有する口縁部文様帯に半截竹管による平行沈線文により文様が描かれているもので，22 は鋸歯状，23 は風車状渦巻のモチーフが施されている。24 はどのようなモチーフになるのか不詳である。

第7類（第24図 25～32） 半截竹管による平行沈線文が文様の主体となるもので，平行沈線は幅が狭く，集合化している。器形は口縁が非常に内側に屈曲しており，極めて特徴的である。地文にはいずれも RL 縄文が施されている。

第8類（第24図 33～36） 口縁が若干内彎するか，直口する形態を示す深鉢形土器であり，口唇上には 33～35 共に丸棒状工具による刻み列が配されている。文様は口縁に4本歯の櫛歯状施文具により押し引き文がめぐらされるのを特徴としている。それ以下には，36 によれば，類似の施文具により曲線的なモチーフが展開されていると考えられる。地文には RL 縄文が施されている。

第9類（第24図 37～48） いずれも深鉢の胴部破片であり，数本の集合沈線による文様が施されているものを一括した。多くの曲線的なモチーフを有する土器は第8類とした 36 の土器と親近性が強いが断定はできない。第7類の胴部破片も含まれているかも知れない。

第10類（第24図 39～50） 底部及び底部付近の破片を一括した。いずれも RL 縄文を地文に持ち，平行沈線文が要所にめぐらされている。

第11類（第26図 34～38） 集合条線が器面全体に鋸歯状に施され，その上には米粒状の貼瘤

が付加されているものを一括した。いずれも小破片であり，詳しい器形等は不明である。

第12類（第26図 39） 器面には集合条線が施され，その上に円形の貼瘤文が付されているもので，1片発見されたにすぎない。

第13類（第26図 40～41） 破片が小さくどのような器形となるのか不明であるが，いずれも途中に段を有している。器面上には隆線が縦位に貼り付けられている。41 には地文に集合条線が認められる。

第14類（第26図 42～43） 集合条線が施されただけのものを一括。42 は深鉢の胴部，43 は底部の破片である。いずれも集合条線は右下がりに施されている。

以上がささら遺跡出土の諸磯式土器の全てのバラエティーで，第 1～2 類が諸磯 a 式に，第 3 類が諸磯 b_1 式，第 4，6 類が諸磯 b_2（古）式，第 5，7 類が諸磯 b_3 式，第 11，12，14 類が諸磯 c 式に比定されよう。第 8，9 類は寡聞にして類例を知らず不詳としておく。第 10 類はおそらく諸磯 b_2（新）～b_3 式と考えられよう。第 13 類に関しても諸磯 c 式土器群と一緒に扱かったが検討を要しよう。

第Ⅳ群土器

諸磯 a～c 式土器に併行して東部関東を中心に分布を示すと一般に言われる，浮島式，興津式土器をまとめた。これらの土器群を便宜的に総称するならば貝殻腹縁文系土器群とでも言い得ようか。色調，胎土，焼成に関しては，本遺跡の場合，際立った相違点は認められなかった。

第1類（第25図 6～10） 半截竹管の支点を交互に引き摺ることによりできる沈線，つまり所謂有節平行沈線文が施されているものを一括した。6 は大きく口唇部が外に向けて削がれた部分に細長い刺突列が施された平縁の土器で，8 は有節平行沈線文と波状貝殻文が組み合わせられ，10 は半截竹管による平行沈線文と組み合っている。

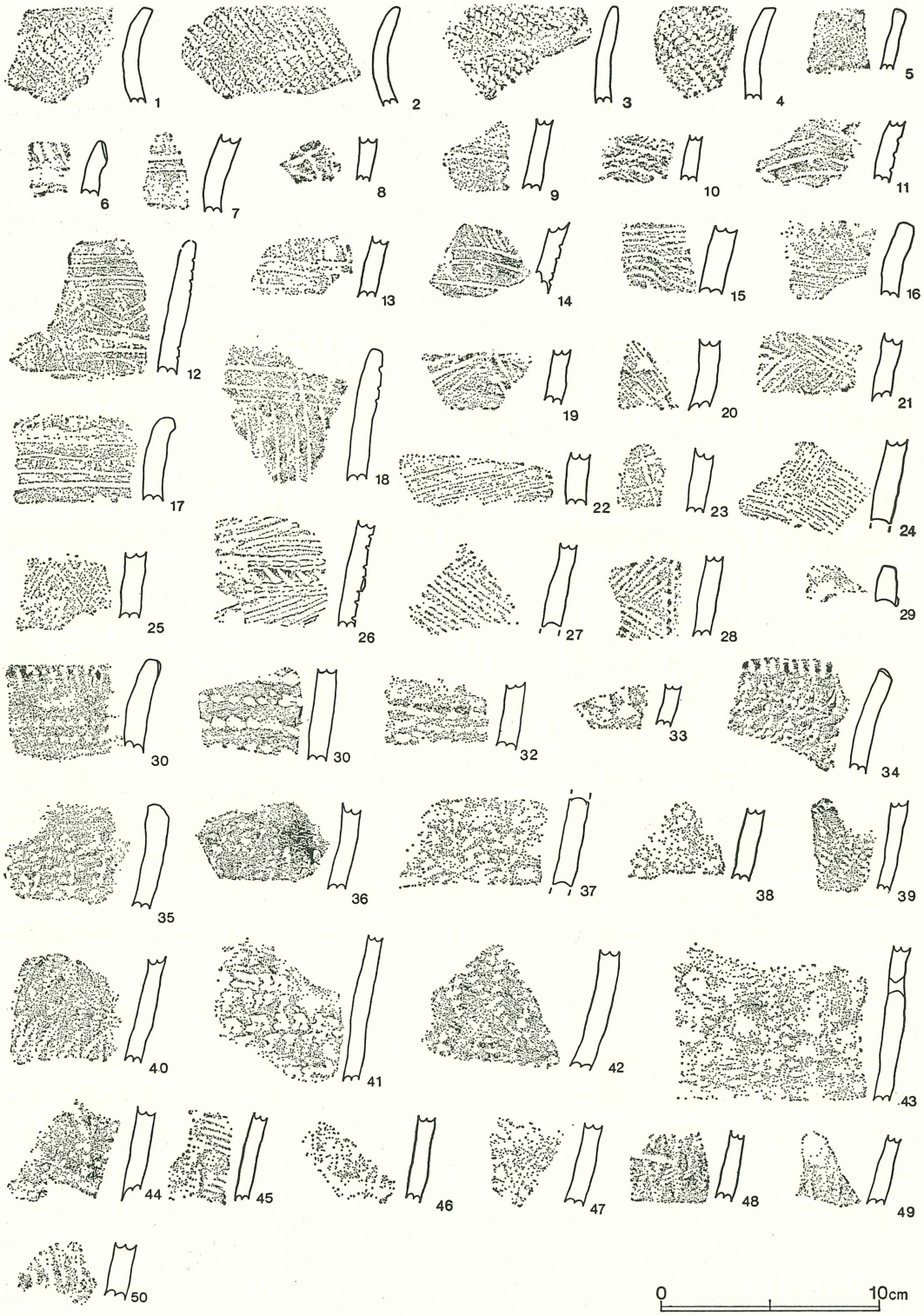
第2類（第25図 11～28） 平行沈線文が施文の基調となっているもの。12，13 は地文として貝殻腹縁による波状貝殻文が施されているものである。17 は外側にめくれた口唇上に刻み列を持ち，かつ沈線間にも一列刺突がみられる。21～28 は平行沈線が幅の狭い半截竹管により，鋸歯状に集合化して施されている。26 には刻みを有する隆帯を挟んで半截竹管による押し引き沈線が認められ，28 には半截竹管による押し引き沈線が縦に施されている。

第3類（第25図 29） 口縁部の破片であり，輪積み痕が外面に顕著に残されている。輪積痕を残した器面には竹管によると思われる凹凸文が付加されている。

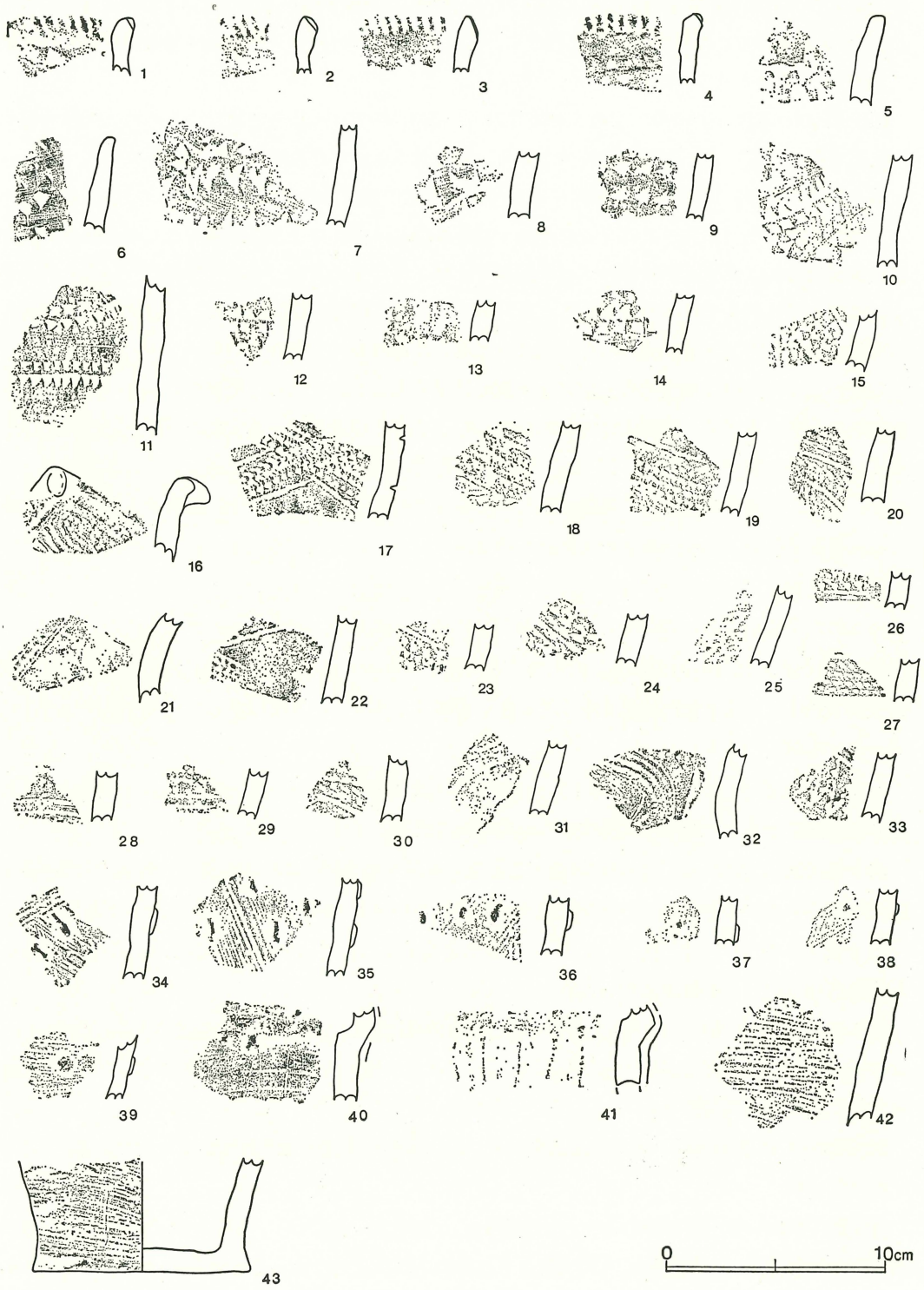
第4類（第25図 30～33） 半截竹管の支点を交互にずらしながら刺突することによってできる爪形文列，所謂変形爪形文が施されているものを一括したが，実際にはいずれも三角文風に施文されている。30 は口縁部破片で，口唇から口唇直下にかけて細長い刻み列がめぐらされている。

第5類（第25図 34～50） 貝殻腹縁の支点をずらしながら押すことによりできる所謂波状貝殻文のものをまとめた。貝殻にはアナダラ属系とハマグリ系の2者があるが，後者は 50 のみで，他は全てアナダラ属系である。34，35 は口縁部破片であり，34 には口唇上に刻み列がめぐらされている。全体的に大きめの貝殻が施文具として用いられている。

第6類（第26図 1～9） 波状貝殻文の施された土器ではあるが，支点となる部分を深く抉るよ



第25図　グリッド出土土器（4）



第26図　グリッド出土土器（5）

うに押しているものを集めた。いずれもハマグリ系の貝殻が用いられているようである。7～8 を除くと三角文が施されているように観察される。1～6 は口縁部破片であり，いずれも外反している。1～5 は平縁で，6 は波状口縁を有すると考えられる。1～4 の口唇上には刻み列がめぐらされている。

第7類（第26図 10～14） 三角文が施されているもので，それらを挟むように極めて細く鋭利な沈線が引かれているのを最大の特徴とする一群である。いずれも深鉢の胴部破片であろう。

第8類（第26図 15～33） 沈線間に非常に間隔を密に波状貝殻文が施されたものである。モチーフは直線的な幾何学文が主体を占めるようであるが，31，32 のように曲線的なものもある。貝殻文の施文部と無文部分とが沈線によって画然と分離された文様構成は極めて装飾的であると言えよう。器形には波状と平縁の両者があると思われるが，16 は波頂部に瘤を有する資料である。なお，波状貝殻文は全てアナダラ属系のものによって施されるのを特徴としている。

以上のように貝殻腹縁文系の土器群は8類に分類することができた。現在，これらの土器群は一般的には浮島Ⅰ～Ⅲ式，興津式に分けられている。そこで当遺跡の土器群を上記型式に仮に比定すると，第1～5類が浮島Ⅱ式，第 6～7 類が浮島Ⅲ式，第8類が興津式土器ということになろう。だが，浮島，興津の両土器群の細別は未だ不明瞭な点が多く残されており，諸磯式土器との対比を含めた検討が要請されているという現状にある。

第Ⅴ群土器

縄文時代中期後半に位置付けられる加曽利E式系の土器群で，出土量はあまり多くない。

第1類（第27図 1～2） 口縁部が内彎する所謂キャリパー形の深鉢形土器である。通常，口縁部文様帯内には渦巻と楕円枠状文を交互に配する場合が多く，1，2 は両者ともそのうちの楕円枠状文の部分の破片である。

第2類（第27図 3～4，第28図1） 内彎する口縁部を有し，幅の広い沈線によって分帯された口縁部無文帯をもち，胴部には縄文のみが施される土器。

第3類（第27図 5～6） 口縁部に若干の無文帯を持ち胴部に縄文のみが施文される点は前類と同じだが，5は無文帯の境に明確な沈線等は施されない。6には二列の円文がめぐらされている。

第4類（第27図 7～9，第 28図 2～4） 磨消縄文が盛行している土器群であり，胴部には大柄な曲線的なモチーフが施されている。

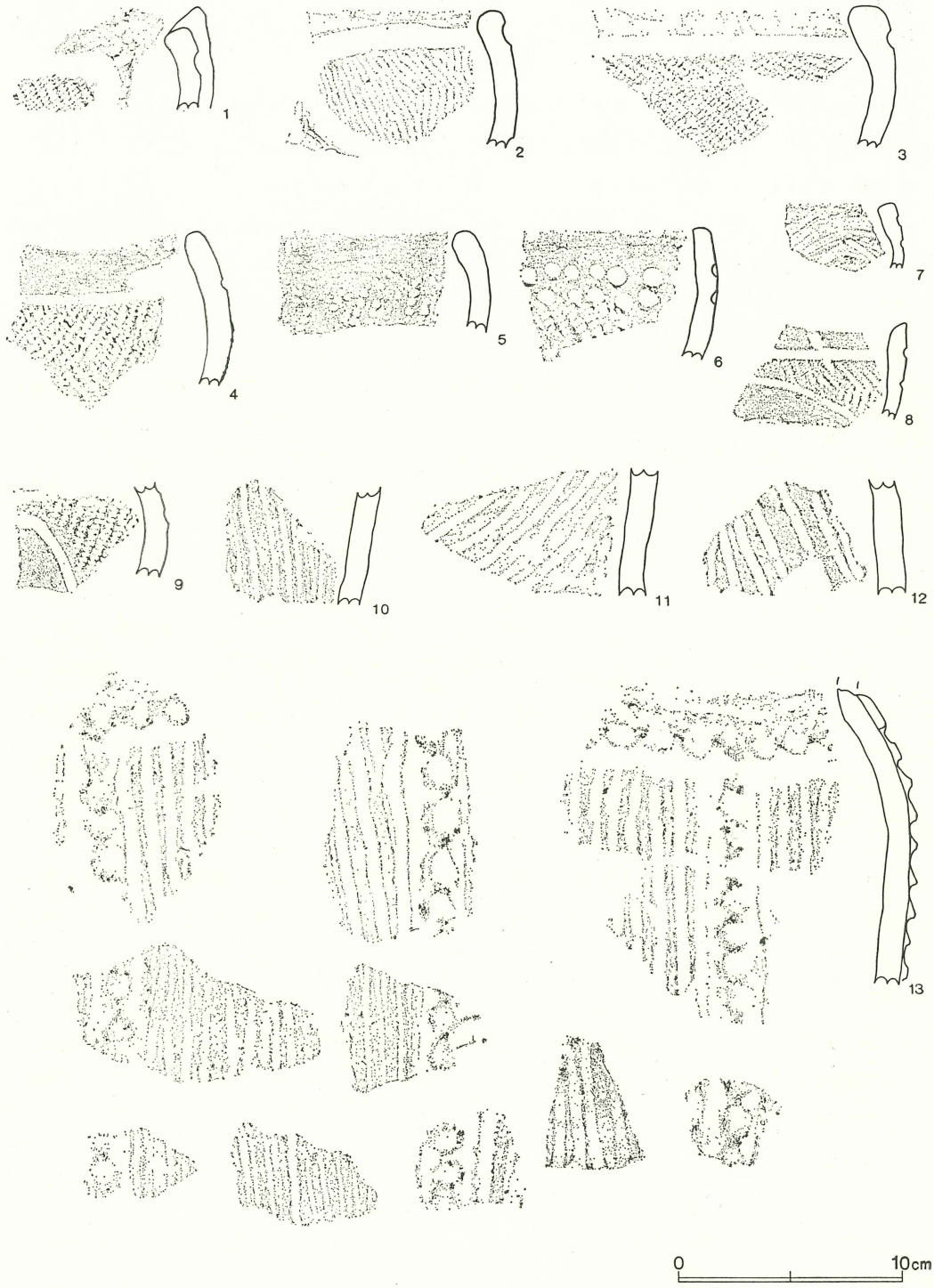
第5類（第27図 10～13） 地文としての役割を充分に果たしているのが沈線である。沈線上には指圧痕を有する隆帯文が貼り付けられている。13 はかなり大形の胴部破片である。10～12 は沈線以外の文様は不明である。

第6類（第28図 5～6） 櫛歯状工具により，縦位の集合条線が施されている土器である。

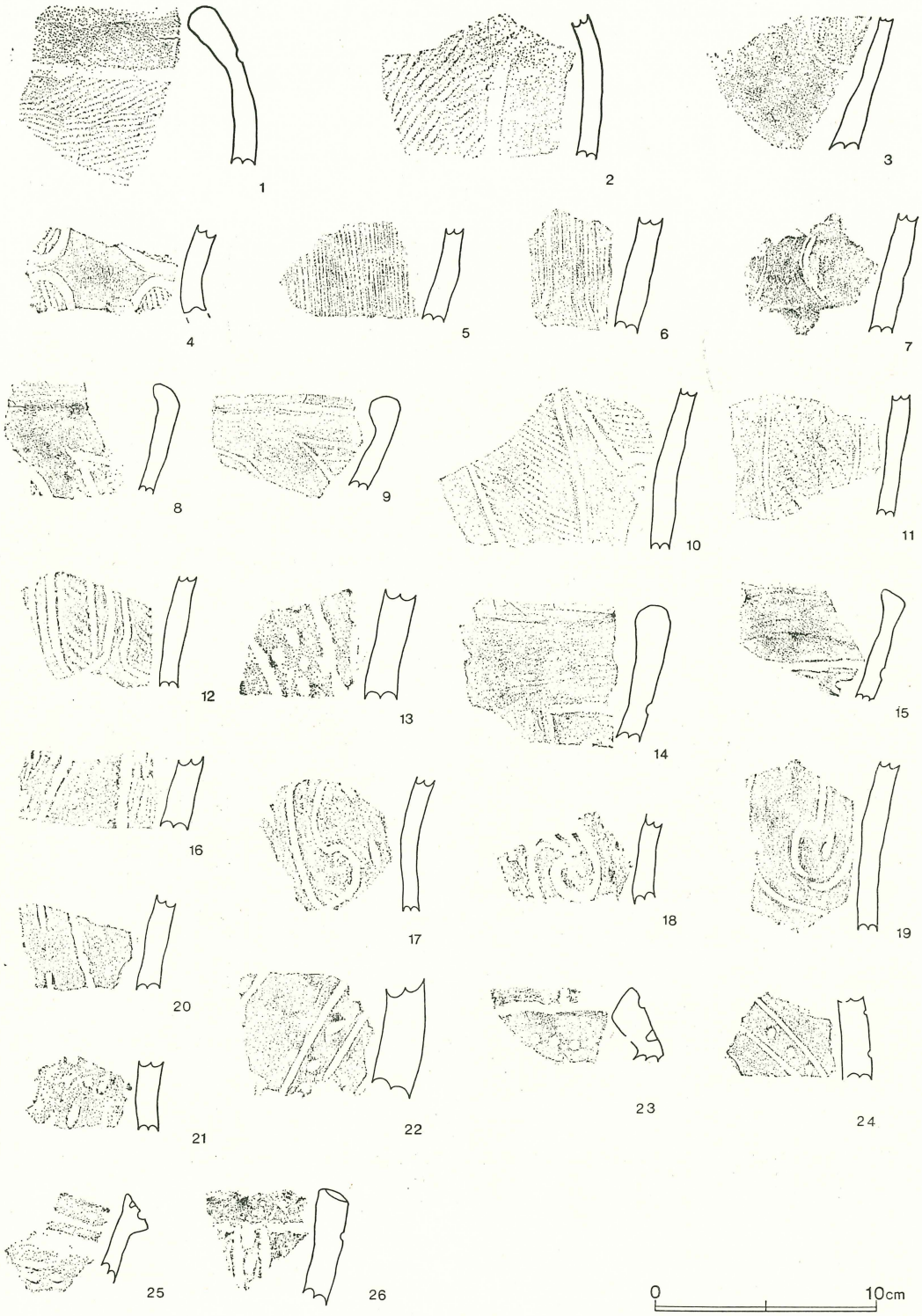
第Ⅵ群土器

縄文時代後期初頭～後期中葉までの土器群をとりあえず一括したが，現実には大半が後期初頭に属するものであった。所謂称名寺式土器とその系列下に位置付けられる土器群の出土量には注目すべきものがあった。

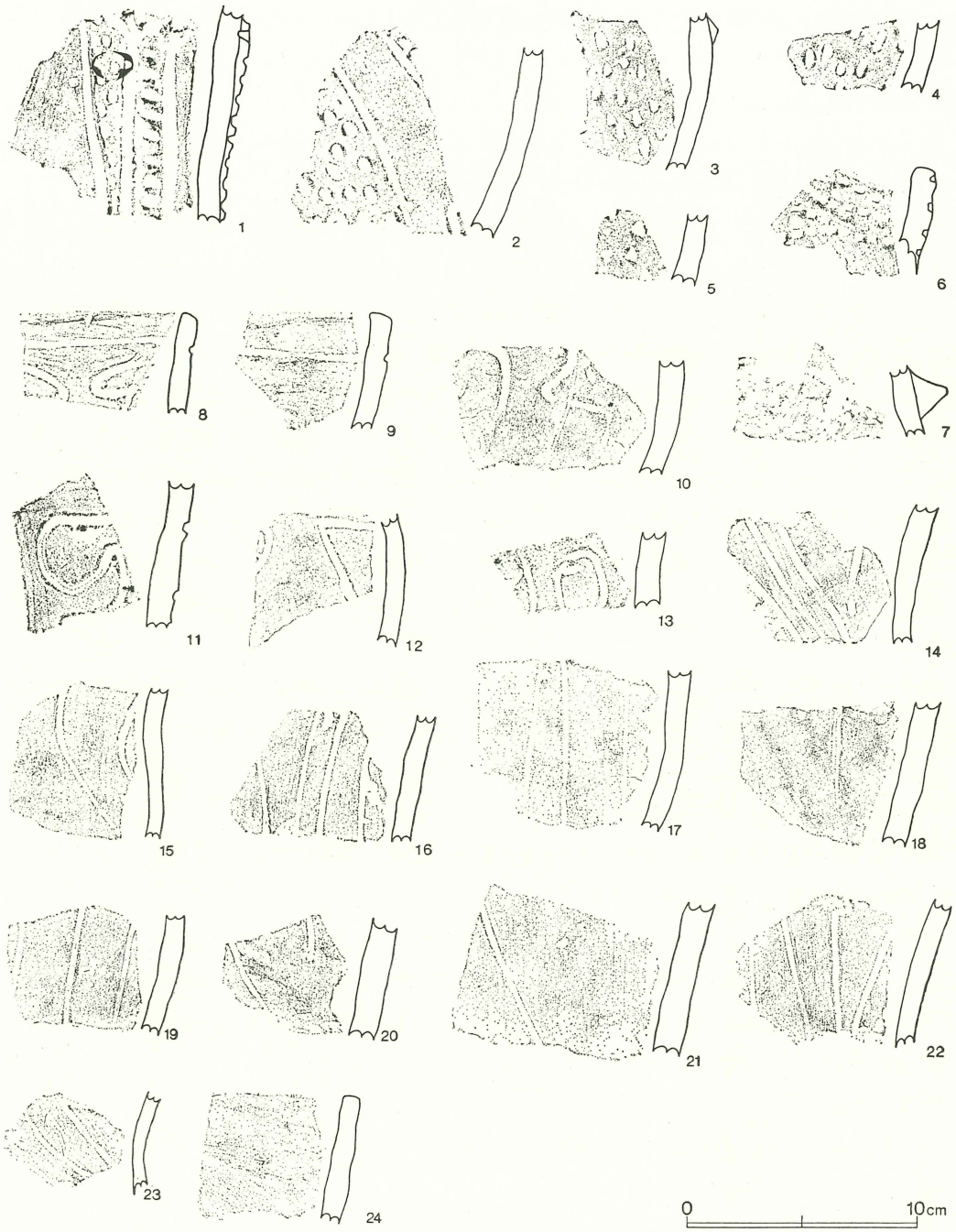
第1類（第28図 8～12） 口縁部は頸れた胴部から外反しつつ立ちあがっているが，口唇部で内



第27図　グリッド出土土器（6）



第28図　グリッド出土土器（7）



第29図　グリッド出土土器（8）

側に屈曲する（8，9）。文様としては充塡縄文による曲線的なモチーフが描かれている。

第2類（第28図 13～26，第29図1～7） 器形や施される文様は第1類と良く類似しているが，本類は沈線間に充塡されるものが，縄文から刺突文に変わっていることで特徴付けられている。刺突の種類は米粒状と円形，角状等がある。米粒状のものは13～22，25～26で，円形は23～24，1～4，角状を呈するものは5～7である。全体的に円形，角状のものは面を埋めるようにランダムに刺突される傾向にある。列点のものとは大きく違う点であろう。

第3類（第29図 8～23，第30図4） 沈線のみによって文様が構成されるもので，器形，モチーフ等は前2類と殆んど同じである。だが，沈線の運びは稚拙である。

第4類（第29図 24） 口縁に若干の無文帯を残し，胴部に擦痕風の集合条線が施された土器である。平坦な口唇部を呈している。胴部にはおそらく軽いくびれを有していると思われる。

第5類（第30図 1～3，5～17，22） 胴部に屈曲部を有し，口縁部は大きく外反しながら立ちあがり，口縁端部で内屈する特徴的な形態の深鉢形土器を一括した。1～3，5，22は波状口縁を有し，6～9，15，16は一部に小突起を持つものの平縁の土器である。開いた口縁部には殆んど文様が施されることはなく，内屈した所謂縁帯部にのみ，盲孔とそれらを連絡する沈線がめぐらされるのを特徴としている。波頂部や突起部には渦巻状の貼付や逆C字等の貼付や沈線文が配されている。17も波頂部下か突起下に配されるべき文様である。10～14は胴部の破片であるが，沈線による文様が描かれている。12～14は貼瘤を中心に3本単位の沈線が渦状に描かれている。

第6類（第30図 18～19） 地文にLR縄文が施され，沈線による蛇行文（蕨手文）が垂下されているもの。

第7類（第30図 20～21，23～25） 若干薄手の作りの土器で，朝顔状に開く器形を有する。文様は幾何学的な文様構成の磨消縄文（20～21）や，矢羽根の沈線文（24），格子目文（25）がある。これらは共通して口縁内面に一条の沈線がめぐらされている。23はやや異なり，幅広の口縁部無文帯と櫛歯状工具による蛇行文がみられる。

第8類（第30図 27） 波状口縁を有する深鉢の波頂部破片である。内外共に大柄な列点が施され，頂部には粘土帯により渦巻が作出されている。

本群はやや時間的に幅のある土器群であるが，第1～4類は称名寺式土器の系列でも最も新しい部分の土器であり，第5類とおそらく同一時間帯に所属するものとして位置付けることが可能であろうと考えられる。第6類は堀之内Ⅰ式（古い部分），第7類は堀之内Ⅱ式，第8類は加曽利B式に比定されよう。

第Ⅶ群土器

後期後葉～晩期中葉に位置付けられる安行式系土器を一括して本群とした。全体的に土器は細片が多く，文様が不分明なものも少なくなかった。

第1類（第31図1） やや肥厚した口縁を有する紐線文系の土器であり，地文には縦位の篦による条線が施され，口縁には刺突列が施される。

第2類（第31図 2～4） やや肥厚した口縁を有する紐線文系の土器で，若干外反した口縁部を有する。口縁には爪形文列がめぐらされている。

第30図　グリッド出土土器（9）

第3類（第31図5～8） 紐線文系の土器で内湾した口縁を有する。刺突列が口縁と胴部に沈線で画されてめぐらされている。地文の箆条痕は斜位である。

第4類（第31図9） 肥厚した口縁部は粘土を重ねたようで，その上には刺突列がめぐらされている。箆条痕が斜位に施されている。

第5類（第31図10～11） 内湾し，肥厚した口縁部を有する深鉢で，沈線によって画された口縁には箆状工具による爪形列がめぐらされている。地は無文である。

第6類（第31図12） 第5類と殆んど同じだが，口縁部の爪形列を画する沈線がない。

第7類（第31図13） 内湾した器形で，複合口縁を有する。肥厚した口縁には爪形列がめぐらされており，地は無文である。

第8類（第31図14） 紐線文系の深鉢であり，肥厚した複合口縁には刺突列がめぐらされ，胴上部の文様帯には地の条痕を磨り消す手法が認められる。

第9類（第31図15～16） 口縁部と胴部に紐線文が貼りめぐらされ，紐線文上には，おそらく指頭による刺突列が加えられている類で，箆による条痕が地文として施されている。

第10類（第31図17） 刺突列のめぐらされた肥厚した口縁部に縄文が施されているもの。縄文原体はRL撚りである。

第11類（第31図18～19） 紐線文系土器の胴下部の破片である。箆による条痕が斜位に施されている。

第12類（第31図20） 紐線文の施された土器で胴下部に磨消縄文による弧状のモチーフが描かれたもの。

第13類（第31図21） 内湾し，肥厚した口縁部を有する，紐線文の系列下に属する深鉢で，沈線によるモチーフが胴土部文様帯内に配される。

第14類（第31図22～25） 縄文が帯状の部分に施されたもので，23は肥厚した所謂帯状縄文の土器で，22，24は口縁部の肥厚の度合が弱い。いずれもRL縄文が施されている。

第15類（第31図26） 紐線文系の系列下に入れることが可能な土器であるが，口縁部は直に立ち上がっている。口縁部には爪形列がめぐらされ，胴上部文様帯の沈線間にも同様の爪形列が充塡されている。

第16類（第31図27～31） 沈線間に列点文が充塡されたものを一括した。列点は米粒状のものが多い。

第17類（第31図32～34） 沈線のみによって入組文等のモチーフが描かれるものを一括した。沈線は幅広く，深めのものが多い。

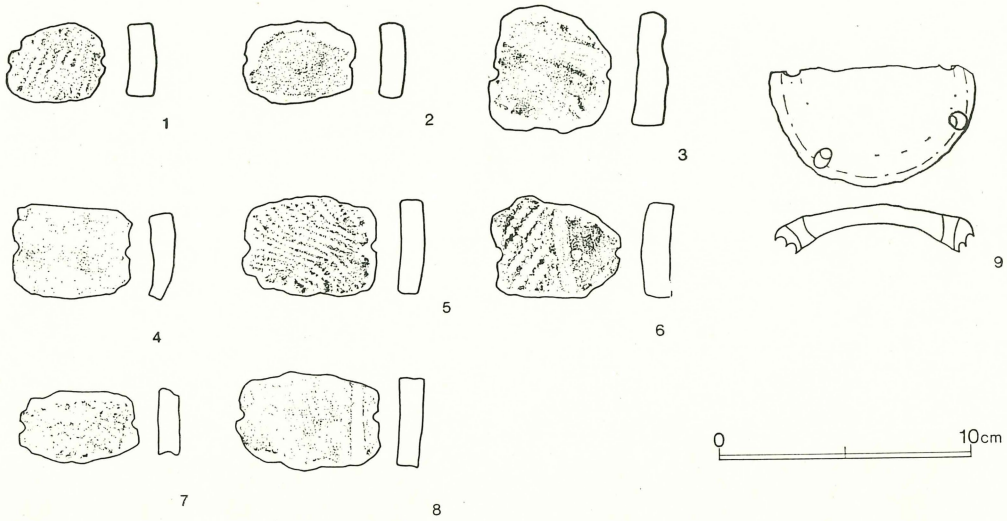
第18類（第31図35） 全くの無文の土器である。内湾した口縁を有する深鉢であり，器面には輪積み痕や指頭圧痕風の凹凸が残されており，整形の粗雑な土器である。

第Ⅷ群土器

縄文晩期末葉の土器で，大洞A式に併行関係を有すると考えられる土器群である。

第1類（第31図36） 浅鉢の器形を呈する破片であり，口縁部には浮線網状文が施されている。口縁内面にも一条の沈線がめぐらされている。

第31図　グリッド出土土器（10）



第32図　ささら遺跡出土土製品

第２類（第31図37）　土器は若干丸味をおび，椀状の器形を呈する。浮線網状文が施されている。

第３類（第31図38～40）　いずれも浅鉢の器形を呈すると判断されるが，口縁部には２(38)～３条（39～40）の平行沈線がめぐらされるだけの簡素なモチーフの土器である。口縁部内面には原則として１条の沈線がめぐらされているようだ。38 のみ２本の沈線となっている。だが，これも半截竹管によった為，結果的に２本となってしまったにすぎないと考えられる。

e．土製品

土製蓋（第30図26，第32図９）　いずれも無文である。しかも手づくねであり，紐通し用の貫通孔がみられる。

土器片錘（第32図1～8）　すべて加曽利E式土器の破片が利用されている。４が口縁部で他は胴部破片である。１から順番に重さを明記すると 15.1ｇ，18.1ｇ，32.1ｇ，18.8ｇ，26.2ｇ，23.0ｇ，14.1ｇ，26.7ｇ となる。概して荒川沿岸の縄文中期遺跡からは多くの土器片錘が出土する傾向にあるが，本遺跡の資料も重さを含めて，それらと大きな相違点は認められないようである。

（鈴木　敏昭）

f．石器

今回出土した石器はその遺跡の性格から言い，一定のまとまりをもつものではなかった。

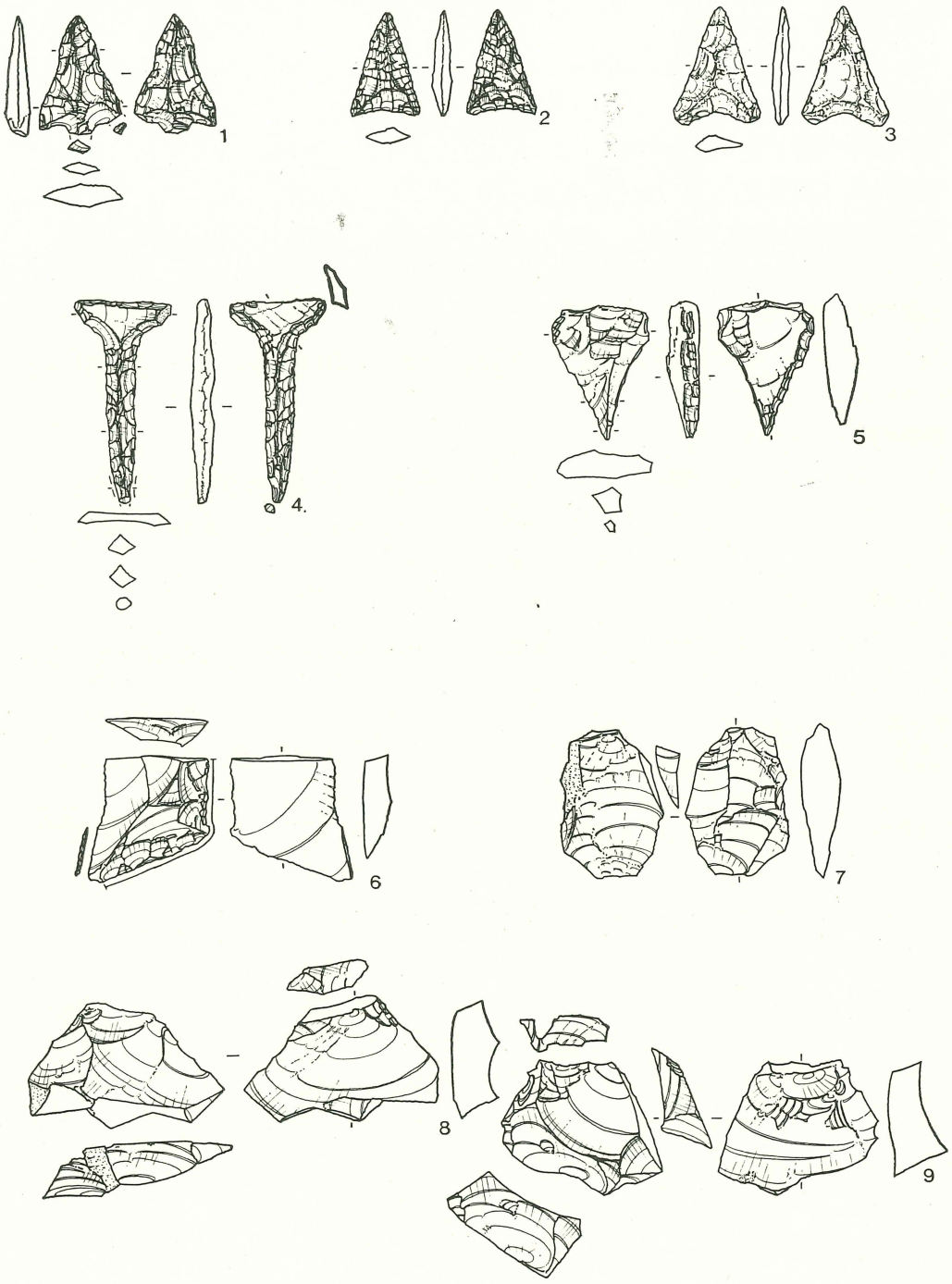
有舌尖頭器（第33図１）

片脚と舌部を欠損している。作りは胴部中ほどから急にふくらみ，脚部の先端が尖がるように片面の凹基部に大きな剝離を施している。

石鏃（第33図2・3）

２点とも平基無茎鏃で作りは良い。

ドリル（第33図4・5）



第33図　ささら遺跡出土石器（1）

4は錐部を精巧に細長く作り出している。先端部で（ー）で示した所は使用によるためかトロトロに磨滅している。5は剝片の一端に加工を施しドリルにしたものである。錐部断面は平行四辺形に作られており，表面右縁のナイフ形石器のブランティングを思わせるぐらい垂直である。

スクレーパー（第33図6）

不定形である，縦長剝片の打点側を折断して形を作っている。図上 ⊢⊣ で示した所と抜き出した所が刃部である。

ピエス・エスキーユ（第33図7）

両極打法の痕跡を有しており楔形石器であろう。

コア（第33図8・9）

黒曜石の剝片を利用した小形のものである。8は下端を打断している。

打製石斧（第34図10～12）

形状が明らかなのは12の分銅形石斧のみで，残りの2点は頭部のみである。10は折面が新しいため図示しないでおいた。

磨製石斧（第34図13～16）

4点の出土を見たが全て破損していた。頭部1点，刃部3点である。刃部形状は13,16が円刃で使用痕を見るかぎり長軸に平行する。14は偏刃で表面左側に傾いている。使用痕の方向は右から左へと斜めに入り13，16の円刃と明らかに異なっている。

たたき石（第34図17）

明確に敲打した所は見られなかったが，先端から所々研磨された所があり，人工品であることは間違ないと思う。

すり石（第34図18～20）

3点出土したがいずれも破損品であった。

（西井　幸雄）

第34図　ささら遺跡出土石器（2）

No.	器　　種	地　　点	法　量（cm）			重　さ（g）	石　質	備　　考
			長さ	巾	厚さ			
1	有舌尖頭器	Ⅱ区２号住	—	1.8	0.6	0.15	チャート	
2	石　鏃	Ⅲ区表採	2.35	1.55	0.45	0.1	チャート	
3	石　鏃	Ⅱ区表採	2.55	1.9	0.4	0.16	砂　岩	
4	ドリル	Ⅱ区表採	4.45	2.2	0.65	0.21	頁　岩	
5	ドリル	Ⅳ区３号墳周堀内	3.0	2.1	0.8	0.34	チャート	
6	スクレーパー	Ⅱ区１号住南壁土	—	—	—	0.47	チャート	
7	ピエス・エスキーユ	Ⅳ区１号墳周堀内	3.3	2.3	—	0.62	チャート	
8	コ　ア	Ⅱ区表採				0.93	黒曜石	
9	コ　ア	Ⅱ区表採				1.04	黒曜石	
10	打製石斧	Ⅲ区	—	3.8	1.6	4.3	安山岩	
11	打製石斧	Ⅲ区表採	—	4.6	2.65	4.6	砂　岩	
12	打製石斧	Ⅱ区表土	8.7	7.0	2.3	13.3	砂　岩	
13	磨製石斧	Ⅱ区１Ａ表土	—	3.0	1.3	1.8	砂　岩	
14	磨製石斧	Ⅳ区表採	—	3.2	1.4	3.3	凝灰岩	
15	磨製石斧	Ⅳ区３号墳周堀内	—	4.05	1.9	4.1	砂　岩	
16	磨製石斧	Ⅲ区表採	—	5.85	2.35	6.0	砂　岩	
17	たたき石	Ⅳ区表採	8.5	5.7	3.4	17.8	砂　岩	火焼している.
18	すり石	Ⅳ区３号墳周堀内				10.6	花崗岩	
19	すり石	Ⅱ区表採				8.0	安山岩	
20	すり石	Ⅱ区表採				9.3	安山岩	

(3) 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構と遺物

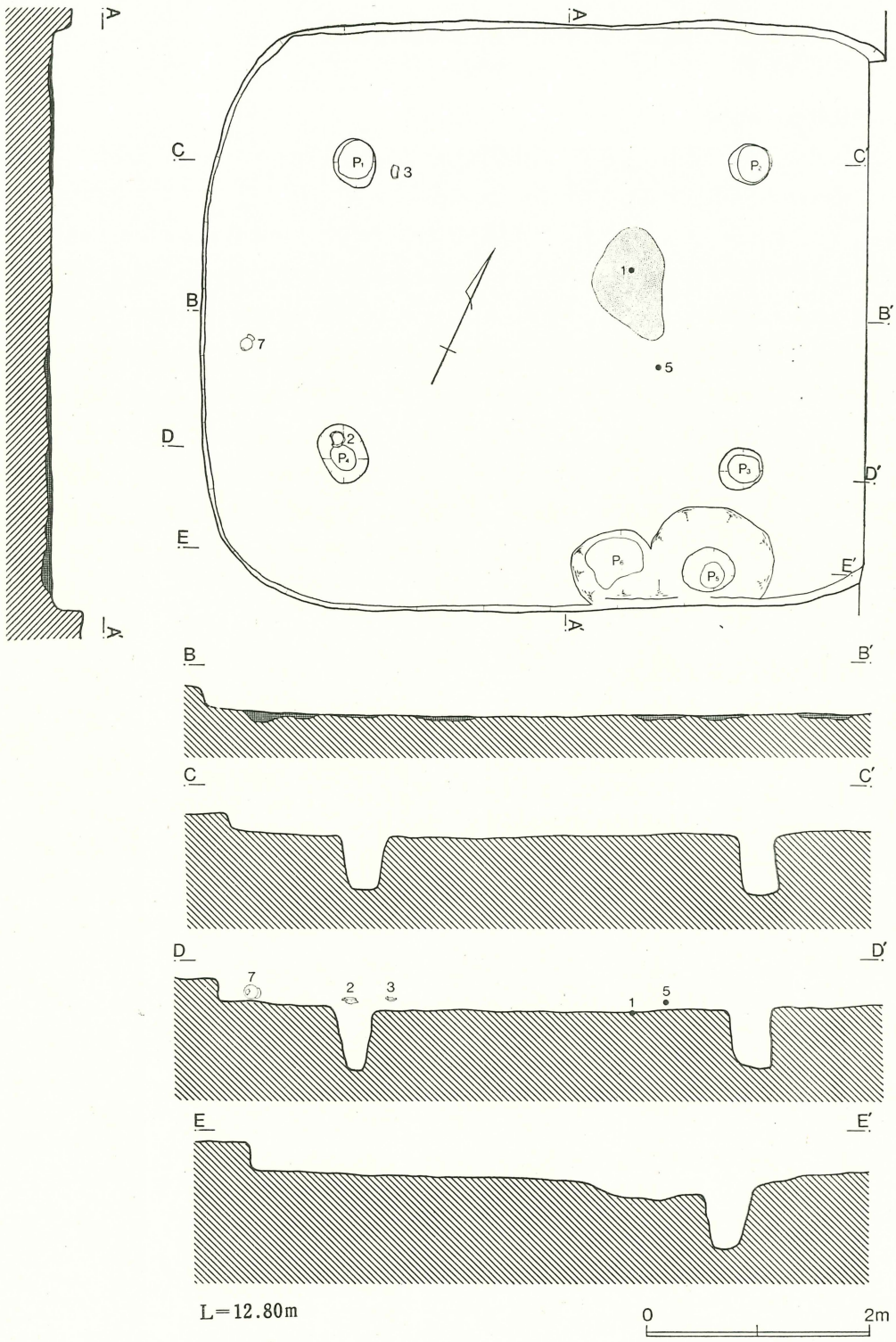
Ⅱ区で21軒の竪穴住居址と1棟の掘立柱建物址が検出された。

1号住居址（第35図）

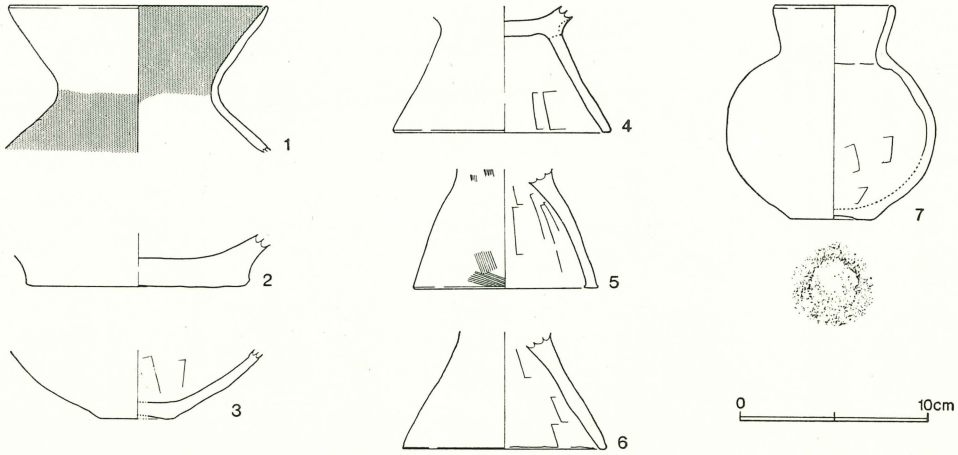
発掘区域最北端に位置し，これより北側約10 mのところで沖積台地は終わり，低地に移行するため，本住居址は2号住居址とともに集落の北端に占地された住居址と言えよう。東壁が発掘区域外にかかるため完掘はできなかったが，未調査部分はほんのわずかと見られる。5.2 m×6.2 mと推定され，当遺跡では8号住居址に次ぐ大きさである。主軸方向に対して横に長い隅丸方形を呈すると考えられる。主軸方向はN—25°—Wである。ローム面から床面までの深さは20～30 cmで，壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で，その中心は住居址の対角線の交点から方向角75°，距離60 cmに位置し，南北にやや長い不整楕円形を呈する。ピットは6個検出され，P_1～P_4 が主柱穴である。深さは P_1 48 cm，P_2 52 cm，P_3 53 cm，P_4 55 cm である。南壁際の P_5 は貯蔵穴と考えられ，その中心は方向角151°，距離275 cmに位置する。2段に掘られており，1段目は長径110 cm，短径80 cm，深さ5 cm，2段目は長径50 cm，短径40 cm，深さ50 cmである。P_6 は深さ15 cm前後の浅いものである。遺物は1，7が床面直上から，また2がP_4中から床面とほぼ同一レベルで出土した。あとはいずれも覆土から出土したものである。

1号住居址出土土器（第36図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1		頸部緩く屈曲し，口縁部やや内弯気味に開き口唇部に至る。口唇部は内側に稜をもつ。	口縁部外面タテナデ，内面タテヘラ磨き・丹彩。胴部外面ヘラ磨き・丹彩。にぶい黄橙色。	床直。
壺	2	底径 11.8	平底。	外面ヘラ磨き。にぶい赤褐色。	
壺	3			内面工具によるナデ。外面ヘラ磨き。橙色。	
台付甕	4		脚台部やや外反気味に開き裾でやや内弯。天井部平坦。	内面工具によるナデ。にぶい橙色。	
台付甕	5	底径 (9.8)	脚台部内弯気味に開く。	外面ハケ整形後ナデ。内面工具によるナデ。にぶい橙色。	
台付甕	6		脚台部直線的に開く。	内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	
坩(小型壺)	7	口径 6.0 胴径 11.1 底径 4.3 器高 11.4	頸部緩やかに屈曲し，口縁部内弯気味に開き，丸い口唇部に至る。ほぼ球胴。底部外縁にドーナツ状の粘土帯を貼付。	口縁部内面ヨコヘラ磨き。胴部外面ナナメハケ後タテヘラ磨き，内面工具によるナデ。径2～5 mm の白色小石を多量に含む。焼成堅緻。にぶい赤褐色。	床直。ほぼ完存。



第35図　1号住居址



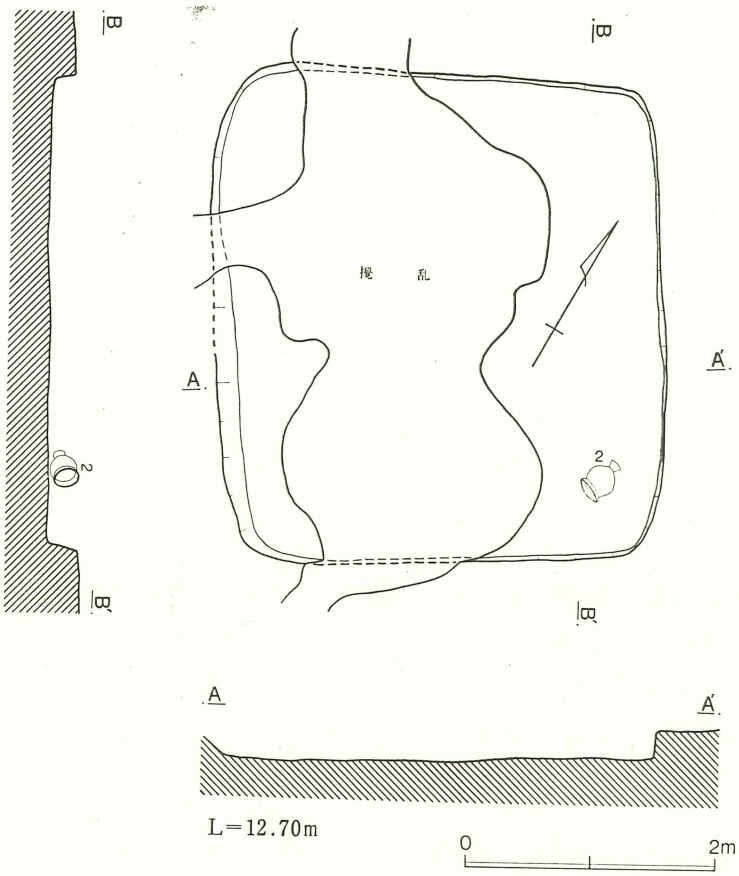
第36図　1号住居址出土遺物

2号住居址（第37図）

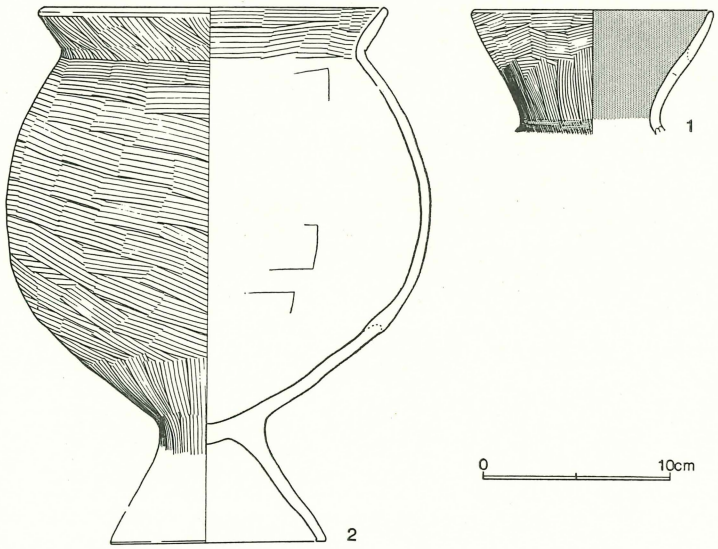
1号住居址同様，当遺跡が占置する台地の最北端に位置する。3.8m×3.6mの隅丸方形を呈する。住居址中央部が広く攪乱を受けていることもあって，炉址・ピットなどは検出されなかった。長軸（南北軸）方向はN—31°—Wである。ローム面から床面までの深さは20数cmで，壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は2台付甕が床面直上からおし潰されたかっこうで検出され，また1壺口縁部は床下の貼床の土の中から見つかった。

2号住居址出土土器（第38図）

器　種	番号	大きさ(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　　考
壺	1	口径 12.6	頸部緩く屈曲し，口縁部外反気味に開いた後やや内弯して丸い口唇部に至る。	外面ハケ整形。内面タテヘラ磨き・丹彩。口唇部ヨコナデ。橙～明黄褐色。	
台付甕	2	口径 19.0 胴径 23.0 器高 28.5	頸部緩く屈曲し，口縁部直線的に開き，口唇部は平坦な部分と丸い部分あり。胴部最大径ほぼ中位に存す。脚台部直線的に開き，裾部でやや内弯。	口縁部外面ナナメハケ，内面ヨコハケ，胴部外面上半ヨコハケ，下半ナナメ～タテハケ。ハケ目はすべて粗い。口唇部ヨコナデ。胴部内面工具ナデ。明赤褐色。	床直。



第37図　2号住居址



第38図　2号住居址出土遺物

3号住居址（第39・40図）

2号住居址の南約6mに位置し，住居址中央を3号溝に，南端を4号溝によって切られている。東西軸長は4.5mくらいで，隅丸方形を呈すると推定される。主軸方向はほぼN—30°—Wである。ローム面から床面までの深さは20cmで，壁はやや傾斜気味に立ち上がる。壁溝は住居址北コーナーから東壁にかけて残り，幅20数cm，深さ数cmである。炉は住居址中央，北寄りに位置し，主軸方向に長い楕円形を呈する地床炉である。ピットは2個検出されたが，このうちP_1は主柱穴と考えられ，深さ10数cmである。床面の状態は，西コーナー付近，炉址の南側，東壁際の壁溝の内側が黒色土による貼床であり，他はロームをそのまま床面にしている。土器1～4はすべて床面直上から出土したものである。

3号住居址出土土器（第41図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1		平底。	砂っぽいため整形不明。橙色。	
台付甕	2	口径(12.5) 胴径 14.5	頸部「く」の字状に屈曲し，口縁部直線的に開く。口唇部外縁にヘラ状工具による刻み目。胴部ほぼ球形で最大径中位に存す。	外面タテハケ整形。口縁部内面ヨコハケ後ヨコナデ。胴部内面工具によるナデ。にぶい橙色。	
甕	3	口径(10.6)	頸部鋭く屈曲し，口縁部ほぼ垂直に立ち上がった後外反して丸い口唇部に至る。	口縁部ヨコナデ。胴部外面ヨコハケ(?)。内面工具によるナデ。にぶい褐色。	
台付甕	4	底径 (8.7)	脚台部内弯気味に開く。	外面ハケ整形後ナデ。内面工具によるナデ。にぶい黄褐色。	